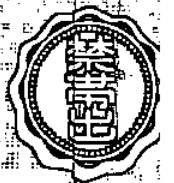


鹿児島県史料集 (VI)

諸家大概 別本諸家大概

職掌紀原 御家譜



監

[illegible] $\mathbb{H}$

允故
 (以下同じ)
 朝
 号阿多
 二
 雖有之
 難見分
 二
 申候由
 柿本原氏
 罷下り直
 三浦氏
 閑々原乱後
 南郷
 名乗来り候
 御供仕
 庶子
 御座候延
 七年丁未七月
 罰役
 近代
 下右衛門
 御家老衆
 被仰梅其後
 被仰由
 補之
 一量目
 相勤申候
 此隠所兄
 別
 御役所の相立
 御馬預
 とかめ(以下同じ)
 相定安永
 最御
 御細工奉行
 御看経方
 横山
 正月右膳
 御國方
 格
 八郎兵衛之御返屋守被仰付置
 御島頭
 只今の通と
 御使者杯
 安永九
 御裁許方
 天明七
 正勝政由政昭
 久俊・昌親所氏
 久東久当夢子
 錦保丸
 女子系實代……初嫁蛟野
 備後守成兵衛
 女子於厚

鹿兒島県史料集（Ⅵ）

諸家大概

別本諸家大概

職掌紀原

御家譜

刊 行 の こ と ば

鹿児島県史料集第六集目として、今回「職掌紀原その他」を発行することになりました。

この史料集は、県史料刊行委員で、鹿児島大学法文学部教授桃園恵真氏の手によって、編集ならびに校訂・校閲すべての作業がすすめられました。長期間にわたる先生のお骨折りに対して、深く敬意を表します。

県史料刊行も、今回で七冊目を出版したことになります。最近、地方史の研究が非常にさかんになっていますと、私どものこの事業が少しでもお役に立てば幸いに存じます。

昭和四十一年三月

鹿児島県立図書館長

久保田 彦 穂

凡 例

一、本書は表題に示す如く、島津家の大体を知るに便利な史料四部を収めたものである。内容必ずしも信頼し難いが一通りの知識を得ることができる。

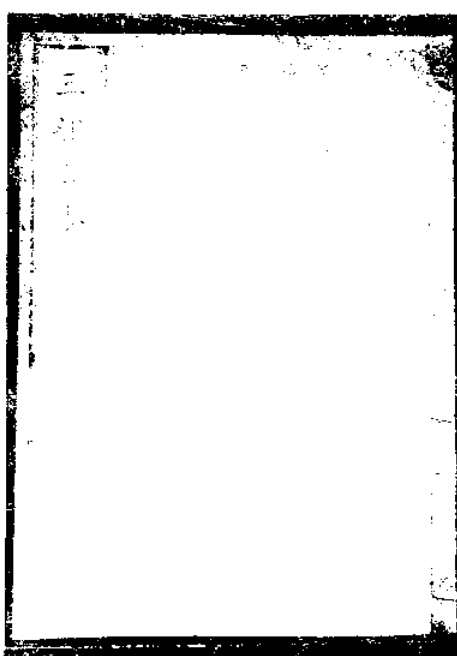
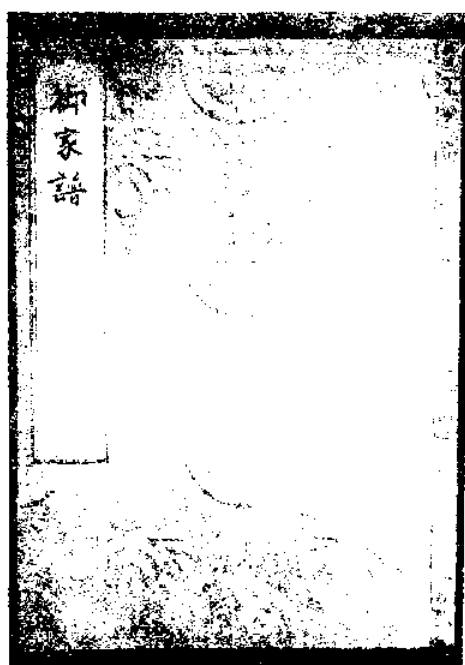
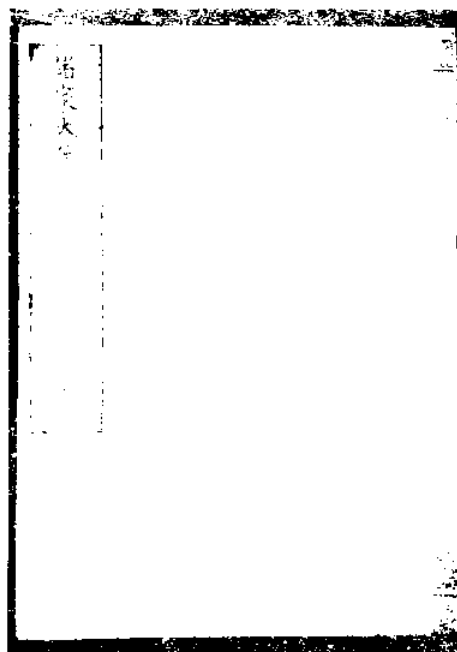
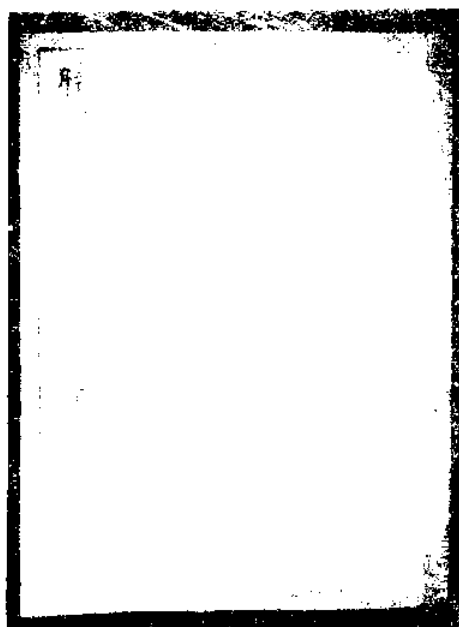
一、底本としては鹿児島大学附属図書館本（以下大学本と略称する）を用いた。ともに明治二〇年乃至同二十一年の写本で原本・異本は今のところ所在不明である。

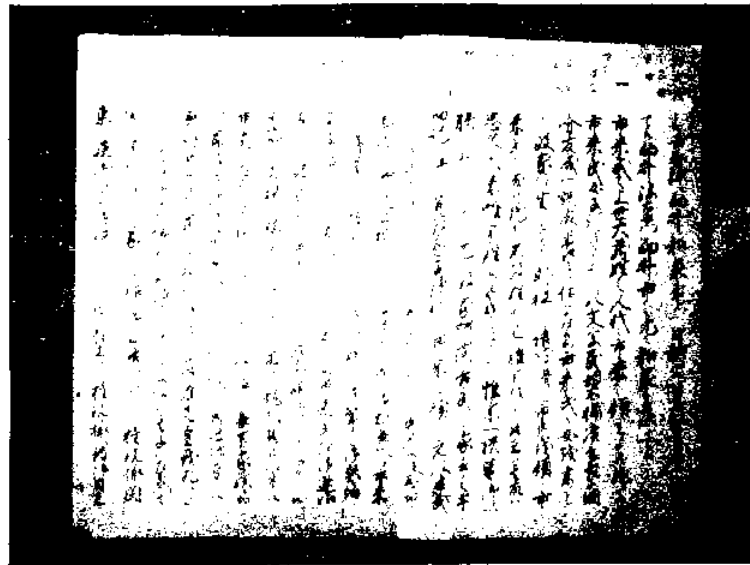
一、鹿児島県立図書館本（以下図書館本と略称する）諸家大概の原本は大学本であり、図書館本日職秘書及び御役元記は大学本職掌紀原也、図書館本御家中二十家考証は大学本別本諸家大概とそれぞれ同内容である。

一、印刷の都合で漢字は当用漢字に改め、変体仮名・片仮名はすべて平仮名に改めた。又「者」は「は」、「之」は「の」、「よ里」は「より」、「越」は「を」の如く、現代風によりやすくした。

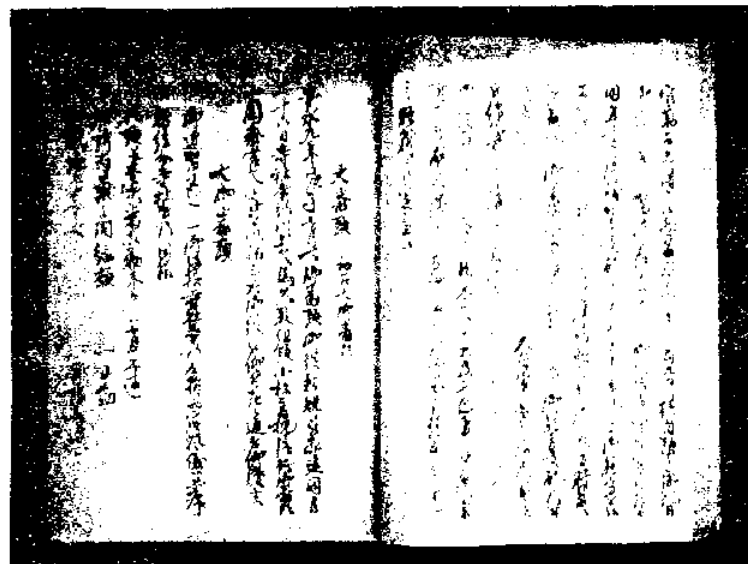
一、枯損の箇所及び欠字は字数によって□又は□□で示した。なお明らかに誤りである部分については若干訂正した箇所もあるが、そのまま収録したところもある。

一、編者並びに校訂者は鹿児島大学桃園恵真である。





諸 家 大 選



職 掌 紀 原

(原表紙)

諸家大概全

(原寸縦二七糎、横一九・五糎)

諸家大概序 異本ナシ

一 寛文九年己酉之春 緒貴公命大田小平次久知河野六兵衛通古御一門は不殘他家は古昔より一所を領し候家と世々被任御家老職候家計廿四家を撰出し支流に至迄古系図及文書或は其家々の書出しを以致差引關疑摘要相記候廿四家は。比志島。川田。敷根。禰寝。田代。種子島。平田。肝付。鹽娃。北原。東郷。祁答院。入米院。高城。菱刈。三原。村田。鎌田。山田。伊地知。本田。伊勢。吉田。上井也。都て廿冊為一帙号新撰系譜致拜呈候事

一 忠久公受三州之封御入国五百余年也其時供奉の家数多也其以前より三州に居住しける家の子孫も在り鎌倉三代將軍の後 頼朝公の旧好を慕ひ又は先君の仁風を仰ぎ御家臣と成るも有或は古來国主城主の子孫有故没落し來者もあり其外無際限事左に相記候事

一 古來曆々の家不幸而系図文書紛失し其家々の子孫も何様の血脈其不相知人多く在之候事

一 幸にして系図文書持伝候人の子孫計曆々の様に有之事乍然不見旧記世人の口碑にもなき家は為差立にて無之と大方可心得事

一 古昔貴顕の家衰微子孫或為農工商漁或為家僕者も有之候事
一 家の寄藏而不出于世神社仏閣に奉納する旧記文書猶多し因是不詳知家有之候事

一 雖載旧記疑事は關之雖伝聞伝称可信取之故見者可察之事

一 新撰系譜呈上の後通古在東武の時 綱貴公上意有之候は此外にも系図致所持者可有之候と御尋故通古於旅窓下大概語に覽候家を記し号諸家大概奉呈上候是酒匂氏以下數十家也其後大同小異の処一冊朱書之奉獻候此冊も亦酒匂氏に始り及右の數十家も不殘相載之候雖似重出致増補之候且以數百家令増添之候事

一 新撰系譜は領知の在名或御家老職地頭職武功拔群の人或は戦死の者

を相記候其家の嫡家は病死の年月日を相記候此冊は尤領地御家老職及地頭職御用人役迄は相記其外は依其人奉行職迄も相記候且又關ヶ原戰場より致供奉候士五拾四人有之候此衆も書入候も有之候又記不申候ても不苦候は其通にて相記候全非遺忘候前に御供の記一冊有之候間見合候は、可相知候事

一 此冊所及見聞迄を相記候不免他人の電覽候得共誤のみ可有之候事決定に候必以討論之削誤歸正事尤以肝要也若無此志て見此冊者必可禁之事

一 此冊尤雖可書終之不載此冊諸家猶夥し後來考見旧記及其家系可書加之以故不終筆候事

一 雖漏脱此冊必以其漏脱の家勿為卑賤至今始見の系図文書に曆々の家有之露耳目も有之候事

一 新参多く雖有之可相記序有之候家は大概書加候尤近年被召抱候家は不及載候

諸家大概乾目錄

酒匂	猿渡	一執印	一權執印
一分	五代	一平野	一羽鳥
一向井	市来	一川上	一大寺
梶原	左近允大迫	一鯨島	一阿多
一類娃	一指宿	一加世田	一知覽
一谷山	一是枝	一益山	一別府
一藤摩	一若松	一吉留	一宮原
一仁礼	一富山	一火始良	一浜田
一志々目	一有馬	一長谷場	一長野
一平山	一松元	一平瀬	一蒲生
一谷川	一脇元	一鹿屋	一岸良
一葉丸	一津曲	一梅北	一安樂
一廻	一石井	一池袋	一肥後
一財部	一上原	一加治木	一郡山
一枝次	一否笠	一小山田	一小川
一税所	一姫木	一重久	一岩切
一八木	一土持	一海江田	一和田
一高木	一宮之原	一有川	一伊勢
一桑波田	一長野	一柏原	一二階堂
一大川平	一永井	一高橋	一吐師
一花川	一後醍院	一志岐	一城井
一山鹿	一田尻	一志賀	一戸次
一阿蘇	一入田	一伊束	
	一奈良原		

九拾貳氏

諸家大概乾

一 平姓酒匂氏元祖は梶原氏の二男刑部丞朝景相州酒匂を領し為家号候朝景事頼朝公に奉仕す東鑑に歴然也朝景子左衛門景貞にて候哉 忠久公御誕生の時より為御守役其後御入国の致供奉被補御家老候 頼朝公御吉例の御母衣の由にて 忠久公へ被進候御幼年の間酒匂致格護御成長の時分可致進上との上意と申伝候又酒匂氏には御太刀一腰被下候銘行親と有之是は長州岩屋にて為作由候此銀治天國同時の由候右母衣干日不致潔濟候得は拝見不成とて近代拝見したる者無之候御太刀は一年に一度つゝ一七日致潔濟拭仕候寛文の初一乗院快意法印以貴命被致拝見候然共委儀不相知候御母衣に何ぞ書付過分に為在之と快意咄申候由承候酒匂氏自 忠久公至 貞久公五代の間本田氏と両家被補御家老候酒匂次郎左衛門久景同左衛門四郎忠胤同次郎左衛門貞資入道道阿同兵衛入道称阿同入道得貴同入道貞阿皆御家老にて候 貞久公以酒匂氏師久公に被附進候久世於千年堂切腹の時川辺の城を守候内に酒匂紀伊守と云者有師久公の子孫衰微故酒匂氏も衰へ申候哉と存候紀伊守か孫大永天文の間酒匂新左衛門川辺日当山地頭職夫より又新左衛門源左衛門と云有源左衛門は永録四年典厩忠將と一所に廻にて戦死す其子新左衛門景宗是酒匂利左衛門父か利左衛門養子大藏兵衛此家嫡流故御母衣御太刀世々致格護 公儀より宝蔵被仰付置候蒲生士酒匂某佐土原の酒匂源左衛門此二男家の由候酒匂兵右衛門並志布志士酒匂某も右之庶流にて候嫡家系図紛失右不詳

書異本

一 平姓猿渡氏所自於系図不分明候 忠久公御入国に致供奉御劍役相勤候は猿渡藤四郎美信にて候中古然と見得不申候 貴久公御代猿渡大炊介と申者天文九年の御火手組に見得中候其子猿渡大炊介入道休覚御使役並所々地頭職被仰付候其子孫勘左衛門迄も御使役相勤候勘左衛門子新介迄地頭職被下候其子猿渡十郎右衛門是嫡家にて候猿渡喜右衛門元祖は二男家の由候 義久公御代彼先祖猿渡越中守所々地頭職被仰付於方々軍功有之候越中子猿渡掃部兵衛於高麗五奉行よりの為御使大明境

元良哈加藤清正の陣所、此方御家中衆可被遣候間可被仰付由有之掃部兵衛と敷根仲兵衛兩人被仰付足輕數拾人被相附廿日路余りの敵中を通り首尾罷歸り候此時、義弘公久保公より兩人に御感状を被下石田治部少よりも褒美の状被遣候掃部御歸朝の時鹿島番船にて戦死仕候越中以來代々地頭職被仰付候越中嫡孫喜右衛門にて候帖佐士猿渡少左衛門は此二男家の由候

一 惟宗姓執印国分五代平野羽島皆此一族にて候執印の元祖康友は千台新田宮の執印職にて直に以執印為家号候と見得申候執印職の事は上世禁裏御政務の時從上方為執印職御下国候然るに及度、舟破損有之に付難儀に被思召上候哉康友を執印職に補せられ候出申伝候又旧記を考るに執印職之事は初より当国千台の住人被補之処に堀川院の御宇其人牢籠のこと有之其後何某執印職相勤候哉其間誰人共不相知候從夫此以康友被補彼職候か執印職は祭祀の時於神前印を執候以此職社中為第一の出候執印氏は新田神領を司り元弘建武の亂に率多勢於所々勞軍務候尊氏將軍並御家代々の御証判其外の証書數拾通致頂職候嫡孫執印久馬介にて候又別に權執印氏と云者あり此は此執印と別に勤有之と云々權執印氏上世より在当国けること文書分明也成程繁榮して將軍家並諸將の証判數多有之候權執印は紀姓にて執印氏とは各別の家にて候權執印子孫于今社家にて候

一 国分氏は元祖友久也安樂寺領天満宮国分寺と号す寺一ヶ国に一寺つゝ有其寺領を司り国分を家号とするか又千台天満宮の社を司るか其故は上井勢州の日帳に天満宮の国分殿と記す其上于今嫡家国分次郎右衛門宅地に天神を奉勧請候此家中古不詳候高麗御出陣前諸士に被仰渡候は此度自力に高五百石の軍役相勤候は、帰朝の時高五百石可被下由候其時国分左京自力に右高の軍役に致渡候御出陣前高貳百五十拾石被下候其類五六人有之候帰朝の時殘高の儀致言上候処に被仰渡候は国分氏は千台天満宮社領八町を主取私領無之候間右の高にて可然との由候左京子国分十右衛門地頭職被仰付候其孫次郎右衛門也国分仲右衛門先祖国分但馬其子帶刀兩代御別當仕御心安被召仕候其外の国分皆此一

族たるべく候

一 五代氏は元祖康忠新田宮に五代院職と云有阿多郡五代院政所とて有文永の頃五代院右衛門尉友清と云有五代も職名にて院の字を略し候哉上世不詳候立久公の御時五代鎮前守致上京所司代浦上美作守より還候書状有此一族御犬追物人數にも被召加候此子孫五代右京入道友慶、義弘公飯野に御在城の時御家老役仕地頭職被仰付候友慶於木崎原伊東加賀守を討取候其子五代少左衛門も地頭職被下候於高麗唐島五百人必死の処に伊勢貞昌鯨島筑右衛門少左衛門三人被遣列來候為御感高石つづ被下候夫以來代々地頭職被仰付候五代正助曾祖父五代舍人は友慶二男にて候高麗並伏見の城番に一番羅仕候閑ヶ原にて御奉公仕候五代舍人五代喜左衛門は右の舍人弟筋にて候

一 平野氏元祖は友家也上世中古不詳候、義久公御代平野丹後友治地頭職被仰付候其子丹後入道政友御使役並地頭職被仰付候其嫡孫平野六郎左衛門其子孫九郎にて候処に直子無之故二男家の平野仁右衛門に系圖文書を致附屬嫡家に召成し候此外の平野氏皆共に此庶流にて候

一 羽島氏は元祖友貞羽島並向山邊を領し号羽島候嫡家は末古上羽島新兵衛衛羽島藏人の間と見得申候兩家共に慥成文書致格候就中新兵衛文書御家御代々の御証判其外所持申候飯野の羽島某も文書所持申候羽島氏の二男家に向井氏と号候有之此子孫に向井和泉事、日新公に奉仕有名の士にて候向井弥右衛門向井市之元は和泉子孫にて候

一 市來氏は上世大藏姓の人代、市來の領主にて候然るに市來氏女子計にて候処に八文字民部太輔、言養子国分友成一族故に養子に仕候左候て市來氏の女を妻とし政家を生ける故に外祖の讓を得て市來を領し市來氏と成候然共不改姓如元惟宗姓にて罷在候其故は忠久公以來惟宗姓にて被成御座候に付惟宗一族皆御一族のおもひをなし己に政家阿蘇谷氏と家争の事由記に詳に有政家子孫代々市來を領し元弘建武の比市來太郎左衛門氏家軍務に勞候、氏久公從志布志為、師久公碓氷の城に後攻可被成と御出張候を市來氏薩摩山を指塞候因茲御和睦にて御誓の御契約有通路を開き候寛正三年、立久公市來氏を御退治有夫より致衰

微候市米小四郎は政家嫡流と見得申候小四郎曾祖父備前其子小四郎向
代地頭職被仰付候市米八左衛門元祖は政家孫時家他腹の長男家統にて
候家統子孫市米美作守以來代々地頭職被仰付候美作子市米軍介於新納
院高城進先登戦死いたし候其子市米備前は加治木に御奉公仕候其子八
左衛門は関ヶ原戦後 家久公始て御上洛の時 権現様御東に還御故御
使として被差上 権現様へ致御目見御使役被仰付候市米八左衛門は
孫にて候市米内蔵介曾祖父市米内蔵介蒲生御手に入候付蒲生松坂の地
頭職被仰付候市米与左衛門は於高麗新寨戦死仕候市米清十郎孫にて候
市米千左衛門市米勘左衛門先祖代々御奉公仕候市米次郎左衛門市米次
左衛門祖父市米備後 竜伯様に被召仕候此跡を向人親に御分被成被下
候次郎左衛門親治十郎代地頭職被仰付候皆小四郎八左衛門家の庶流に
て候其外にも市米氏数多在之候得共不詳候政家弟筋に河上と号又橋口
共号候在此河上氏の嫡孫高岡士河上家右衛門にて候文書等過分に致所
持候且又旧記にも見得申候

惟宗の姓執印国分五代平野羽島市米氏皆八文字民部大輔広言子孫に
て候市米氏は上代より大蔵の姓市米の領主にて代々罷居候処に郡司
大蔵の成家男子依無之広言孫の政家市米郡司智猶子に罷成家を致連
統候其子孫 貴久公以來別て被召仕候市米小四郎元祖は市米太郎政
家其孫美作守時家の二男氏家次男にて候得共本腹故家を統候氏家の
兄家継は中村を領し中村太郎と名乗候子孫有之候氏家一流備前政家
其子小四郎家朗而家共地頭職被仰付候

大寺氏は其所出不相知候得共惟宗の姓にて右の一族たるべく候大寺
彈正左衛門と申者見得申候又直義卿より大寺弥六に被下候御教書有之
候又 元久公御家老に大寺美作守元幸と申者有之候 久豊公迄御家老
仕候 其子大寺彦左衛門忠幸入道幸頼は 忠国公御家老にて候代々草
牟田を領し候 立久公より勝久公迄大寺治部少輔安勝入道首御家老
仕候代々地頭職被仰付候 勝久公御没落故衰申候哉と存候契久方に大
寺忠岐と申者有之候此子孫共不知知候 貴久公御代大寺大炊介事所々
地頭職被仰付候忠得一所に於廻戦死仕候其子大炊介於豊後梓越戦死仕
候大寺弥五右衛門此嫡流にて御座候弥五右衛門親喜左衛門迄は代々地

頭職被仰付候大寺弥兵衛曾祖父大寺刑部は大炊介弟にて候刑部馬越に
て戦死仕候右の惟宗の一族薩州の御家人と見得申候

一 平姓梶原氏は梶原景時三男平左衛門景高の後裔なり上代の儀不詳候
忠昌公の御母堂梶原三郎太郎弘純の女故此弘純一族致繁榮候哉 立久
公忠昌公の御家老梶原備前守景豊に被仰付候弘純嫡孫子宿村に罷在農
夫にて候処 寛陽院様御葬礼御役者相勤申候に付御赦免被仰付候是嫡
家と見得申候景豊子孫は梶原善左衛門と系図には見得申候梶原氏は辺
川七人の内にて可在之候中古迄成程栄中候 忠久公に致供奉下国仕候
左近充と申称号候は梶原左近充にて候を直に称号に唱米于今家号に成
候中頃には北原共号候亦大迫其名乗候今亦左近充に成左近充四郎左衛
門嫡家にて候其外の一族並大迫氏此庶流の由候

一 平姓鯨島氏は阿多頼桂指宿加世田知寛谷山是枝益山別府薩摩若松宮
原吉留氏など一族にて漸々に分れ候 忠久公御下国前より薩州の住人
にて候永万の頃別府五郎忠明阿多地頭と旧記に見得たり皆比一族号別
府候と被見得申候元暦の頃平権頭景忠平家方人故其跡を頼朝公鯨島に
給ふと申候景忠本より阿多を領し号阿多平四郎忠景候又景忠共書申
候古昔実名を上下に書違候事多候此一族は忠景子孫か其跡を鯨島に
被下と在之事不審然共京鑑に鯨島某と在鯨島は此一族にては無之候哉
と存候其上鯨島は駿州の在名也阿多鯨島の系図雖有之源平藤橘悉有名
士は系入不分明候又權成書に見得候系図も雜有之究て難見分候古き文
書に立澄の舅平権頭景忠と有り東鑑に天野藤内遠景字都宮弥二郎信房
相共に貴海島を可追討の由被仰付件島占来無飛船帆者て平家在世の時
薩摩国住人阿多平権頭忠景依家勅勘遂當干彼島之間為追討之遺筑後守
家真と在或鎮西八郎為朝の舅其忠景又立澄の舅と旧記に在り 忠久
公品津の御莊御拝領の時 頼朝公三國の御家人は 忠久公御家人たるへ
し但鯨島は除と申候得共權成証書無之候間難信用候建久八年の薩州
凶田帳に阿多地頭佐々島四郎と在然佐々島事無疑薩州の御家人と見
得申候此一族の内阿多指宿証知寛谷山薩摩若松など元弘建武の頃迄
名字の地をふまへ候鯨島刑部系家高法印行願室治の頃振威勢候又建武

の頃鮫島彦次郎入道建道属官方 道鑑公に奉敬候其子孫は鮫島土佐入道雙月 日新様に奉仕被補御家老職候雙月子鮫島又左衛門於三山戦死仕候其子孫田布施士鮫島刑部左衛門にて候是嫡家と申事候得共不詳候雙月方々地頭職被仰付田布施地頭の時より子孫此地に為罷店中候鮫島藤内先祖鮫島備後も 日新公に奉仕彼御領内の時泊の地頭被仰付候其子小藏にて候此備後嫡家共書為中物在之候鮫島幸左衛門先祖筑右衛門は高麗御出陣前被仰渡候は此度自分五百石の軍役相勤參候はは帰朝の時五百石可被下と在之に付筑右衛門五百石の軍役に参り候出陣前に式百五十拾石被下候筑右衛門唐島にて五代少左衛門其外同前に御奉公仕候に付為御褒美高百石拜領仕候致政朝義高式百五十拾石の儀申上候得は御約束の儀其通候得共此鮫島は僅田二反持為中人にて候間式百五十拾石にて勤忍可仕候御手頃の儀無別条候得共其通に畏り可申由候石の類衆国分左京二渡次兵衛老較少左衛門の由候国分は初めに書記候二渡は波谷家にて致御敵対候間式百五十拾石にて可然候老較は伊東先方にて敵対申候間是も式百五十拾石可然と一々に鎌田出雲守政近口達の中候筑右衛門養子五郎左衛門は鎌田左京二男にて此代初て地頭職被仰付候鮫島与一兵衛先祖鮫島日向入道孤舟は 日新公に奉仕浦地市中心と同前に被召仕候其外の鮫島は不詳候

一 阿多は 元久公の御家老阿多加賀守時成指宿を領し候 元久公有御上落 義持將軍の御成の時平田右馬介と兩人御内方にて致御目見候此子孫か 日新公の御内に阿多加賀守と云者 貴久公を 勝久公御養子に御契約有御対面の時御太刀を持候と有之候此子孫阿多嘉左衛門の由候代々地頭被仰付候其子孫阿多掃部の兄に源左衛門と申者在之候源左衛門家は少身にて然と見得不申候掃部は天正の時分も見得中候此兄弟町田の庶流但馬守と云者相州家に入候と古系図に見得中候此家たるへし然に先年掃部は他家と申立候源左衛門弟は無別儀と見得申候源左衛門家の系図但馬守兄の佐左衛門よりつり出し申候得共家のたかき方につりなしたるか但馬は僅に相州家に入候得は此子孫か日新公御方へ阿多但馬と云人在之候此を以考候得は此但馬無疑今内藏之允家には町田家の系図有之候掃部先祖は右 日新公御内の阿多但馬かと存候宗

養法印の状など之候歳久に被相付候阿多若候と中者在之候吉田の地頭など仕候今子孫丹波家中に罷在候阿多掃部嫡家にて候

一 頼雄氏は逆心故応永の頃 久豊公御攻取頼雄の一族小牧氏に被下候得共是も逆心故又々御攻取 久豊公未御二男の内頼雄を御領被成候故南殿と唱申候其後 久豊公移左の城代に御移の時肝付河内守兼元の二男美作守兼政に頼雄を被下頼雄と号候其時 久豊公より藤原の姓を被下御家三男の御取持に可被成との事候得共姓は差上如元伴姓家にて罷在候其子孫頼雄山川指宿を領し候此等の契約故候哉御犬迫物の時島津某と代々名乗射手に列候 義久公より頼雄左馬介に御当家の由緒在之中にて久の御字拜領候て子孫迄嫡家名乗來候犬正年間迄も右の所々領し來候頼雄左京嫡家にて候右の通御家三男の御取持に可被成との事申伝候哉近年迄正月二日の頼雄氏座配などは余の他家より高く候頼雄少左衛門右の座流にて候

指宿氏は元弘建武の頃迄も繁栄仕 尊氏將軍並御家代々其外の証判数拾通所持申候高圓の指宿左近兵衛嫡家にて候指宿主税先祖も 義久公御代御心易被召仕候此者も文書好所持候

一 加世田氏上世中古迄然と不相見得候近代少々為相知も在之候加世田諸兵衛同氏七右衛門など其外にも同氏有之由候

一 知寛氏は元弘の頃足利直義朝臣御教書有之候得共子孫何某共不相知候尤越前島津の庶流知寛氏格別にて候 種子島之家臣知寛才兵衛越前島津の庶流にて候都之城田布流にも此末流在之候

一 谷山氏元弘建武の頃など別て致繁栄就中谷山入道覺禪同仏心など道鑑公の御敵となり此一族共鹿兒島に押寄度々取合在之候嫡家は谷山次郎右衛門の中候中古よりは然と不見得候次郎右衛門曾祖父谷山紀伊介其子次郎右衛門桂神祇忠助の加勢に平佐城に走籠紛骨を尽候と申事候谷山孫右衛門祖父孫右衛門は頼雄氏の家人にて後昵近と罷成夫婦共江戸え長詣仕候其外の谷山も皆次郎右衛門一族と存候

一 是枝氏は伊作の是枝名を領知す山記等に見得申候永録の頃は枝胤防坊山伏に罷成候哉又其以前より山伏かとも見得申候天正年間間は枝大膳坊方々御使など相勤候所々地頭職被仰付惣職にて先は宝泉坊に致仕持

後に因分え被召列候て彼地え移候従夫代、地頭職被仰付候是枝喜右衛門は大膳坊子孫にて嫡家の由候加治木の是枝治部右衛門は大膳坊二男存力坊子孫にて候此外の是枝も皆此庶流と存候

一 益山氏は加世田の内益山を領し候旧記等に見得中候子孫何某共不相知候

一 別府氏は加世田の別府を領し候嫡家不詳候仁礼氏部左衛門祖父仁礼信濃後に藏人初は別府小吉と申候其初は東房の由候此親 家久公え初て被付進候而人久保七兵衛と小吉父の由候小吉若年より被召仕御小姓相勤候幸御手討の時走寄留を討候御感に御加増被仰付後に御使役並地頭職被仰付候其子主計も藏人同前に被召仕候当民部左衛門初て与頭被仰付候藏人二男惣大次儀地頭職被仰付候藏人事仁礼に罷成候事は家久公御代に御大の時仁礼覺左衛門祖父宮原左近と互に相論に罷成候其故は藏人より別府は仁礼の小名字にて候間仁礼を名乗可申由申候左近中候は別府は宮原の一姓にて候間罷成申間敷なと申候就夫御前より御分被成候也藏人は別府の仁礼左近は宮原の仁礼と在之格別の様に罷成而人共に仁礼に罷成候て御大方相勤候別府長次郎曾祖父別府主殿家久公被召仕候其子別府式部左衛門代初て地頭被仰付候此先祖は別府の小名字大浦にて候処に別府に罷成候加世田の内大浦と申所有之候大浦入道連阿と申古旧記に見得候別府仙左衛門は長次郎二男家にて候

一 薩摩氏は元弘の頃迄は旧記に見得中候得共子孫不相知候定て只今は此子孫も別府名字に為罷成かと存候

一 若松氏は吉利の内若松名を領し申候哉と存候 將軍家の御教書在之候夫より少々見得申候此子孫の若松数多有之と見得中候得共嫡庶不詳候尤伊作家の若松氏とは格別にて候文書の年号相違申候間伊作家の若松氏の文書にては無之候

一 吉留氏の古文書等に少々見得中候吉留為左衛門曾祖父は蒲生辺に罷在由候其後加治木に為罷居由候又外域にも吉留氏在之候

一 宮原氏はも加世田の内宮原を領し候仁礼覺左衛門祖父仁礼左近迄は尤宮原にて候彼系図を見候に惟喬親王より系候て仁礼親王の末と有之候此平姓の一族にて候はは此系図の通には有間敷と存候今考るに此平

族の内に罷成候て有之候得共何かと六ヶ敷儀と存候て如此中古已上の儀を仕直し為申儀にて御座候哉認他祖為已祖候乍然ケ様之儀中々難計儀候間能く考見可入儀候平姓の名字無別儀候仁礼覺左衛門先祖宮原筑前守景稔貴久公御代より別て御奉公仕地頭被仰付候軍功有之於肥後限之庄七拾余歳にて戦死仕候夫より代々地頭被仰付宮原左近入道秋扇なと別て御奉公仕候親仁礼覺左衛門より御使役被仰付候仁礼与三左衛門仁礼二左衛門は覺左衛門二男家にて候仁礼作右衛門は右の庶流共不相知候天正の頃の宮原越中と申者の筋目にて候越中より代々於所々戦死仕候宮原半左衛門先祖宮原軍人は 自新公御代於加世田間之瀬川肥後掃部左衛門并尻四郎左衛門三人 自新公御大事に究り御戦死可被遊と御座候時三人諫言仕御名代に三人共に戦死仕候夫故御遺被成候軍人子孫於所々戦死仕候半左衛門祖父宮原主計事は惟新様を被召仕為御使者江戸駿河え板差上 維新様台徳院様え致御目見候伊集院士宮原次右衛門主計弟筋にて候天正の頃、惟新様御方え宮原伊賀と申者有之候此子孫何某共不相知候宮原少右衛門曾祖父宮原宇兵衛加世田土宮原右京なと御奉公別て為仕由候將又志布志にて 氏久公御資被成候梶井頼仲は格別の家にて候信濃源氏の末流宮方にて大勢を率したる者故に 氏久公御軍勢被遊由候仁礼氏部左衛門此子孫に系候は大成儀にて候此系図偽作付候儀相知候

一 源姓富山氏は日向国の御家人にて候東鑑にも日向国の住人富山次郎大夫義良と有之候し北条義時より 忠久公え被遊候御状に富山刑部母子可被召上出有之候文書彼家に所持由候を致進上候此子孫漸く致衰微果の城主土持に致隨身候上持氏御改易の時土持に相付御当國に参り候干今上持准之充家来にて富山次郎右衛門と申候文書數通所持申候

一 藤原姓富山氏は隅州の國人にて此一族大始良浜田志志日横山得丸波見山下なとにて候大始良子孫は富山十兵衛先祖にて候御家の御判の文書向通所持申候中古に本名に為罷成と見得申候浜田子孫浜田民部左衛門入道永林武功拔群の者にて候 秀吉公薩州を御勤座の時連 台職御手鑑並高五百石拝領仕候得共高は御断申上返上仕候永林八拾歳にて 竜伯様え致殉死候此永林初は村田右衛門佐に相付於所々致軍勢候附衆中

にて可有之と存候志々目の子孫は肝付主殿家来志々目正兵衛文書數通所持仕候横山得丸波見山下等の文書も少々つつ所持申候も在之候此等の子孫何某共不相知候當山九右衛門祖父は中務家久に被相付候家老仕たり共申候當山權右衛門養曾祖父當山備中 惟新様え御心易被召仕候如右源藤兩姓の様に見得申候得共其初は一姓にて可在之を中古より兩姓の様に仕なし候かと存候大始良己下の一族共肝付辺の在名を名乗候

一 有馬氏は藤原純友有馬王子姓源姓平姓藤原姓長谷場氏の一族など流々在之候有馬次右衛門系図にて考候得は源姓足利氏の庶流肥前的高木郡に下り有馬を領し候哉其後号有馬其嫡流有馬次右衛門にて候慶長の頃祖父有馬次右衛門佐多地頭被仰付候次右衛門於高麗小早川隆景立花宗茂毛利の久留米の陣所へ御使者に被遣候処に敵寄の由相聞得於彼陣手に合申候有馬新右衛門同次郎右衛門同次兵衛は右の庶流にて候新右衛門養父勘左衛門より地頭被仰付候勘佐門養祖父有馬民部左衛門は蒲生より加治木え被召移後に鹿兒島に被召成候其外の有馬氏右流の余裔と見得申候得共不詳候間不及記長谷場一族の有馬は日州延岡の城主有馬周防守殿先祖の由候曆応の頃矢上左衛門次郎高純權馬楽の城に榊籠振逆意候 道盛公御退治被遊肥前に出奔し有馬に住し家号となし候然共右馬次右衛門先祖も高木に下り有馬と号たると有之候得は同事候兩様難死事多々在之難尽筆紙系図を以て考見候はは可相見候矢上氏有馬に改候儀在之と存候足利流に系候儀無心候

藤原姓長谷場氏は上世より國人にて候 志久公の御時よりの旧記に鹿兒島郡司と在之は長谷場氏にて候と存候道盛公鹿兒島の兇徒を御退治と有之候は此一族の矢上などにて可在之候元弘建武の頃長谷場十郎兵衛走廻り候者にて直義朝臣の御教書其外証判數多在之候福昌寺地は長谷場六郎久純宅地にて候を元久公御所望被遊福昌寺を御建立可被遊と被思召長谷場へ御所望候惣て彼遊を長谷場と申候候今内の丸川筋小路を長谷場馬場と唱候右の由緒故已來長谷場氏に疎意有間敷と福昌寺住持如岳和尚墨付遺置候 竜伯様已來代々首尾克被召仕長谷場源介養祖父長谷場兵右衛門より地頭被下候源介嫡家にて候加治木の長谷場伝右衛門曾祖父長谷場筑後初は織部介と申御祐筆にて心安被召仕候長

谷場伊角養祖父長谷場主膳にて候主膳事長谷場兵右衛門叔父にて候長谷場伝兵衛は筑後弟にて候伝兵衛は於庄内御陳戦死仕候

一 中原姓長野氏は系図紛失故不詳候 元久公探題に御山の時長野酒匂伊知地伊集院など相動候儀在之候事旧記御座候 元久公御上洛有之義持將軍へ御参り可被成候時騎馬の御供犬寺長野兩人と有之候犬寺は其時御家老にて候得は長野も余りおとらざる威勢かと存候 元久公喜入の凶徒を御討被成上永吉を大寺と長野左京に半分つつ被下候と見得中候福昌寺の仏殿奉加帳にも長野中原助豊長野左京亮助家と在之候御譜代に御奉公仕候儀無別儀候御諏訪社役川上伊集院新納町田伊地知本門鎌田長野八家にて候兩家つつ組合勤来候指宿衆中長野宮内左衛門嫡家にて其外は此庶流にて候

一 紀姓平山氏の一族飯市成平瀬平松松元などにて候其外にも在之候平山氏は城州石清水善法寺の一族正宮の御社領為支配罷下り直に帖佐の平山の城に罷在候上世は蒲生吉田帖佐並栗野悉正宮の御領と見得申候其外にも古岡國帳に弥勤寺領と在之は皆正宮の御領又安永寺領と在之は天満宮の御領と見及申候彼平山一族罷下帖佐の新正八幡を致創建彼辺悉領地仕候元弘の頃 尊氏將軍丹波篠村より被下候御教書其外証判過分に在之候此家の文書写太方正宮の社家中に所持申候成程繁榮仕候由にて 氏久公より平山家二代御養子に被遊御名称号並御家字致拜領名乗申候由にて近年迄一族共名乗來り候得共系図計にて不備候間差上申候福昌寺奉加帳に平山並罷其外一族中在之候得共一人も御家の字無之候平山氏事豊州季久帖佐を被領候時逆意故被攻亡子孫衰微仕候此子孫平山永岡 惟新様え被召仕候御状にも相見得申候永岡曾孫平山五郎右衛門嫡家の由一族中より証文出し置候儀は帖佐山田の内職を領し罷と号候永録の頃飯部兵部左衛門豊州に相附福島え罷移軍旁仕候夫より已來相見得申候平山八右衛門は飯の子孫にて候平山伝次郎は八右衛門二男家にて候近代本氏の平山に罷成候天正の頃市成掃部兵衛事別て被召仕候此子孫平山城之介平山内蔵介にて候是も木氏に近年罷成候平松平瀬などの子孫不詳候松元も其家誰共不存候平山次郎右衛門養祖父平山對馬初は此松元氏にて候処に豊州家の平山跡断絶申候を 惟新様豊

州久賀へ被仰被對馬七介と申時より別て被召仕候間豊州家の平山を連
統為仕可申由被承候に付御一家平山後嗣に罷成候松元平兵衛祖父は
和泉と申候て天正の頃相見得為申者にて御船頭の出候松元正左衛門親
は松元正庵と申医者にて候が藤堂和泉守殿へ罷居其後半人仕候を被召
抱候正庵祖父松元是も和泉と為申由候故か右の和泉子孫の様に申候初
は紀州邊に罷居後淺野左京大夫殿へ奉公仕候由候

一 平瀬氏は阿多領主の様に書為申物も在之候得共此平瀬氏にては有之
間敷候只今の平瀬の一族共由緒不存候

一 藤原姓浦生氏は関白道長の二男教通の孫伯と成教清と号横川に住ス
其後宇佐宮の留守職と成り大宮司職と成る其子舜清浦生に來り正宮の
神領を司り八幡宮を觀請し浦生に居住仕夫より代々浦生を領し申候上
世には神領の事且又社人などは將軍家より支配被成事不罷成ず替裏の
御下知と見得申候宮内社家に所持申候文書に浦生吉田兩院は一向神領
也非御家人の上本所忍給の由如何などと在之候神官の事將軍家御家人
並に罷成候事残念に存申候と見得申候八幡の神領及祭祀をも司り別て
繁榮中候尤此家など國衆にて候元弘建武の乱に於所々軍勢の事日記に
詳候 元久公久豊公の御家老浦生美濃守忠清は 元久公御上落被成
義持將軍へ御目見の時國方にて御目見候て美濃守に受領仕候浦生を弘
治の頃迄領米候處に渋谷家に致一味御敵に罷成浦生に頼籠候依之 貴
久公數年御軍勢被遊其後和睦に成致降参候て浦生を差上候浦生越前守
義清代にて候此越前守始男子無之故種了島氏の二男を養子に仕置候後
に男子出生仕候然處に此養子浦生千郎三郎為清と申候与父同降参の後
將軍家に罷近の願申候古山相顯於浜之市場之脇切腹被仰付候義清直子
に跡職を致拜領美濃守に罷成候 伯有様御代より別て御奉公仕被成下
候御書等在之候忠平公よりも被下候御書在之候其子浦生宮内少 竜伯
公へ被召仕候嫡孫浦生正左衛門にて候

浦生家の系圖寛文九年己酉の春上覽の系圖に相載管に候得共其節は浦
生正左衛門古系圖所持不仕候故無是非相漏申候近年浦生八幡の社家谷
川式部と申者浦生の庶流にて候此者浦生家系圖所持仕來差出申候無余
儀浦生系圖にて候木場氏も浦生庶流の出候為清弟を号谷川十郎候子孫

右の社家式部にて候曹洞宗通幻和尚十哲の内量外和尚は浦生清寛の末
子の出候浦生氏自昔提所として永興寺を建候て量外を開山に仕候同所
の臨濟派法聚寺の開山無外和尚は量外舎兄にて候

一 藤原姓脇元氏は浦生為清の弟宗平を号脇元候是脇元を領し候故にて
候建武の頃などの旧記等に見得申候其上直義朝臣の御教書 氏久公御
証判の写など所持申候此子孫脇元七右衛門にて候七右衛門先祖代々於
所々戦死仕候

一 伴姓肝付氏の一族は鹿屋氏岸良氏葉丸氏梅北氏安樂氏津曲氏萩原氏
野崎氏横見崎氏などにて候鹿屋氏は古來より鹿屋院を領し弁濟使にて
候御家より被下候御文書其外証判過分に在之候 元久公の御家老鹿屋
周防介忠兼入道玄兼仕候夫より代々於所々戦死仕候大覺寺義昭僧正尊
有於福島永徳寺御切腹の時鹿屋氏別て御奉公仕候此嫡孫志布志士鹿屋
権左衛門庶流の者加治木にも在之候

一 岸良氏は古來岸良を領し是も岸良弁濟使にて候 元久公より被下候
御証判など所持中候代々肝付家に致隨身其後罷近に為罷成と見得申候
岸良内藏之允某孫にて候岸良勘左衛門は島津圖書家中より被召出候尤
内藏之允一族の由候

一 葉丸氏は代々肝付家に罷在候就中葉丸出雲入道孤雲事肝付省鈞の家
老仕候此後嗣葉丸為右衛門の由候葉丸大炊兵衛先祖は葉丸伊豆と為申
由候是も定て肝付家より為罷出と存候此外肝付家の家人數百人罷近に
罷成候將又渋谷四家伊地知本田北原義利新納豐州家兩殿讀其外一所
衆漸々衰候家之來其數百人つつ罷近に罷成候只今にも大々の家人に
て御座候名為相知人多々在之候

一 津曲氏は指て見得為申者も無御座候去々天正の頃御包丁役仕候に津
曲仙馬と申者在之候此子孫肝付清左衛門にて候清左衛門は親津曲清兵
衛代に嫡家の肝付甚右衛門免許故肝付志摩之允と改申候其外の津曲不
相知候

一 梅北氏は日州庄内梅北を領し候哉と見得申候嫡家代々梅北へ居住仕
候と申候天文年間梅北宮内左衛門於加世田戦死仕候其養子に宮原刑
部左衛門罷成候永録天正年間に梅北宮内左衛門國兼初は足輕大將被仰

付武勇の善有之候故地頭職被仰付帖佐山田の内北山を領し申候高麗入の時宮内左衛門事企陰謀朝鮮出陣の薩摩勢を呼入肥后佐敷の城を攻取方々に出張いたし御家を危く仕候儀別記に詳候間不及記候間兼事佐敷の主將境澤左衛門安田弥左衛門謀を以討取候此外田尻但馬入来院家来東郷甚右衛門なと申者一味いたし所々に被討候只今在之候梅北も定て此国兼先祖より為相分子孫と存候此梅北の二男家に橘野と中家号在之候 忠国公の御証判在之候

一 安楽氏は志布志の内安楽村を領し申候哉と存候 勝久公の御治世の頃迄は少々見得申候得共輕き御奉公仕候了孫相知不申候伊地知周防介重武に被下候勝久公の御書に安楽何某と被遊候事共在之候其御書を諷訪舎人家来南林寺門前辺に罷在候安楽何とやら申者に伊地知六郎兵衛より遣申候此者其後年に此安楽の子孫なと可申儀も可在之候萩原氏野崎氏横見崎氏なと旧記に見得不申候

一 源姓廻氏は源三位頼政の子孫にて代々廻を領し繁栄仕候文書等過分に在之候得共致粉失少々相續候永録年間廻氏に旨目在之其子幼雅に候を肝付省釣廻氏を改亡領知申候に付子孫衰微仕候近年迄此嫡孫廻太刀之介輪之介と申候て在之候太刀之介子共当分は親類家内に手札申請罷近にて無御座候此家は辺田七人の内にて上井敷根なと相並候家にて候此庶流に廻三玉坊と申山伏在之候武功在之候と見得申候

一 平姓石井氏は三浦義村の曾孫三浦右衛門重義自相模国隅州に下り号石井候中古迄は隅州海辺を領し申候辺田七人の内にて候石井中務少輔義忠入道孫世は 忠国公より 立久公忠昌公忠治公迄は四代御家老にて候御大手組等にも見得申候其後より差て旧記に見得不申候 勝久公御没落の時なと実久方に属候哉と存候 勝久公の御時迄御奉公仕候者の子孫差て見得不申候儀は如斯の事共にて断絶かと存候相良主税家来石井平左衛門と申者系図差出候此本名は石井氏の庶流波須和にて候一族佐土原に罷在由候波須和代々下大隅に罷居伊地知氏の家来にて候後本名石井に為罷成と見得申候此外の石井も在之候得共他国より為参者と見得申候石井七郎兵衛とて近年迄高崎四郎右衛門家来にて候を兵道方致稽古候故にて士に被召成候

建部姓池袋氏は古米牛根二川の辺を領し申候哉と存候辺田七人の内にて候上代に差て見得不申候 忠昌公 忠治公御代池袋筑前守宗政事御家老相勤申候了孫何某共不相知候

一 平姓肥後氏は種子島庶流にて候種子島氏所持の文書に肥後左近將監なと宛書仕候者在之候元祖肥後守平信基と申候間山に肥後を家号に仕候と存候此通の儀如何程も有之候嫡家は種子島を名乗二男は肥後と名乗らせ申候と存候肥後氏中古迄は下大隅高城を領し申候文和の頃肥后彦太郎種頭同弟彦次郎種久と申者旧記に有之候 勝久公御代に竹之地頭肥後助西谷口之地頭肥後周防兄弟にて候勝久公御没落の後衰微仕候尤実久方に属候子孫織の体にて罷在候肥后平右衛門先祖は肥後助西二男家に肥後山城守と申候て吉野の内花棚並大隅辺を領和仕候

竜伯様御代別て御奉公仕候然処に嫡家助西孫肥後一清と申者より平右衛門義祖父に系図並嫡家を譲候從是肥後平右衛門嫡家に罷成候竜伯様に致殉死候肥後繼之允は一清三男家にて御座候子孫断絶仕候大口衆中肥後助三郎先祖は内山九郎左衛門と申候 忠国公の御誓紙其外証書所持申候内山は肥後の一族にて候哉肥後に罷成候肥後正右衛門先祖は肥後藏人と申候て 日新公え被召仕泊の地頭被仰付候藏人子肥後与五郎は竜伯様え被召仕候肥後与右衛門先祖は肥後与次兵衛と申候肥後平右衛門家より近代に分れ申候肥后主膳先祖は肥後休頭其子肥後与左衛門已来被召仕候肥後弥右衛門義曾祖父肥后掃部左衛門は加世田において宮原井尻三人 日新公御難儀の時戦死仕候其養嗣肥後宮内少事も旧記に相見得申候肥後忠政事為相知者にて候其孫国分の肥後少右衛門にて候此外の肥後氏皆一族にて在之候

一 平姓財部氏はも種子島氏よりわかれ肥後氏の兄弟と見得申候古来日州財部を領し申候かと存候元弘建武の乱にも旧記に相見得候永享年間福昌寺奉加帳にも相載申候夫より次第に衰中候哉本田家に隨身いたし永録の頃本田家に罷在隅州笑の隈之城を預申候其後昵近に被召出其孫財部淡路は 惟新様え被召仕候其子財部伝右衛門代初て地頭職被仰付候

一 藤原姓上原氏は觀応の頃市来院伊作田を領し申候て伊作田兵部大夫

道村同中務允尚経なと申者在之候是利直冬郷の御教書其外の証書在之候 忠昌公御代上原藏左衛門別て御幸公仕候初は伊作田と号候哉又上原と替候て名乗後に上原に罷成候哉不詳候哉伯様御代上原筑前守御兵具奉行なと被仰付たりと存候此子孫上原休兵衛是嫡家にて候上原長次郎先祖上原長門守尚常は上原筑前守弟にて候 日新公已来別て御幸公仕御心易被召仕候 貴久公御代より方々地頭職被仰付後飯肥移地頭にて九州御退治の時軍勞仕候夫より子孫代々地頭被仰付候近き比の上原長次郎長門筋にて候上原伝左衛門先祖は中務家久に被相付候上原貞右衛門と申者にて於閑ヶ原豊久一所に戦死いたし候曾於郡衆中上原掃部左衛門も系図所持申候上原鼓介先祖は上原長門守に相付飯肥に罷移候て致屏住たる由候上原八郎左衛門は休兵衛二男家にて候

一 大蔵姓加治木氏郡山氏枝次氏否笠氏小山田氏なと其外一姓多候大蔵姓は漢の高祖の後裔漢土より本朝に渡り播州大蔵谷に居住し直に大蔵を姓と仕候と旧記に在之候異説も可在之候此大蔵姓就中九州に別て繁榮し秋月田尻高橋なと皆大蔵之姓にて候加治木氏求より加治木の領主の処に一条院寛弘の比三条関白頼忠の三男宰相経平依勅勘隅州に配流せられ加治木氏預置候て加治木氏の女に嫁加治木氏男子無之故直に加治木氏を相続いたし候経平八代孫加治木八郎親平 頼朝公の御下文を頂戴仕加治木を致安堵代々加治木を領し繁榮仕候元弘建武の比の文書數通在之候 元久公御上落の時国方の内にて 義持將軍を致御目見候は加治木能登守と在之候此能登守嫡家にて候処に子孫断絶中候其二男家の者家を致連續候加治木三郎実平男子無之付豊州季久三男右衛門佐満久養子に罷成候其子加治木大和守久平代明応六年加治木落城仕阿多え被召移候夫より漸々に子孫衰中候間嫡家誰某とも不詳候謹訪舎人家来加治木藤七兵衛と申者当家の文書所持申候此曾祖父より諏訪氏に相付罷居候天正年間彼家来にて走廻り為中者にて候此者嫡家にて可在之哉又加治木系図文書所持中候是も為相知者にて候半と存候此外又外城に加治木氏の名系図所持中候致候儀候は可相知かと存候

一 郡山氏は上代郡山を領知申候加治木氏同前に繁榮中候將軍家の御判其外証書數通在之候此子孫郡山茂左衛門にて候

一 枝次氏は文龜三年 忠治公正宮御社参の時騎馬御供の内に枝次某と申者在之候其頃迄は為相知者かと存候其外の旧記には見得不申候枝次清左衛門事後追の奥に罷在候此辺を梶原城と申候て近年迄城門の跡為在之由候此枝次清左衛門先祖代々此屋敷に為罷居由申候候間定て此清左衛門は右の枝次子孫にて候半哉と存候

一 否笠氏は建武の頃の旧記に少々見得申候其後悉て見得不申候天正の比否笠刑部と申者有之子孫何某共不存候

一 小山田氏は永享の比福昌寺の奉加帳なとには見得申候得其外は指て不相知候

一 日牟姓小川氏は熊谷平山なと一族にて候承久兵乱宇治合戦に小川太郎季能軍功に付龜島を被下季能子小太郎季直代に龜島へ罷下代々領知仕候文書等在之候天正の比の日帳には龜島殿と在之候は此小川氏の事にて候小川越前守代に龜島御縁替高五百石拜領にて夫より漸々衰微仕候小川喜兵衛は其養子筋にて候天文の比紀氏平山の庶流に小川尾帳守武明と中人午根地頭被下候と見得申候此子孫誰にて候哉尾帳親類に小川半助同平とて兄弟伊集院源次郎に致与力庄内に走繼候兄弟共に武勇の誉在之者にて鎌を合候者屋形方に数人在之由候半助は志和知口にて島津右馬頭征久家来中村九兵衛討取出候半平は和談迄も存命後に何方へ為罷居由候哉子孫定て可在之候

一 藤原氏税所氏姫木重久なと一族にて候税所は上代霧島神領を司り申候て罷在候を税所介と申會於郡辺領地仕候元弘建武の比なと専榮申候文明十五年豊州家より被攻亡候て衰微仕候税所治部右衛門嫡家と見得中候て文書數通所持申候此治部右衛門五六世の祖にても候哉入来院家に隨身仕其後子孫被召出候税所純實は治部右衛門祖父にて候 中納言様別て被召仕候 義久公御代税所越前入道休心初は新介と申候御使役並地頭職方々被仰付別て被召仕候休心親も越前守と申候此者も地頭被仰付候休心已来代々地頭被仰付候税所次兵衛は休心曾孫にて候此家は二男家にて候亦次兵衛家より相分れ候税所弥五太夫曾祖父税所弥右衛門と申は後小兵衛に罷成候 家久公に被召仕後は京都御藏奉行仕候加茂にて出合在之御家来數多滴に成候事は此小兵衛在京の時の事にて候

税所舎人養會祖父は野添帶刀と申候て 竜伯様を被召仕高麗御陣などに御供申候其子孫弥吉代に税所に罷成候野添は税所の小名字にて候哉不存候其外小名字の由候て川畑堀切妻屋など近年税所と改申候

一 姫木氏は古米税所一姓の者姫木の城に罷居其辺領地仕姫木と号候今會於郡の内に候帖佐船津村の百姓 氏久公の御証判數通所持申候此者嫡家かと存候其外にも姫木の文書所持申候者在之候

一 重久氏も同所重久名を領知申候 尊氏將軍其外の証書數通在之候子孫只今は断絶申候て親類中より右の系圖文書所持仕置候此商家共に上世別て榮申候家と見得申候

一 日下部姓若切氏八木氏上持氏海江田氏など一姓にて候若切の嫡家は彦兵衛と申候然其系圖には不分明候此家上代より中古迄見得不申候親彦兵衛代より初て地頭被仰付候岩切六右衛門先祖を何内守久逸公伊作家御統の時被召付候其後 日新公の御時岩切雅樂入道可樂兵道の役者仕候て別て被召仕候被下候御書など岩切仁右衛門所持申候可樂子三河入道可春足も同前の役儀にて候夫より雅樂其子六右衛門などと申候親六右衛門より地頭被仰付候役仕候可樂嫡筋六右衛門にて候岩切仁右衛門は六右衛門二男家にて候余の岩切も定て分れ申候処可相知候得其差て見得為申者無之候

一 八木氏は上代差て見得不申候八木和泉守と申者方々御奉公仕候と見得申候 竜伯様御代和泉嫡子八木越後入道嘉笠御右筆にて御心易被召仕候御使役と見得申候嘉笠就牀能書故 竜伯様より青蓮院尊朝親王え手跡の御門弟に被召付候て為勝能書に罷成候左候て 竜伯様えは嘉笠御指南申上候様に承候其子丹後も不劣能書にて和漢朗詠集を父子にて書調 近衛信尹公え掛御目候其上にて御褒美の状有之申候得共いまだ見不申候或は

後陽成院の備 叙覽候て勅書有之などと申候得共是又見不申候嘉笠會孫太郎左衛門にて候八木民部左衛門先祖は越後入道嘉笠弟民部左衛門筋目にて候左候て子孫八木民部左衛門於方々御奉公關ヶ原より致御供罷下候人数の内にて候

一 土持氏は日州の國人にて上代より繁榮仕候土持系圖には田部姓と在

之候 頼朝公御時の凶田帳に土持冠者官綱と申者在之候系圖致附合候天正の初大友家に被賣落罷在候を初より御家に忠節の儀在之故被迎取本領安堵仕候其後尤御旗下に罷成大正十五年迄は日州県の城主にて候処 秀吉公御下国の節土持彈正久綱落城いたし子供兄弟御家に罷出候後に權之允と申候て地頭被仰付御犬追物御人数に被召加候彈正景城主の時御家の御幕下に可參と申上候て御家の久の字拜領仕久綱と名乗申候土持權之允は其養子にて候土持彦右衛門先祖土持伊豆政綱入道可伴は 勝久公の御家名にて候彈正先祖の庶流にて早く御家に參り候貴久公御養子にて候処に薩州実久率襲候事の相談を川越皆尾兩人へ注進仕候科に焼討に逢申候伊豆子其時三歳にて後に土持若狭と申候忠節の段被聞召上別て被召仕 日新公より泊地頭被仰付候其養子筋土持彦右衛門にて候

一 海江田氏は外記嫡家にて候是も系圖には田部姓と有之候上代は然と見得不申候大正六年於高城大友衆と御取合の時戦死申候海江田主殿と申もの有之候外記先祖之由候祖父仲左衛門地頭被仰付候諸右衛門は仲左衛門弟にて候土持平右衛門同氏太右衛門會祖父平右衛門と申者も初は海江田にて候其子土持平右衛門同半右衛門兩代地頭被仰付候蒲生に罷在候土持は太右衛門などより兄家の由候尤外記庶流にて候

一 藤原姓和田高木は菊地の庶流にて候和田は日州三侯院北方を領し候和田土佐入道正覚と申者の代に別て繁榮仕北郷家などと縁組仕候和田の文書帶刀と申者所持仕候和田乗介養祖父玄番事 竜伯様御代別て被召仕候其子讀俊にも地頭被仰付候文書等少々有之候和田平右衛門家は忌長姓吉田氏の庶流の和出にて候平右衛門養祖父和田右京 惟新様え被召仕候其子平十郎主膳など申候和田孫右衛門先祖は刑部左衛門と申候別て被召仕候此刑部左衛門にて候哉又別人にて候哉和田正覚と申候山伏在之候同人か親子の謂と存候 惟新様飯野へ御在城の時伊東家に忍々御追候処に於彼方に捕へ鉄火を取せ候其後為罷歸由候和田郷左衛門先祖は郷左衛門と申者終て候此外の和田も定て右の一族かと存候

一 高木は高城の内高木村を領し和田同前に榮申候元弘建武の比別て榮

申候高木孫三郎と申者逆意に付嘉吉年中 忠国公御退治被遊候其子孫不相知候

一 平姓宮之原氏は畠山次郎重忠三男畠山重俊の後裔日州宮之原に下り号宮之原嫡家誰其不相知候 (平姓長野氏も畠山重忠の同庶子筋にて畠山て能下) 此注異
正司重良の二男長野三郎重清忠久公御供に候 本なし

一 中原姓有川氏は池大納言頼盛の後裔の由候又平姓伊勢氏一族の由にて有川氏の衆平姓伊勢氏に改候得共遺成証書に中原姓と有之候間其初は中原姓の儀無別儀伊勢平左衛門同兵部少輔も父は有川雅樂後に伊勢雅樂入道任世と改申候伊勢六郎左衛門曾祖父も有川長門にて候長門は御代官仕候長門雅樂は兄弟にて候同家共に少名字の儀とて伊勢兵庫頭殿免許にて伊勢に成り有川氏の系図はつりすて伊勢氏庶流に系図つり申候伊勢大炊左衛門曾祖父有川助兵衛と申候慶長五年の比大坂なとにて御奉公仕候豊後の海上にて戦死仕候其子伊勢右京と申者 中納言様御代地頭被仰付候此右京伊勢上総と申人の猶子に罷成候上総事は上方より為参人の由候右京嫡子弥三郎其子大炊左衛門にて候伊勢十兵衛曾祖父有川平右衛門佐土原仲務を奉公仕後に加治木に参候平右衛門子有川八右衛門後に伊勢に罷成候其子伊勢平右衛門其子十兵衛にて候有川喜左衛門養祖父有川六弥左衛門と申候有川与左衛門同氏長左衛門曾祖父は有川伊豆と申候加治木に被召仕候有川内蔵允は 惟新様に被召仕候有川淡路孫にて候有川吉兵衛有川太郎左衛門有川休右衛門其外の有川の儀究て不存候休右衛門祖父休右衛門は中納言様を致殉死候

一 紀姓桑波田氏古来永吉を領知仕候永吉初は南郷と申候 立久公 忠昌公の御家老に桑波田讃岐守景元入道鶴魚と申人有之候其子にて候哉桑波田孫六代に没落仕候と見得中候子孫島津図書家来に桑波田勘左衛門と申者有之候其方に相附右の如く致没落家衰申候半と存候其後尚久に被相付候の由候此外にも桑波田勘介又加治木の桑波田孫六其外にも有之候是は惟新様御代に求磨より為参由候皆一族にて可有之候と聞得申候

一 藤原姓永井氏上代の儀不相知候 忠昌公御代なとに永井助五郎と申者御代仕候と見得申候間傳成家にて候哉と存候其子孫 日新様を被召

仕於所、戦死仕候其子孫永井下郎左衛門にて候此者も近年迄子孫有之候得共只今いか様共不相知候都之城の永井氏も 勝久公え諫言申上候十七人の内の由承候間是も為相知者かと存候永井善左衛門と申者 貴久公小野え御出候時致御供候七人の内にて候子孫不詳候

一 橘姓柏原氏其以前は然と見得不申候得共 元久公の御家老に柏原豊前守好實と申人有之候其嫡家は相絶候好實弟家の者天正年間、柏原左近将監足輕大將仕任内御陣の時、松山地頭職被仰付後周防介入道有閑と申候其子共高麗にて戦死仕候間其名を嗣柏原弥太右衛門にて候弥太右衛門事王子村にて御代仕候内にて候弥太右衛門嫡孫柏原市右衛門にて候

一 藤原姓二階堂氏は相州懷島を拝領仕候 実朝公の御判有之候其後文永の頃二階堂隱岐守阿多北方地頭被仰付罷下候渡唐船の事為承由候北方と申候は今日布施にて候關東執權尊氏將軍已来御家代々の御証判の文書數十通格護仕候建徳の頃迄は伊作家の聲に罷成候其後衰微仕候出布施に罷在候二階堂源右衛門嫡家にて候此者迄出布施士にて候処に右の由緒故鹿兒島え被召移候二階堂三左衛門先祖は此家より分り候哉不詳候初は伊作の内を少々領候後後に二階堂因幡守と申者筑前國の内を領候哉直冬郷已下の文書數通三左衛門致所持候何頃御家に参候哉不相知候隱岐守二男近江守と申者此家の元祖かと見得中候天正の頃安房始は帶刀其子亦安房与右衛門なとと申候先の安房以来地頭被仰付三左衛門養祖父安房其子与右衛門兩代御使役仕候二階堂源太夫曾祖父源左衛門は惟新様御代別当仕候初弥六と申候時 惟新様関ヶ原御退去の御供仕候内にて候御感狀御知行被下候其外の庶流不詳候

一 藤原姓大川平氏は菊地の庶流にて候北原氏真幸院領地仕候時より飯野大川平を領地仕罷在候北原氏真幸院を差上申候てより 惟新様飯野え御在城被成候此時大川平越前降屋 惟新様え罷出御家臣に罷成候夫より子孫代々大川平を領知仕候計を驚固仕候大川平休兵衛嫡家にて候才右衛門源太左衛門は二男家にて候高麗御陣の致御供候源太左衛門は御兩人祖父にて候

一 源姓後醍醐氏は後醍醐天皇第太の皇子良懷親王を菊池武光肥後に申

下し奉り親王を帝王に準し武光は將軍に擬し大に威勢を九州に振候事
歴史に詳也親王肥後に御下向の時征西將軍の宣旨蒙り給ふ故に奉号征
西將軍宮又親王の令旨などは肥後宮或は一品親王と被為書候武光大
明國に使僧を遣し其返翰日本國王良懷と有之候將軍方と度々合戦有之
候得共將軍方の威強大に成り終に御本意なく且又肥後に親王御深手
被為負候故其後は熱居被成肥后八代辺に御座候て薨御候千今八代の梧
真寺親王御菩提所の出候て御牌建置候親王の妾は武光妹にて此腹に男
子一人出来被成号殿松殿と父親王は薨御也南帝の威は日々に弱く將軍
方は月々に權勢重く成候故昇進の沙汰なく重形にて送年月無位無官に
て成長の後元腹被成号後遠院越后守源良宗候夫より子孫代々肥后辺土
に住居し菊地の子孫共奉崇敬置候親王征西將軍の宣旨を蒙り御下國の
時錦の御旗に日月を金銀にて表候是故に准日月白劔を旗幕の紋と定候
良宗七世の孫後遠院喜兵衛宗重後淡路入道淡齊天正年間義弘公肥后八
代に御在城の時宗重御家に可罷出の由申上候故御許容被成置候隆信御
討伐の時申務家久に相付弟主税と島原に出陣し軍功有之候大疵を蒙り
死去候此肥後求磨八代の領主相良修理太夫義陽二致隨身罷在彼方
為勝者度々石之夫故義陽一家の好をなすへきとのことにて一姓の高橋
氏を許され宗重中頃高橋を名乗候得共嫡子少三郎に譲り宗重は如元後
顯院に罷成候 秀吉公薩摩御入の時肥後に罷居候故薩州の案内者可仕
旨被仰付候得共主従契約仕候間絶て不罷成旨申上候に付小西行長に御
預被成候其後行長に相附朝鮮に渡海し彼軍中にて戦功不少候其時此方
御陣に罷出弥以先年御契約の通御家に可罷出の由申上候間於其儀は妻
子召列可參の由にて致婦朝妻子女老親夫婦を列參り候其時先為御心付
高百石被下其度々御加増にて合五百石拜領仕候間ケ原御退去の時木
脇州部左衛門と宗重兩人殿仕候且又義弘公御戦死に御究被成候得共宗
重諫言仕首尾能御帰國の御供仕候に付御感状並御知行相添被下候間ケ
原已后嫡子高橋少三郎は御暇中上松平宮内少輔を被召抱下今相模守殿
え子孫罷在候二男の後題院内蔵之介家を相続し其曾孫當喜兵衛にて候
半左衛門は二男家にて候

一 大蔵姓高橋氏は秋月氏なと一姓にて数代筑前に居住仕候秋月宗吟の

二男九郎高橋の養子に成後に筑前より日州県え所替被仰付五万石を領
候高麗御陣軍勢不少候庄内陣中に 権現様御下知にて高橋氏御加勢の
筈にて候処に此方より御斷故家老土師七左衛門被差越候九郎後に仕右
近大夫候右近故へ有て御改易の時二男長吉御家を奉頼候て被參候長吉
後に高橋七郎右衛門に罷成候是は天正年間より彼先祖に御入魂の儀有
之其上子者を人御家に可差上の由被申上置候故に右の通に候左候て高
千石被下高橋左門は七郎右衛門置養子にて候七郎右衛門長吉の時より
田原氏を名乗候高橋は昨今御改易の儀に付遠慮仕其通の由候其後如元
高橋に罷成候七郎右衛門代より地頭職被仰付候七郎右衛門兄將監父右
近太夫同前に奥州二本松を御預にて候高橋喜兵衛は七郎右衛門弟筋目
にて候高橋氏參候時の家老土師七左衛門花田備後兩人にて候土師は元
より筑前に罷居候者の子孫にて候土師姓の饒天神の御先祖初御姓に
て後に菅原の姓に御改被成候天神宰府を御下向の時奉附罷下候哉其子
孫代々筑前に居住仕候土師氏の事委細天神の御縁起に相知申候花田氏
の事不審候兩人ともに高式百石つつ被下候て肥後に被召成候土師子孫
當土師七左衛門同孫右衛門花田子孫は花田兵次同氏權右衛門にて候

一 大蔵姓田尻氏は筑後國田尻城主にて 義久公御代田尻中務少輔繼種
御幕下に被申入候処に竜造寺隆信多勢を以攻候に付御加勢を被遣一往
は得勝利候得共終に改殺候其節當田尻彦右衛門曾祖父二三歳にて候を
乳母懷に入遁候て其後御家を奉頼罷出候其外の田尻は別家にて梅北宮
内左衛門与力申候田尻荒兵衛は伊作田尻村の百姓にて武勇援群の者に
て候貴久公御治世の前加世田御手に不入候処に新納伊勢守康久入道一
球被田尻を呼寄申聞せ候は加世田の城に火を掛け焼落し申候はは士に
被召成候様に一往警に可取との由申聞せ候故致領掌無難焼落加世田御
手に入為申出候就夫士に被召成一往むこに取候後に右の通り梅北に与
力し無幾子孫絶申候

一 藤原姓支岐氏は菊地の庶流肥後志岐城主にて島五人の内にて候元弘
建武の頃の文書等有之候天正年間九州御退治の時志岐兵部鎮経入道麟
泉御幕下に罷成候其後加藤清正小西行長肥後拜領已後天草の一揆に組
し両家に被攻亡麟泉子藤左衛門親重致没落候當藤左衛門親小左衛門は

薩州義虎他腹の女腹の好により御家に被參候出尻志岐は一城の主にて候哉年頭の御太刀諸地頭並に進上仕來候清正と鎧を合戦死いたし候木山彈正は志岐家人にて候木山の子孫出水に罷居の由候

一 藤原姓城井氏は本氏下野國宇都宮にて候宇都宮弥三郎友綱二男弥次郎信房 頼朝公より豊前國城井庄を被下致下國改城井候東鑑に天野遠景相共に貴海島を可追討之由蒙敕命鎮西に下向と有之は此城井庄を被下候て下向仕候時の事にて候半と存候夫より代々致領地天正の此城井常陸介長甫其嫡子弥三郎友綱後に民部少輔二男弥次郎と申候長甫二男弥次郎に家督させ可申と色々仕候に付家中さたち其後和申候 秀吉公九州へ御動座の時九州の大小名所替被仰付候に付城井に四國の内にて御知行可被下旨被仰付候得共遠國に參候儀難成存御断申上候に付豊前白石を被下候後に黒田如水と不和に成度々及合戦其後和睦候処に如水民部一族を招寄一座にて討果候其先義久公九州御手に被入候時早々御幕下に罷成候其由緒にて民部弟弥次郎御家に罷出候其己前弥次郎進退の儀黒田官兵衛安國寺被申談聞居候於此方無相違旨別て忠貞可被謁と毛利輝元より城井弥次郎を被遣候書状有之候城井三左衛門は弥次郎五代の嫡孫にて候甚平弥三郎は三左衛門庶流にて候先年肥后に住人佐野島善助と申人城井弥三郎子孫にて候旨申立罷近に罷成度と問合申候て互に系圖の写取替申立候調御罷近に罷成候て宇都宮藤太夫と改名為仕之由に候城井弥三郎將軍家譜等に相見得申候山鹿氏は弥次郎信房弟家政山鹿と号候代々肥後に罷在當越右衛門祖父越右衛門代々御家に參候山鹿先祖にて候哉東鑑に平家盧浦合戦に五百余艘被分三手山鹿兵藤次秀遠並松浦覺為將軍挑戰源氏と有之候此先祖にて候哉可致再考候山鹿も肥后の在名にて候問山鹿を領し候名は皆山鹿と号候其外何れも在名を名乗候問其先祖共不分明候事多々在之候平家方の衆と此秀遠は見得申候問此山鹿を討亡其後宇都宮二男山鹿と罷成候半と存候

一 藤原姓入田氏志賀氏戸次氏大友の一族にて於彼方家老仕候 義久公御代大友家より入田宗和志賀道益御内通申上豊後に御討入候志賀入田並入田左馬介其叔父入田右衛門後に御家に參候て御知行被下候高岡衆中入田新左衛門嫡家にて入田宗和子孫にて候同所の入田平左衛門同孫

兵衛は左馬介子孫にて候鹿兒島の入田次左衛門同次郎兵衛は右衛門子孫にて候志賀跡日は高岡大口に罷在候嫡庶再可考候出水の志賀五兵衛先祖は大友家の家老志賀安房子播磨其子左馬介父子豊後菅ヶ迫城主にて豊後御免向の副志賀道益入田宗和同前に御味方申候御歸陣の時妻子召列御家に罷出候戸次與津入道玄瑞は豊前津ヶ牟礼の城主にて罷居候玄瑞津ヶ牟礼にて戦死仕其子戸次半兵衛は立花左近殿に罷在高麗などに參り後に御家に罷出候於此方は戸次を別木と書申候子孫別木半右衛門にて候高岡の志賀七右衛門祖父式部其子肥後迄は大友家に相付罷居候大友義統御改易の時御家を奉頼罷出候反忠為仕道益弟式部にて御座候後に道益其子小左衛門豊後に參り候故反忠の者にて候得は親類共より切腹仕らせ此道益跡は無之候

一 宇治姓阿蘇氏は肥后國阿蘇大官司にて代々阿蘇領を司り候菊地肥后國にて誇武威候に付將軍家より御討伐可被成とのこと候得共不罷成候其故に候哉此阿蘇に肥後國守護職可被下旨 義詮 義滿兩將軍御教書被下候得共中々守護職の事は不忠寄只本の如く阿蘇領斗を領知仕候夫より豊後大友氏に隨身いたし 秀吉公御下國に付豊州より 義弘公御退去の時肥後路を経て阿蘇領の山路御案内申上忠勤故天正十五年御家に參り高千石被下御奉公仕候是阿蘇玄与事にて候玄与歌道の嗜有之近衛信尹公などより被下候御書數通有之候其外先祖代々官位の口宣等又は方々より被遣候証書過分に所持申候玄与子主殿其子新九郎其養子主膳にて候主膳事は因分士野村源右嫡門二男にて候新九郎外孫にて候

一 藤原姓奈良原氏は元山城國加茂の住人にて候 忠昌公御代に奈良原助八と申者御家に參り候加茂の住人と申候問只今も加茂士と申候て有之出候間定て右の内にて可有之かと存候 忠昌公御自書被遊候に付福岡寺の路傍楠木下に於て廿五歳にて殉死仕候其比肝付氏御退治の最中に於て肝付氏御手に不入事御無念に被思召由にて御自害為被遊との御事候助八も此事の為候哉肝付退治の矢とて矢二筋仕候処に一筋は大乗院奥の院の入口の辺に落候其所に木を植置候福岡寺天祐和尚より向島絶頂に塔婆を真鍮にて打せ御先祖様御為又々衆生菩提の為とて其内に此助八法名関月道三と有之候御家に於て殉死仕候者此助八初にて候其後子孫

方々にて御奉公仕於廻戦死仕候其子奈良原安芸守代より地頭被仰付候
其子長門守其子狩野介代々地頭被仰付候此嫡孫奈良原清左衛門にて候
助左衛門大右衛門は右の二男家にて候

一 藤原姓伊東氏又伊藤共書申候工藤左衛門尉祐経五代の孫伊東六郎左
衛門祐時建武四年に始下向仕候て日州に居住申候是は畠山治部大輔直
頭を九州の軍奉行に將軍家より被差下直頭日州移佐の城に罷在候其時
同前に為罷下由候左候て直頭は上洛候得共伊東は直に居住仕都於郡佐
土原辺に罷在候將軍家の御教書伊東藤内左衛門祐庶の事何々と被遊候
物有之候此祐時の事か又は子か難分候左候て義満將軍は九州へ御勅座
にて菊池氏を御討伐被成候菊池乞降候以後日向国を伊東に被下候と

義満公の譜に有之候是を相考申候処に 道鑑様御日安に奥三ヶ国の事
は頼朝公より拝領仕候処に一ヶ国つつ御借り被成候て御返し不被成候
事迷惑の由被遊候九州をは犬友小式御家三人に分給と見得申候犬友に
は後三ヶ国と有之候後豊後肥後御家には奥三ヶ国薩隅日にて候然る
を悉ヶ国つつ御借被成たると有之候得共いか様其節其通にも可在之候
得共何の時共見得不申候伊東氏其頃日州の辺境に致居住 義満將軍御
下国の時申上候て被下候かと存候筑前肥前は小式長門豊前は大内介義
弘豊後を犬友に拝領と見得申候間如此領国を分給候事將軍譜に書載申
候間何ぞ口記に為相見得と存候祐時五代孫大和守祐亮日州の国人佐土
原三宅富岡平田其外十二頭を攻亡其地を領し申候間祐亮子及一族共に
領地いたさせ申候御家に参り候伊東多く有之候先ツ伊藤七左衛門家は
日新公已前よりも御奉公申候かと存候本は少名字井尻にて候 貴久公
小野え御勅座の時御供の内に彼先祖井尻九郎次郎祐宗と申者有之候此
母宇多氏の女同前に御供申候伊東右衛門と申者は 惟新様飯野に被成
御座候時高城地頭被仰付候其子喜右衛門より代々近年は肥前迄地頭被
仰付候肥前孫伊東源右衛門にて候此家御家中にて嫡家と申事候右衛門
事何頃御家に参り候哉も不詳候又飯野本崎原にて戦死申候伊東加賀守
弟右衛門と申者の子孫伊東仙右衛門にて候伊東伝左衛門も此一族の由
候加賀並右衛門は三位殿の弟にて候井尻伊賀と申者天正の初伊東家よ
り御家に参り候日州駄屋の地頭伊賀に被仰付候其養子筋伊東作太夫に

て候其外伊尻の伊東に罷成候衆多有之候

諸家大概 乾 終

諸家大概坤目錄

一木脇	一佐土原	一八代	一牛原
一井手籠	一羽月	一柿木原	一莫根
一遠矢	一延時	一弟子丸	一野辺
一武光	一野間	一河越 讀良	一郷田
一中原	一面高	一名越	一河野 溪合
一赤松	一最上 北条	一佐竹	一広瀬
一浦地	一今井	一丹生	一毛利
一白野 田中	一兄玉	一家村	一森
一久留	一逆瀬川	一北山	一河田
一築瀬	一藪田	一高崎	一高崎
一堀	一木上	一南雲 大友也	一古後
一里村	一相良	一佐々木	一野村
一田中	一大山	一中江	一崩山 阿田
一山口	一救仁郷	一大井	一吉井
一愛甲	一関	一押川	一千葉
一牧	一印東	一岩元	一曾木
一中糸	一鳥丸	一瀬戸口	一二渡
一鬼塚	一鹿島	一深掬	一矢野
一市来崎 久米	一汾陽	一林	一江夏
一高植	一穎川	一平城	一大原
一塩官	一安岡	一穎川	一前川
一松木	一那須	一米良	一赤塚
一中村	一福屋	一竹之内	一大野
一小森	一原口	一岡世田	一野田
一白坂	一大脇	一長崎	一中神

一中西	一上村	一清水	一貴島
一福岡	一中馬	一藤崎	一長沼
一野津	一德永	一黒木	一黒田
一久保	一木藤	一伊丹	一宇都
一安藤	一渋谷	一竹崎	一松崎
一福山	一大窪	一上床 江田	一美坂
一西俣	一山元	一末弘	一小倉
一前田	一知色	一馬越	一橋口
一池上	一小浜	一宅間	一野元
一坂元	一西郷	一古木	一宮里
一日田	一折田	一長田	一松田
一川村	一武	一木原	一山崎
一田部	一二之宮	一天辰	一健軍
一樋口	一須田	一木山	一荻谷
一勝目	一帖佐	一美代	一久木崎

百六拾八氏

諸家大概坤

- 一 木脇も伊東一家にて木脇越前と申者 貴久公御代に参り候其子木脇伊賀入道正徹は 貴久公歳久え為御後見と被相付候其子刑部左衛門に肥后花の山の地頭被仰付於彼地戦死仕候其嫡子三右衛門に肥後望志田の地頭被仰付是も三の山にて戦死仕候故二男刑部左衛門家を継申候刑部左衛門武功有之候就中関ヶ原御退去の殿を後廻院談育と相勤候て首尾能御滞国の御供仕候に付御感状御知行被下候其後 惟新様え致殉死候其子三右衛門其子当刑部左衛門にて候三右衛門弟木脇納右衛門は兵庫忠朗え被召付候処に彼方有故相逼候に付切腹被仰付候木脇善助兄弟は刑部左衛門二男家にて候木脇の嫡家は刑部左衛門にて候正徹三男木脇民部少輔は歳久に相付罷居候故龍ヶ水にて歳久同前に戦死其弟喜兵衛其子次郎兵衛にて候伊東次郎右衛門先祖も本は木脇にて候 貴久公小野え御退去の時御供の内に木脇大炊介と申者は次郎右衛門五代の祖にて候其子若狭夫より三左衛門此者代に伊東に罷成候三左衛門孫次右衛門より御使役並地頭被仰付其子次郎右衛門同前に被召仕候伊東弥左衛門養祖父伊東三左衛門は次右衛門弟にて御使役地頭被仰付候伊東五右衛門養父は右松安右衛門と申候伊東家より参候於彼方も一所の下知為仕由候慶長五年大阪御跡に相残候人数の内にて候故為御褒美御感状御高百石并領仕候五右衛門代に伊東に罷成御使役地頭被仰付候伊東刑部左衛門祖父は川崎駿河と申候是も伊東家より参り候駿河代より伊東に罷成候駿河は京大阪蔵奉行なと被仰付候其子九左衛門其子刑部左衛門此代より始めて地頭被仰付候
- 一 佐土原は伊東一家日州より参り候佐土原郷左衛門先祖の由候
- 一 八代長門守の子孫八代三左衛門にて候長門守は高城に伊東家より籠置候豊州北郷両家に責殺され候旧記等に詳候長州子供代に御家に参り候哉と存候
- 一 大秦姓牛屎氏并手籠氏羽月氏柿木原氏などは一家にて候大秦姓は秦徐福が蓬萊に不死の薬を求にとて日本に渡り熊野山とも又富士山に來りたりとも山伝候直に日本の住人に成て秦を以姓として大秦と号し

たりと申候牛屎氏は上古薩州牛屎院の領主にて候 頼朝公の御判物数多し今有之先年牛屎氏の文書に島津庄惣地頭惟宗忠久と有之候故進上仕候余にも御判物有之候殊之外繁栄為申家にて候元弘建武の比牛屎左近將監當元と旧記且太平記にも相見得申候如何様にて子孫衰微申候哉後嗣は断絶申候加藤辰之助祖母牛屎氏の女にて嫡家にて候文書系図彼辰之介所持申置候中古迄御犬の手組等に見得申候其後終に見得不申候

一 井手籠氏は建武四年直義郷の御教書に井手籠孫四郎え宛書に被下候其頃迄は為相知者にて其後菱刈氏牛屎太良両院を領申候に付彼一族菱刈氏へ致隨身候牛屎氏は菱刈氏に隨身為仕と見得申候

一 羽月氏は然と見得不申候得共建武の頃の旧記には少々見得申候

一 柿木原も將軍家並御家御判の文書等数多所持申候是も菱刈氏に致隨身候と見得申候此子孫柿木原孫七と申は島津圖書家來にて候此大秦姓の一族其背大口辺に罷居其所々を領知申候と見得申候其外にも一族多有之候

一 平姓莫根氏遠矢氏は神崎太郎兼重の孫太夫盛兼寛元四年に鎌倉殿より薩州莫根院を被下々向仕号莫根候此嫡家島津圖書家來莫根為右衛門と申者にて候將軍家並諸將の判形及御家の御判有之文書数多為右衛門所持仕候何頃迄莫根を領し申候て衰中候哉不相知候

一 遠矢氏は莫根氏の二男家にて莫根の内遠矢と申在所を領し申候建武の頃の文書の内莫根遠矢某と有之候又号遠矢事は成行と申者強弓にて候処に四方に遠矢を射其矢の落候所を四方領知為仕可申山に付遠矢仕候得は夥敷飛候に付矢掛り四方の分領知為仕由候其申候此遠矢の未葉に天正の頃遠矢信濃に長野地頭職被仰付置候於豊後高田戦死仕候信濃親祖父も 日新公以來別て御奉公仕代々戦死仕候信濃親金兵衛弟に十郎三郎と申者の子孫長野に有之候其弟に遠矢下總事 惟新様え御奉公仕於所々太刀初等仕候就中元龜三年五月四日於木崎原一番部下總と久留半五左衛門の由候下總筋恒吉の士にて候信濃嫡孫は遠矢金兵衛にて候

一 延時氏姓追可考薩州之御家人にて 忠時公の御判物其外証書數多所持申候元弘建武の比車勞仕候証書有之候何比子孫衰微仕候哉此子孫財部士延時藤左衛門にて候 惟新様加治木え御座の時迄は御奉公為仕と見得中候

一 建部姓弟子丸氏は隅州清水の内弟子丸名を致領知為家号候大隅國御家人にて候正宮の同所檢校と有之候氏久公より弟子丸若德え被下候文書弟子丸名智尾村の事為由緒地被下候と見得中候彼地代々領知仕候貴久公御代弟子丸幡磨代より地頭被下候夫より代々地頭被仰付近年迄弟子丸藤左衛門は眞幸吉田移地頭被仰付置候弟子丸治兵衛嫡家にて候弟子丸八右衛門は幡磨弟越中筋目にて候越中事御心易被召仕由候市之助より地頭被仰付候弟子丸氏は弥渡の庶流と申事候

一 小野姓野辺氏は武州の七党の内にて横山党の由候武州榛沢郡野辺郷地頭職にて号野辺候其後日州櫛間院の地頭職將軍家より被下直下り蜀に致居住櫛間並隅州深河院其外方々致知行別て繁榮の家にて候系図は小野姓にて候を平重盛の七男土佐守宗実の孫を養子に仕候に付夫より平家に系入候得共造成小野姓にて候源氏將軍並直冬御教書其外管領の奉書 氏久公の御判物余にも過分に証書所持申候文明の比までは榮申候 元久公応永年間御上落の時四方にて御目見仕候野辺右衛門佐子孫志布志衆中野少兵衛の由候系図文書等過分に所持申候又右子孫庄内櫛山明翁院と申候濟家寺の仕持の出家野辺嫡家の系図文書過分に所持申候是は別家の者の山候得共未分明候追て可相究候此外にも野辺の系図文書等所持申候者有之候大覺寺殿野辺氏の家を御たのみ被成御座候事歴然に候

一 伴姓武光氏は古來市來辺に罷在元弘建武の比將軍家の御証書其外文書過分に御座候間繁榮仕候と見得中候得共子孫斷絶申候哉不相知候系図文書は入來院志摩之介所持申候

一 源姓野間氏は古昔上方より罷下千台猶縁の辺に罷在候処に薩州家より被攻亡候て女子老人在之候を一瓢様え被召仕御隱居の後庵室を作らせ被召置候て直に庵室と唱申候其後此庵室男子山牛候父は誰とも不相知候處に 一瓢様御子と見得申候此男子後同朋に被召成爲阿弥と申候母の氏により野間高庵と御付候高庵は武功拔群の者にて候其孫野間宗

莫と申候て別て御心易破召仕候其孫野間孫兵衛にて候野間勘兵衛同宗阿弥も孫兵衛庶流にて候

一 平姓河越氏系圖河越小太郎重房より系申候上古の儀不相知候 貴久公小野え御動座の時此子孫眞玉民部左衛門御供の内在之候中比母方の名字にて眞玉にて後に又河越に罷成候其後方々にて子孫戦死仕候河越三右衛門は眞玉民部左衛門五代の孫にて候譜良氏は河越重房の弟筋河内國譜良の郡に居住仕彼郡を領知申候て号譜良と候上世の事不詳候 竜伯様御代に譜良善助其子善助為相知者にて善助孫譜良善助にて牛之助は二男家にて候

一 大江姓郷田氏は薩州の御家人にて 忠久公御下國前より為罷居と見得申候 忠久公御廻文などへ小野太郎家綱と在之候其外旧記等に家綱其子家重事相見得申候家綱先祖以來薩州日置を領申候て其後肥前國早派村などの地頭職被仰付候様に見得申候其後子孫漸々衰微仕日州辺に罷在肝付八郎兼重三侯院高城に籠兼重切腹に究申候時此郷田氏兼重の名代に戦死申候と有之候間一往肝付家に為罷居かと存候其子孫天正の頃郷田安芸境日の御奉公仕候其子郷田源助孫源助にて候郷田源七左衛門は源介二男家にて候

一 平姓中原氏は本名三浦氏の出候日置の内中原に居住仕改中原候と申候 忠久公始て御下國の時難風に御逢被成候時御立願に熊野三所権現を御當國に勧請被遊之由候左候て此先祖山伏に被罷成候て三所権現を御建立候那知に准て川上木新宮は福昌寺門前の林中本宮は伊集院の内に御建立候夫より子孫然と不相知候慶長五年閏ケ原乱後御使僧に罷上り候般若院は中原仲左衛門四代の祖にて候是枝大膳坊處兒鳥の惣職にて般若院に罷居候處に國分に被召移日置の中原坊を宝泉坊に被召移と 竜伯様御代に在之候宝泉坊は般若院坊号にて候 近衛様御代な

とに中原坊と被遊候此般若院事にて候尤中原仲左衛門嫡家にて候中原四郎兵衛曾祖父中原四葉坊は山伏にて候閏ケ原乱御使なども為仕由候中原伊兵衛先祖は不詳候伊兵衛親中原松心は医道仕候 一面高氏は其姓不相知候肥前の内に面高と申所在之候間其在名などに

て可在之哉と存候上世の儀不詳候天文の比面高有泉坊其子面高真連坊頼俊於所々軍功有之候代々山伏にて本は市来辺に罷居候由也真連坊武功有之故 義久公御意被遊候は日州御手に入候はは源藏の善裁坊を可被下旨御約束にて候其後日州え御働入の時真連坊善裁坊に先登して院主を追出し任職仕候 秀吉公御勤座の時羽柴秀長陣所え和談の御使僧相勤人質等召列首尾能相済候庄内御陣相済候儀を入来院又六善裁坊而使を以被仰上候其後關ヶ原乱後御使僧別て抽御奉公御安堵にて候儀御状等に見得申候其嫡子連長坊代鹿兒島え被召寄二男家善裁坊の仕職仕来候連長坊孫面高連長院にて候般若院住職被仰付候也出水の面高主馬其外何れも此一家にて候

一 平姓名越氏其先祖は秋父太郎重弘三男松谷四郎重朝より系候重朝の子孫日州志布志の内觀野村に下り彼地を領し申候てより月野に改申候夫より代々彼辺に罷在候其子孫月野大膳事 義弘公に致供奉關ヶ原より罷歸り候人数の内にて候御感狀御知行被下候大膳後谷山に罷在候其養子は名越主水にて候此名越と改申候事月野氏名越の一族にて無御座格護仕系図は儘に秩父家より系候て月野代々在之候名越に改申事何故にて候哉再可考候但此系図の内を見申候に奈古屋と出入候處在之候是以改名越候哉と考申候

一 越智姓河野氏伊予の河野一族の者 元久公御代に御家に為參由に候夫より然と見得不申候 日新公御代より御心易被召仕候と見得申候河野三太夫先祖太郎左衛門其子筑後於所々軍功仕候て筑後は筑前若屋にて戦死申候其孫河野道能は 中將様御年少の時分御読書の師仕候其子長右衛門其弟六兵衛にて候太郎左衛門弟和泉其子河野玄番武道の誉無其隱候左候て下大隅にて戦死申候其子玄番是もおとらん名高き者にて候小田原御陣に 久保公御出馬の時騎馬の勇士十六人御撰被成候内に河野玄番有之候其子内膳と申候其養子筋谷山衆中河野与左衛門にて候河野為右衛門先祖は一王雅樂助是を二王太夫と申候て 竜伯様御代龍太夫にて候後に河野為右衛門入道湘雪と申候越智親世服部親世とて四座猿樂親世は服部親世にて候一王太夫も河野氏にて殊更龍太夫の儀候間越智親世かと存候此雅樂介代に御家に參たるかと考申候本より御

家に罷在候龍太夫は住吉太夫と申者にて有之候其故は天正六年琉球よりの進物帳に一王太夫住吉太夫親子に何々と有之候此住吉太夫の子孫長倉七郎右衛門にては無之哉と考申候一王事太閤様御下国の時何かに付被召出候哉細川幽斉に 竜伯様より被遣候御狀に一王に知行可遣の由候間出尻荒兵衛跡被下由に相見得申候間いか様の事可在之と存候其比台命と在之知行被下候衆多々在之候余り規模にならぬ事の由候河野彦右衛門養父道映は湘雪二男家にて候遠州荒井に道映兄他出仕下今子孫在之候天正の比河野備前守清道とて在之候子孫不相知候河野次左衛門曾祖父は三太夫曾祖父同腹の兄にて候故河野を名乗せ申候此外は不詳候系図も流々有之候

一 赤松氏は嘉吉元年赤松満祐 將軍義教公を私宅え奉招請奉討候故御子義勝を守立管領共幡州白旗城へ討手を差下し攻申候に付満祐切腹に相究候時嫡子彦次郎教康に何とそ落道候て子孫を残し後業を計可申由申付教康に家臣少々相付城を忍山させ幡州室津より出舟し志布志に着船いたし候其家臣の内に間島の某と申者有之候子孫にて候哉佐多衆中に間島某と申者在之候其時 太守忠国公を奉頼候得共 將軍家の大敵故御取持難被成松山辺に隠居子孫数代被罷居候 竜伯様御代に罷成室町將軍家の御子孫相絶 信長天下の權を為取候に罷成赤松の子孫を御家に被召仕候由候得共成程少身にて候甚右衛門親赤松宮内左衛門事は指宿衆中の子にて候を赤松氏養子に為被成と承候但甚右衛門家の元祖は則祐弟正長則の三四男乙若丸季則の子孫と考申候

一 源姓最上氏は古市甲斐と申者の子長門守と申者 貴久公御代に御家に參り候長州事は 近衛植家公御狀などに見得申候又長州に被下候御書も在之候最上宗檜と有之候は長州事にて候此古市氏は最上の一族の由にて閑東の最上殿え申入木名最上に罷成候は最上右近衛祖父の代なとの事にて候長州事上方え入魂の者も在之候故被遣候哉 日新公伊呂波將被遊 植家公の被備一覽候時など御使申候と見得申候長州子古市善左衛門は 竜伯様に被召仕候是は中比川東氏に罷成川東善左衛門とも申候川東氏は種子島一族にて候 竜伯様御陣中は種子島久時の女故御局右台と申候は川東氏にて候故此御局に高三百石被拜領其養子に罷

成其後致違妄如元最上に為罷成出候川東氏子孫は北条善五左衛門にて候川東本名の北条に為罷成の由候

一 源姓佐竹氏は關東佐竹の一族佐竹次郎義昭武者修行に出御當國に参り候処に御留被成成本より兵道の儀為存知者にて候故河田駿河入道牛室へ御付被成彼一流伝受仕後光明坊と申候と旧記等にも見得申候其子孫代々山伏に罷成候佐竹連光院其子源左衛門にて候光明已来御心易被召仕候 中納言様御病中に護摩所え御崇被成候御稻荷は蓮光院え被仰付崇為申由候此御稻荷は於高麗御戦死為被成御稻荷にて候御病中に御崇有之由にて右の通為被遊と申事候同所若宮も同前に源左衛門より御崇なと仕候倉岡衆中佐竹九右衛門は此家一流の由候五六代は相知れ為申由に候得は光明坊と同道にて為参人か又は兄弟にて候哉不詳候

一 広瀬氏姓追可考候此族其源頭為相知家にて無之候佐志の内に広瀬村と申所有之此所より山為中人の出候 久保公家久公の御母堂宰相様は

廣瀬氏にて候 宰相様御懷は廣田清左衛門下女あかしと申候あかしは廣瀬氏にて候實は廣田清左衛門の女にて候此仕合故 宰相様舍弟広瀬吉左衛門被召出知行伴領仕候其子広瀬善次郎にて候打続早世故其養子に島津相模守久仍三男次郎兵衛を被召成候次郎兵衛代に地頭職被仰付其子広瀬次兵衛にて候

一 蒲地氏は源姓にて候治承二年貞宗と申者七島和蛇島を被下候て其後よりは硫磺黒島平島七島の郡司職代々勤来之由候文書數通古系圖因分衆中蒲地仲右衛門致所持候此嫡家と見得申候此者五代の祖蒲地五郎右衛門代より四ヶ所に罷在 日新様の御時加世出間之瀬川にて戦死仕候其子伊賀入道甫心事少年より 竜伯様御心易被召仕被成下候御書等頂戴致し置候大野正右衛門甫心同前に被召仕御家老中よりの御状にも面人に宛書在之候甫心子帶刀其子孫仲左衛門にて候甫心二男四郎左衛門養子筋蒲地四郎左衛門にて候又蒲地八郎左衛門養祖父備中入道仲如は家久公御代より地頭被仰付候其養子山田有榮次男新介にて候九州に蒲地氏在之候て一城を致格護候天正の頃蒲地彈正と申人在之候此子孫なと御家に被参候哉追て可考候仲如先祖は出所不相究候

一 今井氏は泉州境の出部屋道与の養子にて候道与事惟新様え御年来御

茶湯朋にて其上關ヶ原亂後御入魂中上事異于他候処御知行千石被下置道与度々御国え罷下り候其後道与より申上候は誰を被召仕候人の子を養子に被仰付候は右の高致附屬以來御奉公仕せ度由申上候に付仁礼藏人頼景二男能登を養子に被仰付能登後今井市兵衛入道松岡と申候て地頭職被仰付候其子今井舍人にて候京都林光院に被成御座候惟新様肖像は道与に被下候て仏師康殿に御作らせ為被成儀無別儀候委細は別紙に在之今井安左衛門祖父安左衛門は肥前唐津の城主寺沢兵庫頭殿御家来にて家老役相勤兵庫庫頭殿帥誓にて候安左衛門事兵庫頭殿言仕候得は氣に入不候て平人仕候を家久公初より別て御存知為被成者にて安左衛門子仲兵衛少年の時被召抱候父安左衛門は於唐津切腹の由候仲兵衛子当安左衛門にて候父仲兵衛代より今井氏にては対彼方遠慮仕母方の名字佐藤を名乗申候得共近年本のことくに今井に罷成候

一 藤原姓丹生氏初は中臣氏と云り其初は不詳候先祖伊勢國より為参出申伝候中古迄も見得不申候慶長五年の秋倉岡地頭丹生備前にて伊東家より稻津掃部寄来し時別て御奉公仕候其子新三郎にて候丹生弥兵衛は備前備孫にて候佐土原島津但馬守殿母堂竜盛院殿は丹生新三郎娘にて候

一 毛利氏定て大江姓に候半と存候毛利覺右衛門先祖は因幡國主宮部中務法印善祥坊の家来にて候を 惟新様御抱為被成の由候善祥坊高城に着陣の時相付為参由候於彼方武道の善在之候慶長五年於關ヶ原無余儀戦死仕候其弟家を統毛利肥前と申候右の由緒故地頭被仰付候肥前三代の孫毛利覺右衛門にて候

一 藤原姓日野氏は何頃にて候哉日野某殿家勅勘硫磺島え配流の筈にて薩州に下向候処に 太守公憐思召候て鹿籠の内硫磺崎と申所に居住させ申候て同所田中門を食邑に被遺候鹿籠の内に日野殿建立の堂なと有之由候左候て子孫は日野を名乗らす田中と号し候天文年間平松にて戦死仕候田中掃部兵衛入道珍阿弥は右日野の一流にて候其子田中藤次兵衛入道等林は繪書にて候妙因寺の宇治川の屏風は等林筆にて候別て御奉公仕候等林子田中堅助是も繪書にて候松平隱岐守様へ御下りの姫君御興入の時與家老にて参り候其節京都へ罷上り日野中納言輝資郷え罷出

右の由緒申上候処に家の字實に改可申由証書被下候故堅助日野監物に改申候て後に入道如宅と申候加治木の日野監物嫡家にて候如宅先祖以來四ヶ所え罷居御奉公仕候由也國中後藤兵衛同源八左衛門同太郎兵衛田中藤次兵衛皆此一族にて候田中氏別にも数多在之候得共此一族は右の衆にて候右日野殿の事何かに見得不申候

藤原姓児玉氏は上代の儀指て見得不申候中古は長井と改又児玉と号し候 貴久公御方え見玉備前同新四郎と申者有之候備前事 近衛前久公より御書被下所持申候 家久公御代に児玉筑後別て被召仕所々の地頭職被仰付候其子四郎兵衛も地頭職被仰付近年迄山之口移地頭相勤申候筑後親は児玉新四郎後主水と申候高麗御陣などに御供為申由候児玉次郎左衛門同主水は四郎兵衛次男家にて候

平姓家村氏は淡谷重國の嫡子中山太郎其子遠州家村を領し申候中古に御家に罷出候と見得申候 龜伯様御代家村筑後以來別て被召仕候筑後嫡孫家村次郎右衛門にて候清兵衛友仙など次郎右衛門次男にて候家村平八家は次郎右衛門先祖弟讃岐と申者の筋にて御座候其外の家村は不詳候

平姓森氏は建武の頃大隅国守護代森三郎次郎平行重と在之候守護代は家老と見得申候其比まで本田酒匂なども守護代と書申候其外旧記等に森事見得申候其後終に見得不申候然に帖佐住吉村の百姓所持の文書数多有之候 師久公御代にて凶徒森源次郎跡事為關所之御御預被成と被遊森五郎三郎殿と宛書有之候其外九州探題の証判など数多有之候間此百姓事右の未流にて御座候半と存候此百姓も祖父迄は樋脇士にて在之候由証文有之候森市之允曾祖父などにて候森森兼介於肥後戦死申候と有之候此外の森氏是不詳候

久留氏性追て可考上代の事不詳候 義久公御代久留半五左衛門武道の善有之牛根御陣の時敵城を本村筑前半五左衛門兩人に新納武藏下知にて城崩申候筑前手に入候こと歴然也元龜三年於木崎原 惟新様御一戦の時半五左衛門と日高掃部左衛門一番鎗仕戦死に相究候処に遠矢下総走統此兩人を相逢候其外軍功数度の由候半五左衛門曾孫久留千左衛門

門にて候

逆瀬川氏姓追可考候天正の頃逆瀬川豊前兵衛又率藤兵衛と被下候と申候間如此も書申候此者武功技藝に候事旧記等に相見得申候天正十五年於豊前野津戦死仕候伊地知丹後一所にて御座候と旧記には見得申候得共西国太平記大友興隆記などには鬼塚刑部左衛門伊地知丹後兩人戦死仕候と御座候鬼塚系図にも野津にて戦死と有之候間別儀有之間敷候得共西国太平記大同小異に有之候間悉信用難仕候逆瀬川の子孫不相知候外城に同氏有之候間追て可考候

北山氏姓追可考候上代薩州日置郡西郷日州北郷飲肥の弁清使にて候頼朝公奥州泰衡御退治の御出馬に供奉仕候由にて 忠久公え被進候御書の写所持申候薩州の御家人にて候其外無余儀文書数通在之候北山と号し候候然と系図に見得不申候得共北郷を領し申候に付夫より北山と号し候かと存候市来衆中北山新兵衛其子孫にて候

紀姓河田氏上古薩州宮里の郡司にて 將軍家並御家の御証判其外証書数通所持仕候元弘建武の頃河田知門坊と申者別て走廻り有之候と見得申候慶長四年御家老連判の記録に河田勘兵衛と宛書有之候其頃迄は鹿兒島士にて候処に如何様に仕候哉財部の辺に子孫罷在其後子孫無御座候故只今は系図文書等親類共格護為仕置之由候

酒井姓築瀬氏は上代の儀不相知候乍然福昌寺仏殿奉加帳には相見得申候間永享頃までは為相知と存候中古以來に不相見得候道造寺隆信を討候築瀬兵右衛門は川上左京に為相付足輕大將にて候兵右衛門親は勝軍坊と申山伏にて別て御奉公仕候新納武藏肝付彈正より遺候書状在之候其外にも御知行なと被下候証書子孫築瀬清右衛門所持申候其外の築瀬此一族と存候

園田氏姓追可考候上古の儀不相知候代々小野辺に居住仕候 貴久公小野に御勅座被遊園田清左衛門所に御座候清左衛門我宅の後なる聖之宮に 貴久公を奉遷拙忠節候儀歴然に候間不及記候其嫡孫園田新右衛門にて候代々御心易被召仕候二男家其外の園田氏皆此一族にて候園田九兵衛先祖は相良小名字の園田の由候

藤原姓高崎氏堀氏木上氏南雲氏などは皆豊後国大友氏の庶流にて御

家に罷出候大友氏事東鑑に波多野四郎經家号大友自鎮西歸參是齊院次官親能の舅則召御前令問西海合戦の事給ふと云也以是考候得は大友能直は齊院親能の子にて候共在之候得は經家は外祖にて候号大友と在之候得は外祖の家を罷直連続いたし其後豊後筑前肥前三ヶ国被下候と見得申候

一 高崎氏は貞久公御籙中大友因幡守の息女にて御輿入の時分為御輿添此高崎氏小田原氏兩人參候由候高崎氏上代の儀然と不相知候 貴久公御代高崎幡摩入道有閑齊は伊作地頭被仰付候其子幡摩も相統伊作地頭仕候夫より代々御使役並地頭被仰付候高崎四郎右衛門嫡家にて候高崎藤左衛門先祖は幡摩弟越前守と申候越前事佐上原の中務家久に被相付於彼方家老仕の出候今に中務家來に高崎氏有之由候

一 堀七郎と申者は忠昌公御籙中御輿添として古後氏堀氏兩人相付為參の由候堀七郎子孫は天正の頃堀四郎左衛門とて足輕大將仕境目の御奉公仕候其子神左衛門代に地頭被仰付候其子四郎左衛門入道宗敷代御使役並地頭被仰付候元弘の頃の文書に堀源五と申者有之候得共子孫何者共相知れず候尤此一流にて無御座候

一 木上氏事は木上掃部後に和泉と申候者大友家に罷居候時小笠原備前守殿に有職方致稽占在京仕候大友家没落以來大口辺に致宰人罷居候処に家久小笠原殿に有職方御稽占被成度由被仰付候処に小笠原殿より被仰付候は木上掃部と申者御国の端に罷居の由に候此者大友家に罷居候時分より当流の儀不致稽占致相伝置候間此者を被召出御稽占可被遊と御座候に付則掃部被召出候其子孫蒲生の七木上清左衛門にて候木上筑右衛門は其養子に仕二男家に取立有職方伝受為申之由候

一 南雲氏は何頃御家に參り候哉不相知候水祿の頃南雲君岐其子新四郎事旧記に相見得申候君岐事武功有之由候此庶流外城にも有之候南雲君岐嫡孫は南雲新介にて候

一 古後氏は其姓追て可考候天正の頃の口帳などには古後氏事重信氏同前に御包丁役など仕正月の御規式など相調候様に見得申候古後七郎右衛門先祖にて可在之かと存候

一 里村氏姓追て可考候連歌宗匠里村昌休昌北の一族にて候哉 家久公御代に被召抱候に付其子孫里村茂兵衛にて候曾祖父織部より相知候

一 藤原姓相良氏先祖は遠州相良に居住仕候処に建久九年初て肥後求磨大古に來候由見得申候此庶流の者御家に參り候相良新右衛門家は忠国公御代に罷留新介と申者御家に參候て相模守友久公被召付候其後右の子孫稻留石見守は永祿四年於廻りに戦死申候其子稻留新介事後に本名相良に罷成相良日向入道閑栖にて候稻留新介の時より方々地頭職被仰付候嫡孫相良玄番於高麗旧館の檢使に被遣於彼戰場戦死仕候鳥丸兵右衛門も同役にて兵右衛門も同く戦死仕候夫より代々地頭被仰付玄番子左之助より御使役被仰付全之助は 中将様御家督の御礼御申上候時 公方様致御目見候九人の内にて候相良權兵衛先祖は新右衛門家の二男家にて候 竜伯様御代は相良勘解由代より御使役地頭被仰付候其後權兵衛祖父權兵衛も御使役地頭被仰付候相良主税先祖稻留丹後入道藤松權兵衛は又權兵衛二男家にて候左兵衛佐高久公に被召付御後見仕候其子相良吉右衛門関ヶ原致御御感狀御高被下代々地頭被下候親主税より御使役被仰付候島津國吉内相良權之允先祖は藤松二男稻留左京と申候此左京於島原戦死仕候左京も地頭被仰付候と見得申候丹後入道藤松を被召付候間嫡子吉右衛門は附近に被召出候相良甚左衛門祖父相良甚吉は鎌川出雲守政近の二男にて候処に相良主税先祖男子無之養子に仕相良甚吉と名乗罷居候処に男子出生仕候に付致分地二男家に取立

申候甚吉事於関ヶ原戦死仕候相良市左衛門祖父は相良玄番弟相良甚吉と申者の筋目にて候相良与左衛門父は新右衛門親の弟にて候此一族皆本は相良の小名字稻留にて候得共漸々に相良に罷成候相良仁右衛門養祖父は相良五郎左衛門入道下庵と申候下庵初は竹之下にて候 惟新公御祐筆相勤候後に相良君岐守殿免許にて相良に成り候相良源五左衛門養曾祖父相良清兵衛は求磨の相良殿家老にて候然に家中より清兵衛を疏し家中きたり申候此事公儀え被聞召上清兵衛親子御預に被罷成候時清兵衛子は内蔵介其子内蔵允と申候内蔵介内室は中務家久の息女にて候右の山緒故御当家に被召抱高式千石拝領仕候自是先に内蔵介は京都

右にて如何

にて死去の由清兵衛父は大量業作人道休意と為申者の由候休意事旧記等に見得申候相良十左衛門養祖父は相良満右衛門と申候て求磨生人にて罷居候を御抱被成たるの由候相良四郎兵衛祖父助太夫は初竹之下助太夫と申候て伊勢兵部与力仕後に相良に罷成候其外の相良も右同前の衆にて可在之と存候大始良上族に笠毛氏あり相良上総介長頼六男笠毛八郎太郎頼広より出る人吉相良の支族と見ゆ右平田本に書入あり

一 源姓佐々木氏此一族は野村氏田中氏大山氏中江氏等にて候本より佐々木氏も御座候得共差て為相知家は無御座候東鑑に佐々木二郎盛綱薩摩國に配流被仰付數年薩州に罷在其後被召直と有之候得は此子孫も可在之候

一 野村一党は大万日州素生の者にて候野村四郎左衛門先祖は天正の頃野村兵部少輔山崎平佐などの地頭職被仰付候尤兵道役者にて候大平寺に竜伯様御差出被成 大閑え御目見の時此兵部少輔など致御供御日見仕候將軍譜太閤記などに歴然に候其子美作守も山崎平佐地頭被仰付候野村源六先祖上代は不詳候曾祖父の野村大守より地頭被仰付初は御祐筆にて候御使役被召成候野村四郎右衛門曾祖父にて候哉野村民部少輔並藏人儀も 竜伯様御代に御心易被召仕候此三流は久敷御家に罷在候と見得申候野村勘兵衛同壽右衛門などは源六庶流にて候勘兵衛曾祖父狩野日州え被遣候事旧記に在之候天正年間野村備中守伊東家より福永丹波守と兩人御内通申上候其故御家に罷出方々地頭職被仰付候て御高被下候備中守嫡孫野村吉兵衛にて候野村源左衛門先祖は備中親の野村但馬弟に加賀其子野村市右衛門と申候加賀備中同前に御家に罷出候に付父子共に地頭被仰付候野村源介養祖父野村宮内少輔後に善左衛門と申候は備中弟にて候源介親の野村太郎兵衛より地頭被仰付候野村清兵衛養祖父も備中一族にて候野村太左衛門先祖は備中伊兵衛と参り候跡より御家に為参の由候備中家来と申伝候

一 田中氏は田中半右衛門先祖田中善兵衛と申者より相見得申候其子田中伊豆事別て被召仕慶長の頃木多佐渡守殿より被遣候御状など其外御知行被下候証書等所持申候就中御旗本佐々木中務殿より本名の佐々木を名乗可申之由被仰遣候証書在之候当半右衛門代にも右の子孫佐々木

源兵衛殿え申入候証書取置候

一 大山氏は 竜伯様え被召仕候大山稻介同氏三次と申者在之候高麗御陣に軍勞仕候賴介孫本名佐々木に罷成佐々木勘右衛門にて候大山主馬曾祖父大山平七後に六右衛門又肥前と申候は頼娃左馬家来にて候処に能馬乘申候故被召出後に御殿別當役被仰付候其孫伊予代に御使役並地頭被仰付候大山源兵衛祖父などにて候哉大山源左衛門と申は入来院家来にて候 勝久公より源左衛門東条丹波え被下候御書等在之候其外の大山も皆一族にて候就中近年町人御敷免被仰付候者共に大山氏多く在之候

一 中江氏は佐々木一族にて候江州九野の里中江を領し申候て罷在候天文年間江州の佐々木一家段落の時中江の一子小重にて候は為墨習或寺に入罷在候故此小重計其死を達れ候得共可頼方なく京都に出半井驢庵を頼医道稽古仕候其後医術に名を呼れ申候故 近衛頼家公より貴久公え御付状にて罷下り候其文牒に医道の儀に付意温齊被差下の由候此者意温齊周林法印と申候其後 近衛前久公當國御下国の時掛御日右の由緒有之御存為被成儀候間弥以 義久公を奉頼可罷居之山周琳へ御書被下候故直に御當國え罷在候周琳御上使などの時分罷出御挨拶をも為申上と見得申候周琳子瑞仙其子才庵其子中江八右衛門にて候中江市右衛門祖父は瑞仙兄中江与介と為中者にて候文之の弟子と見得申候瑞仙は父に早く後れ申候て医道為稽古京都に参り祐乘法印に致稽古候後に家久公より被召下候其子才庵其子八右衛門其子九右衛門医者跡は瑞仙にて候医家の許号代々意温齊にて候中江与左衛門祖父主水は瑞仙嫡子にて候得共医道不仕候故家督相統無之才庵庶嫡子に罷成候

一 源姓山畠氏庶流畠山中務少輔重國入道して權隱軒と号し天文の頃洛中の乱を避け薩州坊津辺に屈居いたし候其後右の段被聞召上候哉被召出候て御客人などの時御席に被召出候橋屋軒男子一人女子式人有之三入共に出家させ候此男子真言宗にて初善行院に住し後に安養院住職仕候長寿院盛淳にて候盛淳還俗被仰付御家老役仕候盛淳関ヶ原にて島津兵庫入道惟新と名乗戦死仕候儀不及書候盛淳男子初長吉後に阿多内膳

と中候長吉の時 惟新様え被召仕御香の番相勤中候盛浮跡を立申聞敷
候内存にて家財等阿多勘左衛門え得御下知致附屬置候其後戦死仕候右
の仕合故長吉も阿多甚左衛門家にて成長仕候長吉祖父父山氏にて候得
共而代共に家号を呼不中候故為存者も無御座候然に阿多甚左衛門方え
罷居候に付諸人阿多長吉と唱申候て或書付等にも阿多と書申候長吉年
少にて在之何の分も不存其後は無是非阿多と号候内膳後に地頭職並横
目頭被仰付候其養子 中將様御甥子杯御成被成候故高千石余も在之候
間与頭被仰付候内膳男子兩人在之候得共病者故終に御奉公不仕候阿多
長右衛門は内膳二男にて候此人式拾計迄は御奉公相勤候阿多淡路殿其
養子にて候阿多權之介は長右衛門兄吉兵衛女有之候に取合阿多氏を名
乗らせ淡路殿二男家に取立られ候

山口氏流々有之候山口五郎兵衛祖父山口内藏之介儀は山口勘兵衛直
友弟の出にて御家に被差出候実に従弟なと申事候勘兵衛殿庄内御陣
尤關ヶ原乱後別て御入魂之儀有之候に付高千石の所務毎年被遣候然
に勘兵衛殿より内藏之介事弟にて御座候間御家中に被召置右高の内被
下子孫迄も被召仕可被下旨被仰付候に付内藏之介被召抱候内藏之介孫
当山口五郎兵衛にて候山口五右衛門は二男家にて候山口氏は渋谷家の
庶流にも在之候此子孫入来院家中より被召出候山口五郎右衛門にて候
尊氏公其外の証書数通所持申候

源姓救仁郷氏は初は伴姓計付氏の庶流にて伴姓無別儀候救仁郷某志
布志之内蓬原之城に居住し其辺を領し申候然に此永の頃渋谷川右兵衛
佐満頼九州の探題と成り下国候満頼の子頼氏被救仁郷氏の女に嫁し救
仁郷を名乗姓は源と号候其後よりにて候哉飯隈山別当職相勤先達に被
任候救仁郷陽慶坊は其嫡孫にて候

大井氏は紀姓上古不詳候得共 道鑑公より被下候御文書在之候間定
て為差立者と存候永録の比大井石見守帖佐地頭職被仰付候其子孫河辺
に罷在候大井七郎右衛門にて候大井氏事後考通曰大井石見守実は紀の
姓にて候鎌倉代大井兵衛次郎実春と云人東鑑に相見得候紀の姓の人に
て候其子薩摩に下向と申伝候又源姓小笠原信濃守長清承久の乱依軍功
阿波国守護職を給ひ四国の官領と有之候此人の四男大井太郎朝光其子

又太郎光長其子彦太郎時光其子太郎光家普為相知人にて此孫御家に参
り大井と名乗申候家有之候是は源姓にて候子孫然と相知れ不申候重て
旧記を以て可考事候

吉井氏は姓迫可考候其初不詳候 竜伯様え被召仕候吉井佐渡と申は
武道の走迫り有之候 竜伯様え致殉死候佐渡嫡孫吉井郷右衛門にて候
吉井七左衛門は郷右衛門二男家にて候佐渡は浜田永林と而輪の様に申
候其外不詳候

愛甲氏は姓迫て可考候是も上古相不知候東鑑に愛甲三郎と有之候建
武の頃愛甲弥三郎戦死仕尊氏公御感状被下候と見得申候此子孫にて候
哉と存候中納言様え致殉死候次右衛門跡目愛甲次左衛門にて候

関氏は姓迫可考候上古相知候永正年間頃よりの知行目録等に関
備中守と有之を関九郎左衛門所持申候是嫡家かと存候関為兵衛曾祖父
関主殿は上井伊勢守に相付日州宮崎に罷居候と見得申候其外は見得不
申候

押川氏は又為川共書申候姓迫可考候上古相知候惟新様え御奉公仕
候押川郷兵衛と申は初新納武藏に相付方々走廻り仕候幸侃より出置候
今藤権兵衛と申者を打取候由にて鹿兒島え被召出候高麗以來別て御奉
公仕候其後関ヶ原戦の前かと関東勢洲侯に著陣仕候処に忍入候て川中
入淵にて敵の首を取申候故右田三成より一番鑑と感状を得黄金壹枚を
被遣候押川六兵衛は右の嫡孫にて候押川喜左衛門は加治木より被召移
候由候

平姓千葉氏は上古御家に為罷居者有之候哉弘安の頃千葉太郎宗胤と
申者軍奉行なと仕候一見状に在判の物有之候其子孫何某共不知候貞
和之頃杯肥前には千葉氏存之候と見得申候大系図に宗胤は常胤七代の
孫但七代は世多し三四代か

牧氏は千葉氏の庶流の由候牧氏事永享年間大覚寺殿福島にて御生嘗
の時出合申候と見得申候又御大手組等に牧彦四郎と在之候嫡孫何者共
不相究候牧源七も系図所持申候此流かと存候

印東氏は千葉氏庶流の由候東鑑に印東某と申者在之候印東玄甫祖父
印東彦兵衛と申は摂州能勢村御領内の時支配為仕由候左候て関ヶ原乱

の時なと少々人数をも差上たるの由候夫故御家にて被召抱と申事候印
東玄柱は玄甫養子にて候能勢曆庵祖父は玄甫親の弟の由候是も本より
能勢村に為罷居由候

一 源姓岩元氏は上古不詳候建武の頃父名帳にも見得申候元久公より岩
元清左衛門に被下候文書在之候 家久公御代小番など相勤申候得は代
々曆々にて可在之と存候其比まで小番相勤候人は並多く無御座候岩元
清左衛門其子孫にて候

一 藤原姓曾木氏は菱刈氏の二男家にて候上古の儀文書等在之候曾木一
所を菱刈より遣申候て代々領し申候中古より衰微仕候哉と存候 惟新
公え被召仕候曾木弥五郎後五兵衛と申候小山原御陣え致御供騎馬拾六
騎の内にて候関ヶ原御陣にも致御供御感状並御知行被下候加治木の曾
木仁左衛門は五兵衛嫡孫にて候曾木甚右衛門は曾祖父曾木權之介と申
候後に甚右衛門に罷成候隆信の役者守一軒と申者を權之介討取候其子
甚右衛門も為相知者にて候當曾木甚右衛門は其養子にて候

一 源姓中条氏は義國より系候建仁の比御國に為罷下と見得申候建武三
年の比軍奉行中条至左衛門入道祐心と在之候其外旧記に數多相見得申
候且又觀應二年九月廿八日合限合戦に戦死申候 將軍義詮公より中条
弥六え被下候御感状在之候中古より衰申候哉中条の系図は島津玄蕃内
中条六右衛門と申者所持申候此系図旧記とは符合不仕候得共余り誤り
為申とは見得不申候

一 平姓鳥丸氏は東郷氏の庶流にて候東郷の内鳥丸名を領し申候中古の
儀は見得不申候天正三年の比鳥丸九紀伊守中郷地頭職被仰付候と見得申
候此者代々東郷家より為罷出と存候此子孫何某共不相知候

一 平姓瀬戸口氏は東郷氏の庶流にて東郷十左衛門先祖同氏藤兵衛先祖
は兄弟にて候瀬戸口藤兵衛子にて候兄は瀬戸口与介後に安房介と申候
て武辺の譽在之後に地頭職被仰付候弟藤兵衛後に肥前守重位は在京の
時分善吉和尚に示現流兵術致相伝候

一 平姓二渡氏は東郷氏の庶流にて候東郷の内二渡を領し候と見得申候
二渡伝右衛門と申者より為罷出と申事候此養子に伊地知伯耆守三男龍

成候て二渡次兵衛と申候高麗御出陣前に五百石の軍役自分に相勤參候
は、帰朝の時高五百石可被下旨被仰渡候故親伯耆守取立申候て五百石
の軍役相勤參り候て軍勞仕候其後御兵具奉行被仰付相勤申候幸侃御成
敗の時なとは御數寄屋口に被召置たるの由候次兵衛曾孫二渡為左衛門
にて候

一 源姓鬼塚氏は佐々木四郎秀綱の子太郎左衛門秀成初て鬼塚と号し候
と見得申候其子孫何の時参り候哉相知不申候大正年間此二男家に鬼塚
兵部左衛門と申は豊後野津にて戦死仕候と系図に在之候西国太平記に
は刑部左衛門戦死と在之候此嫡家鬼塚源右衛門にて候

一 平姓鹿島氏は上代の儀不詳候小川氏龜島を領し不申前に鹿島氏龜七島
を領し申候様に承候天正年間鹿島駿河と申者別て御奉公仕候其嫡孫鹿
島郷兵衛にて候泊の上にも鹿島某と申者在之候

一 源姓深柄氏は大友家の者にて候大友氏没落の時致半人其後 家久公
御代に深柄左門と申者御家に御抱被成候左門親は七左衛門と申者にて
候酒井勲負様御内の深柄は親類にて候左門孫深柄嘉右衛門同七左衛門
なにて候

一 矢野氏姓追可考候矢野權左衛門曾祖父自徳院とて彈琴の人にて候
家久公御抱被成候自徳院初出家にて候後樂人なとに成申候哉と存候矢
野清左衛門は二男家にて候其外も本より御當國に罷在候矢野氏も在之
候矢野主膳事（註主膳は別家にて候半と存候）惟新様被召仕馬の上手と申
事候其孫共代々無殘罷成候主膳事鬼利支丹故大罪に被仰付候

一 平姓市來崎氏は貞盛の五代の孫權別當種國薩州山門院を領し候其子
因秀死去故因秀子秀忠に將軍家政所御下文被下木領安堵申候文書の写
本田次郎左衛門所持仕候秀忠の子孫建武の乱に致軍功候儀旧記に相見
得申候此子孫何者共不相知候市來崎庶流に小名字數多在之候久米市兵
衛と申者是も同姓にて系圖所持申候

一 郭姓汾陽氏は異朝の人にて候永録二年郭国安光禹廿三歳にて日本え
渡り其後光禹理心と改候て京泊に着き暫罷在候 竜伯様達高聞被召移
へて通毎度被仰下候に付直に御國に罷在候日本え渡海の事は光禹及弟

参り候処に早及弟過たる由途中にて承分陽え帰候処に日本え渡船有之候故与風爲見物参たる由候汾陽元祖の事は周王季の後裔汾陽王に被討直に彼地に居住し邑人と成り光禹迄も被居候日本にて明人高樋三官に医術致稽古候文録元年高麗人の時志布志大慈寺と理心を書翰の通用に被召列候且又理心於新塞敵陣に御謀計被遊候に理心明將諸葛疑と云者に書状を遣糧倉を焼へし其煩を見て無別儀と可知と書て遣しけると太閤記並將軍譜に詳に候此謀故大勝利を被得候是偏に理心故に候後迄も明兵が理心が御方に内通仕ると存居候に付其段日本にて明人共申上候に付於天下理心被逐御糾明候処に無別儀御下知にて謀書仕候事無其隠候故無難候此事武備志等に相見得申候後に御加増等被下候理心男子式人有之候嫡子永右衛門早世故弟正右衛門致相統候正右衛門嫡子汾陽茂右衛門是理心跡目にて候汾陽次郎衛門は次郎右衛門子八右衛門にて候永右衛門女子に取合高をも相良正右衛門弟分に取立申候間尤二男家にて候

林氏は異朝の人にて候林久兵衛祖父は異国より來候て罷在候処に太閤寺御屋形の時 竜伯様より御庭前の梅花に詩百首被仰付候百首作調候て備上覽候故則百梅と名被下候其子通甫と申候て医道仕候此子久兵衛にて候是林放の子孫と系図に相見得申候

江夏氏は友賢と申候異国人にて候代々易者の家にて候本朝に参り候ても易故致参内 禁中様より葦木なと拝領申候其子二閑其子自徳其子江夏仲左衛門にて候

高樋三官許氏にて候此者於肥前名護屋に 権現様え御薬を上ケ申候て為相知者にて候子孫無之候

一 額川友官跡目額川伝右衛門同安兵衛

一 平城一官跡目平城市左衛門にて候

一 大原一官跡目大原佐五右衛門にて候

一 塩官泰官跡目塩官六兵衛にて候

一 為足養子安岡甚左衛門にて候

一 額川三官跡目額川八左衛門此三官

光久公

中將様御幼年の時御薬り上げ申

候て不思議の御養生共仕候

右の考太刀上に被召成跡目無之候

一 前川休宅祖父前川為仙と申候は朝鮮人にて候 中將様御幼年の時御託書並御詩作の御指南なと為申上由候

一 藤原姓松木氏は慶長の初松木少將殿勅勘故龜島え配流にて候大炊御門中將殿も同前に候中將殿上龜島中梶原宗古娘に嫁女子若人出生候て慶長十八年に死去候左候て宗古娘又松木少將殿え取合申候て右の娘を列ゆき候松木殿女子式人男子志人出生候同腹の兄弟にて候大炊御門殿女子龜七本田八郎兵衛に嫁候て当本田八左衛門同藤右衛門母にて候松木少將殿息松木少兵衛と名乗申候鹿兒島へ被召移自分の買地なと有之又 公儀より御心付切米式拾石つゝ被下候女子は 光久公に被召使候おひちやと申候少兵衛息松木為兵衛近年死去仕男子無之女子計にて跡断絶中候少將殿所持の古今集は不相究候得共二条為明被持せ候本の由にて為明小書なと被成候書にて候少兵衛代に被差上候此外にも色々進上の由候

一 源姓那須氏は与市宗高の嫡子小太郎宗治 忠久公致供奉罷下直に日州日許郡に居住仕候と見得申候夫より日州の国人の様に罷成子孫代々軍功を勵し候其後にて候哉日州雅葉山に居住仕代々領主候其所を直に那須と唱中候那須左近將監其子彈正代に 義久公日州を御退治可被遊と被思召那須御先手仕候は、山境の辺知行可被遣候間自今以後御旗下に罷成御奉公可相勤通承候に付御請申上彈正十三歳にて 義弘公え御目見仕御旗下の御契約申候那須氏其比は大友家に隨身と見得申候夫より方々御出陣御供仕於所々一族戦死仕候其後彈正二男主膳を御家に差上高五百石被下候尤彈正は御旗下御契約ば申入候得共秀吉公御下国の時分本領安堵仕罷近にて罷在候放右の通二男を差上申候然るに主膳兄早世仕如元主膳兄彈正跡を相続仕 公方様え御供申上候此方様御取持の由候主膳跡には弟五左衛門を差上申候て主膳は那須嫡家を相続申候然処に主膳御当国に参り候て罷居候内に那須に一揆起り御上使御下向被成御鎮め候其一揆の趣可致披露と上落仕りて罷在候内に 台徳院様薨御被成御奉行衆も御替合被成候故中立も不罷成其間には上野高崎城主

安藤對馬守殿は御預りにて罷在对馬守殿も頓て死去故終に不相達候然るに御家に罷在候那須五左衛門死去仕男子無御座候に付安藤右京殿に主膳息当五左衛門を御所望被成候に付被遣候主膳は高崎にて相果られ候五左衛門妹在之候に猶子仕那須を名乗于今安藤殿に罷在由候那須左近將監に被遣候御狀など別て御叮嚀の様子に見得申候

一 藤原の姓米良氏は菊池一族の由候代々日州山中米良を領し申候て家号となし伊東家に致隨身所々の地頭職にて候夫より御家に罷出其所を直に地頭職被仰付候米良越後同右京同駿河などと申人在之候米良小右衛門え宛書にて 忠恒公より御感状被下並御高五百石致拜領候御証判米良準人所持仕候此小右衛門御家に罷出候か又其子などにも候哉追て可孝候米良春椿と申候は米良準人祖父にて候此家の先祖御家に罷在候米良權之介と申候人慶長の比在之候當權之介祖父の由候

一 赤塚氏は源姓武州赤塚と申處に致居住家号といはし候元弘建武の乱に所々にて子孫軍勢仕候 氏久公御代に御家に罷出子孫代々御奉公仕候天正年間赤塚源太左衛門方々にて軍勢仕候是輕大將被仰付置候高源城責前かと敵地に釘を御伏させ被成候事源太左衛門と佐竹光明坊仕候其子赤塚三右衛門天正十五年羽柴美濃守秀長の陣に細田覺右衛門と商人質に出候赤塚清左衛門此筋目にて候赤塚吉右衛門曾祖父吉右衛門は竜伯様え致殉死候其弟利七は高麗にて戦死仕候古右衛門は清左衛門二男家にて候

一 中村氏姓追て可考候古來薩州の御家人にて候文和曆必の頃中村四郎家忠中村輝正忠秀純などと申は旧記に見得申候夫より以來何にも見得不申候子孫何某共不相知候中村与左衛門先祖は伊東家より参り候此者和泉某と申者にて伊東家に質に被遣置候處彼方にて危御座候時中村氏の者養子に仕由候夫故于今和泉氏系圖所持中候其外の中村なと然と不相知候与左衛門中村は源家と申伝由候肥後矢崎の城主中村一太夫同弟二太夫と申候子孫定て可在之と存候

一 福屋氏姓追て可考候石見国より出たる由に候本は將軍家に奉仕たる事も在之由候御家に参り候事は伊久守久父子御矛盾の時御加勢仕夫より御立入仕直に御家來に為罷成由候其後は然と見得不申候得共永録の

比四ヶ所衆に福屋日向守と申者仕之候其子孫にて候哉福屋伊賀光久公御代御祐筆仕後には地頭なと被下候其養子竹之内備前二男を以福屋助左衛門玉子御犬道物御人数に被召加伊賀以來代々地頭職被仰付候当助左衛門代御用人役被仰付候

一 竹之内氏は是は紀姓と見得申候其源不詳候永録の頃に竹之内備前と申者祁答院家に罷居候彼家衰て後家來共附近に罷成候時備前も祁答院家より罷出候備前武功在之中にも関ヶ原乱後肥後勢出水米の津辺を侵し候時分紹益父子に相付働候事歴然に候備前子孫竹之内八右衛門にて候竹之内内膳は此二男家にて候竹之内助市親自休は備前中納言秀家當國へ御座候時附來候由にて直に御抱被成候御包丁人にて候自休事南甫文集に兄得申候

一 大野氏姓追て可考上代不相知候慶長の頃大野外記と申者在之候其子孫大野堅物にて候勿論薩州家と各列にて候

一 藤原姓小森氏は鎌田氏の庶流の由候小森八左衛門え鎌田藏人殿より孫國被遣置候

一 大藏姓原口氏は加治木の庶流の由候

一 間世田氏姓追て可考天正の頃間世田刑部左衛門と申者市來に罷居御奉公仕候と見得申候其後其子共川上左近將監に相付志布志に罷移川上因幡迄は与力仕候其後鹿兒島え被召移候間世田七兵衛は刑部左衛門子孫の由候

一 平姓野田氏は阿久根の一族の由候古來野田辺を領し候て号野田候元弘建武の頃の旧記にも見得申候其後終に見得不申候尤子孫何某共不相知候野田勘兵衛祖父は加治木に罷在其後横川に罷移近年鹿兒島え被召移候中頃やうやうの跡にて罷在候山候野田玄寿其外一族の者在之候尤古來の筋目の機不相知候

一 白坂氏姓追て可考候代々北原家に致隨身候北原氏致衰微家人皆昵近に罷成候時被召出候白坂佐渡同美濃なと地頭職被仰付候兩人間の孫にて候哉白坂宗兵衛と申者高麗以來別て御奉公仕候其孫仲左衛門にて候宗兵衛迄は高五六百石も所持申候白坂市郎右衛門養祖父は白坂大学坊意益と申候関ヶ原より致御供罷下り候内にて候御感状並御知行被下候

山伏かと存候

一 源姓大脇氏系図文書小林衆中大脇嫡家故所持申候 義詮將軍など御判其外証書数多在之候中古以來然と見得不申候其外大脇正右衛門は右の一男家にて候

一 長崎氏姓追て可考候上代の儀不詳候長崎為右衛門同喜兵衛祖父など幸侃に致隨身候後肥近に為罷成申候喜兵衛祖父佐渡は其父恒吉の城主の由候因分衆中長崎千右衛門先祖は伊集院の内長崎格を為持申出候長崎と申所彼所に在之候如何様在名をいつれも名乗為申と存候為右衛門父助左衛門は御祐筆にて候

一 中神氏は相良の庶流の由候上代の儀不詳候是も幸侃に致隨身候中神石見と申候は当内蔵之允祖父にて候父内蔵之允は島津下野守与力仕候

一 中西氏姓追て可考慶長の頃虎屋長門御家に被召抱候長門能を太夫に致稽古候に付 家久公別て御取持被成候正月二日御太刀を諸地頭並に致持參來候出尻氏志岐氏などは城主の孫にて候故年頭地頭並にも御太刀持參申候得共此類の衆高橋土持などは太刀進上仕候然候は長門事右の通の儀近頃難心得事に候長門正六位に叙候禁中並 両公方様御成の時も能仕候長門家号は中西にて候又小幡にも号候乍然長門代には大方虎屋と唱申候太阿弥光悦狀に虎屋長門能進能仕候見物に参り候と書申候狀在之候を惜に見申候難号虎やにて候長門参り候てより上村九郎兵衛立石五介永井九兵衛舟木次兵衛祖父杉山右京など其外の芸者なと被召抱候就夫惣様下知仕來の由候長門嫡子左兵衛早世仕弟分右衛門連統仕候

一 上村氏姓追可考其初及中古不相知候上村堅物父久左衛門と申候上村茂兵衛父茂兵衛は水野日向守殿に罷在其後幸人仕罷在候を被召抱候其時は榊原山三郎と申候被召抱候てより上村平右衛門跡目に被仰付候後に奏者番相勤候

一 清水氏姓追可考清水弥兵衛祖父堅物は志布志町人にて候を御赦免被遊後鹿兒島へ被召移候其子弥三左衛門より騎馬に被召成候

一 源姓貴島氏は頼政之余裔の由候外城に貴島の某と申者 忠国公より被下候御書所持申候貴島公左衛門其外此一族皆右一類にて候

一 福崎氏姓追可考其初不詳候 氏久公筑前国金隈にて御戦死に相究候

時分伊地知彈正御名代に戦死の時彈正家人福崎主税助に申付 氏久公を奉隠何とを御供申帰国可仕と申付候故博多の林香庵に奉隠比丘尼をたのみ申候其後何事なく御帰国故主税助を肥近に被召成候此子孫にて候哉 元久公御書物に福崎太郎次郎と申者在之候谷山土伊地知彈兵衛は福崎主税嫡孫と見得申候福崎氏は伊地知庶流の由にて皆伊地知と改申候乍然庶流にては在之間敷候中馬福崎石塚以下の家來を島山重忠より薩州へ 忠久公御下国前に下し候事旧記に在之候石塚事ハ無余儀者にて候事は歴然に候福崎清左衛門祖父福崎新兵衛は天正の比浄光明寺住持の草履取にて候処に致立身候石田治部少輔薩国下向の時罷出筆算などの御用に相立申候其後石田殿より吉田美作白浜次郎左衛門福崎新兵衛高麗以來別て御奉公仕候間御知行可被下旨龍伯公へ御狀被遣候夫故過分に御知行被下候其後慶長の末年大阪御陣の時などは大阪御藏奉行相勤申候其子の新兵衛も島原にて城棄いたし候内にて候

一 橋姓中馬氏其初不詳候島山重忠家來数多 忠久公の御下国前に薩州え下申候内の由候又伊地知彈正御當国え下向仕候節中馬三郎通安と申者供仕候て罷下り候此中馬氏近年は伊地知と改申候衆数多在之候尤近年迄も秩父勘助父祖家來にて罷在衆有之候橋姓にて御座候間伊地知庶流にて無之段は歴然に候

一 橋姓藤崎氏は 氏久公の御代の頃藤崎佐渡守広頼と申者薩州に参り候と見得申候夫より直に向の島に罷居候哉于今子孫藤崎正兵衛松島衆中にて罷居候慶長六年夏 義弘公彼藤崎氏が所へ御塾居被成候て両月御座候于今旧記有之候藤崎六太夫養祖父六郎左衛門本は幸侃に致隨身後肥近に罷成の由候

一 長沼氏姓追可考伊東家より参り候長沼七右衛門養曾祖父別府宮内少輔と申者木崎原にて戦死申候由首住文二見得申候伊東家にて清武地頭と有之候其子孫御家に参り福昌寺門前に罷在候がやうやうの跡にて候得共只今の跡に罷成候由候

一 野津氏の姓追て可考候其初不詳候元和寛永の頃野津安右衛門と申者島津下野守騎馬与力相勤申候其後物奉行被仰付候其子弥五左衛門後に

安右衛門と申候は 光久公御納戸役にて後には地頭職御用人に被召成候其子野津藤左衛門にて候祖父安右衛門父にて候は佐土原より参候て石細工仕候由候

一 徳永氏姓追可考候高麗御屏風に徳永助右衛門と御座候は徳永甚平曾祖父にて候徳永善左衛門家は相見得不申候

一 黒木氏姓追可考候高麗にて慶長三年十一月十八日の番舟取合に此方の舟印を番舟より取行しを黒木左近兵衛と中者海に飛入游行候て番舟に乗取返し候事之候此子孫出水衆中にて候此外は不詳候

一 黒田氏追可考候黒田友右衛門後に嘉兵衛と申候高麗以來武功在之者にて候初は町人の由候右の道の者にて候故被召出候と申事候其外は不相知候

一 久保氏姓追可考候其初不詳候久保七兵衛曾祖父七兵衛は 義弘公敵野に被成御座候時又一郎久保公久仁礼藏人父と兩人御付被成候て別て御奉公仕候其子七兵衛高麗関ヶ原にて別て御奉公仕候久保正兵衛曾祖父久保筑前初は少八と申候て新納武藏に相付家來の由候得共附衆中にて候哉不詳候筑前於所々武州に相付武功在之たる由候近年迄大口衆中にて候処に鹿兒島え被召成候

一 木藤氏姓追可考候其初不存候御記録奉行淺葉三右衛門殿より被為書候て被遣候系図所持申候由承候得共終に見不申候いか様御普代家にて候哉御葬礼の時などは御証籠の役儀相勤の由候木藤宇左衛門は其子孫と見得申候長左衛門など庶流にて候

一 伊丹氏姓追可考候 惟新公伊丹道甫と申者宛に医道仕奉人にて罷在候を被召抱候殊ニ茶湯者にて其名も在之と見得申候伊丹大和守子孫と見得申候別て無余儀者の由其証書等在之候加治木士伊丹孫兵衛は道甫嫡孫にて候

一 宇治姓宇都氏は阿蘇の一族にて候代々肥後宇都を領し申候と存候其庶流にて候哉国分士宇都市左衛門と申者在之系図等所持中候得共不分明候宇都長兵衛も定て右の一族と存候

一 藤原姓安藤氏は 忠宗公御代に安藤四郎左衛門景綱と中者御家老と見得申候尤子孫不相知候安藤仲左衛門曾祖父安藤左近と申者 竜伯公

大平寺え御出の時御輿を昇候故御知行五右被下候皆此一族は嫡庶不分明候

一 洪江氏姓追可考北原氏に罷在洪江上総同兵庫など申者有之由候紀姓竹崎氏は文明の頃竹崎伊賀守と申者有之候其子孫にて候哉天正の比竹崎越中など申者在之候越中子孫桃山権左衛門家來に竹崎仲右衛門と申者在之候

一 源姓松崎氏其初不詳候天文の比松崎丹後と申者更久方に有之候其子孫不詳候肝付家に松崎某と申者肝付家の犬追物射手に在之候肝付家臣と見得申候

一 福山氏姓追可考 家久公御代に福山兩連と申候て在之剃髪にて納戸役相勤候其子福山平左衛門にて候

一 源姓大窪氏始不詳候慶長の比大窪備前と申もの別て被召仕候と見得申候御狀など有之候其子孫大窪源太左衛門にて候此家に系図有畠山重忠子孫と系候得共分もなき妄作にて候

一 上床氏姓追可考候高麗の新塞御合戦に上床吉右衛門と申者明人の陣に宵より忍入未明に一番首を取りて出し候其外に今迄人先陣を争ふ人々不分明候処に 義弘公城の櫓より御覽被置候て御意候其否に参候者筋の羽織を着たる者の由候吉右衛門石たため具足羽織着いたし候を遠見には筋の様に候尤老人は羽織着不仕候故吉右衛門一番首に相究申候此者久保公御供仕小田原に参候十六騎の内にて候其子上床藤右衛門と申候是も別て 義弘公被召仕候後に江田に罷成候嫡孫于今加治木に罷在候江田武兵衛は二男家の由候

一 美坂氏姓追可考候美坂太郎右衛門曾祖父は大工仕たる山候太郎右衛門祖父宇左衛門より奉行職被仰付候

一 源姓西侯氏は比志島氏の二男家にて西侯を致領地候元祖は博多警固番をも比志島名代に為仕山候西侯を伊集院家に被取致家致致隨身之由候て比志島の次西侯にて候得共同列には不罷成候其後は蒲生家致致隨身代々家老を勤其上八幡宮の大検校を勤中候弘治三年蒲生氏御幕下に被参候時城を渡し申候は西侯出羽矢上人膳と申者にて候犬より如入来立除致居仕候其子孫鹿兒島え被召出候西侯教馬は出羽子孫にて候又

天正の頃西侯七郎左衛門と中者右之候足輕大將をも為仕と見得申候子孫何某とも不相知候

一 建部姓山元氏は弥寝氏族の由候山元氏事旧記等にも見得申候文書等も有之候此子孫は山元孝右衛門の由候稱履少右衛門家も初は山元の由候然はいづれも嫡庶難申候山元七郎右衛門は久保公に殉死申候山元勘右衛門猶子筋にて候其外は不詳候山元五郎兵衛祖父は異国人の由候名追可記候五郎兵衛代に初て騎馬に被召成候初は丹清と申医者にて候末弘氏は北郷家庶流と申こと候子孫は何某共不相知候得共河辺に末弘某と申者は勝久公の御家老末弘伯耆守子孫の由候其外不相知候伯耆守被誅事不及記候

一 小倉氏姓追可考上古不相知候勝久公の出頭人に小倉武藏と申者有之候武藏に久の御字迄勝久公より被下候御証判有之候小倉竹内証山末弘なと御博奕の相手に為罷成の由候小倉四郎右衛門は武藏子孫故被下候御書など致格護置候

一 前田氏姓追可考伊地知の庶流にて候と申近年前田氏のもの伊地知と改申候も在之候伊地知の系図には不相知候中馬前田福崎などは皆家来筋にて御座候肝付主殿家来に前田某と申者の先祖前田四郎左衛門は勝久公に致御奉公被下候御書など致格護置候其外は不相知候又肝付庶流にも前田名字の者有之候

一 知色氏姓追可考候永和の頃出水知色の城を持候者に知色彦三郎入道行覚と申者有之候と旧記に見得申候子孫不詳候

一 藤原姓馬越氏は菱刈氏の他腹の長男にて候文書等有之子孫無之候一 橋口氏姓追可考候市来氏の庶流も有之候谷山波平の鍛冶橋口氏にて候候彼家元祖正国と申候は一条院の御宇の者にて其時より橋口氏にて候哉不詳候波平鍛冶の子孫は谷山家中橋口三郎兵衛と申候て于今鍛冶にて候正国橋口氏にて候哉又此鍛冶系図計にて候哉難計候尚可尋候

一 池上氏姓追可考候觀応の頃池上弥四郎と申者將軍家より被下候御教書有之候父四郎兵衛光久金陵にて戦死仕候其後子孫詳に見得不申候一 小浜氏姓追可考候道鑑公より小浜十郎氏純へ被下候御証判有之其

外にも文書有之候子孫不詳候大隅国人にて国分の小浜辺を領知申候かと存候

一 宅間氏姓追可考候貞和の頃宅間種正と申者有之其後不見得候天正年間より宅間与左衛門と申者足輕大將仕於方々覺有之由候関ヶ原より御帰国に豊後の海上にて致戦死候其猶子筋宅間平助にて候

一 野元氏姓追可考候貞和の頃野元孫七と申者有之候其後不相知候島原にて戦死いたし候野元源左衛門は三原左衛門致与力候当野元源左衛門祖父にて御座候

一 坂元氏姓追可考候元徳の頃伊作院庄内坂元堀内屋敷論所有之候大に坂元刑部坊燦田と申者有之候あまり少身共見得不申候其後は何そに見得不申候坂元平右衛門祖父興左衛門などは伊集院の莊嚴寺の住持何某の法印と云人を御討せ被成候時掛り合たるの由候

一 西郷氏姓追可考候建武の頃西郷九郎秀範と申者在之候其後子孫見得不申候

一 古木氏姓追可考候建武の頃古木彦五郎入道同三郎入道などと申者在之候子孫不詳候

一 紀姓宮里氏は仙台の宮里を領し申候建武の頃宮里孫七同郡司孫九郎久保応永の頃に宮里若狭守と申者有之候一 觀様御簾中は宮里氏の娘にて御座候を御離別被成候時分薩摩山中にて生害被成候と申事候為差立家にても可在之と存候尤御一族にも在之候得共十二代の後は是は断絶と見得申候宮里孫之進祖父宮里老岐は福昌寺門前に罷居候琴細工稽古被仰付家久公被掛御日候已に四辻大納言季繼郷人被仰入禁中様御樂器の内巴の琴を御写させ于今有之候又禁中様え琴一張御作らせ被成候て被献于今有之と申事候亦宮里若狭守と為申者有之候干台宮古村十町を犬太郎殿より被下候証書有之候左候て宮里と名乗り候得共証書は宮古と有之候故宮古に可改と申聞候其筋と申候て南林寺門前に宮里玄永と申者在之相馬忠朝之久種と書候て被遣候文書有之候一 日田氏姓追可考候又肥田共飛彈なと共書申候古昔不詳候忠昌公御代に御大呼次仕候に飛彈七郎と申者在之候子孫不詳候

一 折田氏姓追て可考候上古終に不得見候四ヶ所に罷居たる家かと存候
折田八右衛門祖父折田勘解由は初御右筆を相動物奉行被仰付候折田彦
右衛門其外此一族と存候

一 長田氏姓並由緒追可考候

一 源姓松田氏は逸見の二男号松田候と見得申候子孫御家に罷出 日新
様に被召仕候 竜伯様御代に松田和泉と申者在之候其子孫松田七郎左
衛門にて候松田与右衛門先祖は此二男家にて候南市文集に松田貞右衛
門と申者狂言仕候事在之候松田与右衛門祖父にて候

一 源姓日高氏は紀州日高と申所を領知仕候其後御家に罷出候天正の頃
日高掃部左衛門と申者方々走り廻り仕候日高与一左衛門は掃部左衛門
孫にて候此家嫡家かと存候其外委不相知候系図与一左衛門所持仕候故
先如此相考中候其外も定て為相知も可有之候得共無是非候ケ様の類多
々有之難記候得共序に相記候

一 武氏姓追可考候家伝には称慶氏の二男家と申候上古不相見得候代々
鹿見島武村を致領知候と申事候下大隅の伊地知重興御家に背候て度々
寄来候時など人数を集め取合候重興家来田上二郎之介と申は強弓の者
の由にて武氏へ寄来り射付候征矢の由申伝于今有之候矢の銘に田上二
郎之介と在之由候委細は不相知家にて候得共如何様彼辺を領し中候様
に申候間左も可在之と存候武彦兵衛其子孫にて候武彦左衛門と申は
竜伯様へ致殉死候此子孫武彦左衛門にて候

一 木原氏姓追可考候慶長の頃木原七郎三郎と申者関ヶ原より御帰国の
御供仕候て御感状御知行被下候其子孫木原林茶にて候

一 山崎氏は渋谷氏族の由候東郷氏の家来かと存候山崎伯耆と申者在之
候子孫国分衆中にて候山崎殿七曾祖父は泊の町人の由候富人にて候故
後は士に被召成候様に承候初は肥後某と申由候藤七父藤兵衛は御兵具
奉行被仰付候

一 川村氏姓追可考候上古不詳候 日新様御領内の時分泊の地頭に川村
七郎左衛門と申者在之候子孫不相知候川村七郎左衛門系図所持仕候由
候得共未見申候川村少左衛門父は田舎に致居住候を島津三郎右衛門殿
母は川村氏女故被召出候輕き御奉公共為仕の出候

一 二之宮氏姓追可考候上古不相知候出水士一の宮宮次郎右衛門先祖
に被召仕候之候于今二の宮殿と申候是は天正の初頃 近衛前久公薩國に
御下向の時御家来伊勢備後守貞知致御供候時薩州義虎鞍の寸法並打様
迄も稽古せられ候書物有之候間其時分二の宮も致稽古候か又義虎より
相伝候かと存候二の宮殿は太形本所の押形に替り不申候と申事候二の
宮次左衛門父桃庵は次郎右衛門弟にて候

一 平姓天辰氏は木田氏の庶流にて候御大手組に天辰新六と申者在之候
子孫不相知候

一 建軍氏姓追可考候 義弘公御代に建軍猪右衛門と申者を他國より被
召抱候て他國え御使者など被仰付候間ヶ原より御帰國の致御供候内に
て御感状御知行為被下由候猪右衛門子孫建軍十左衛門にて候

一 田辺氏姓追可考候田布施を 友久公御領の時地頭田部三河守義弘
と申者に被仰付候又被成下候御判をも致頂戴置候其子孫于今田布施士
田部四郎左衛門と申候

一 源姓須田氏は天正の頃 義弘公御在京の時分須田佐渡其子伝吉と申
て奥州の伊達正宗衆にて在之候処に致宰人罷在候を被召抱候佐渡事於
彼方成程結構に為被召仕由候政宗より被遣候書状致通在之候伝吉関ヶ
原より御帰國の致御供候内にて御感状並御知行被下候其子孫須田十郎
左衛門にて候伝吉事白坂氏の猶子に罷成白坂摂津介と為申由候亦伝吉
弟に摂津守と申者在之と申事候一人にて候哉又兩人か追て可考候

一 宇治姓木山氏は阿蘇氏の二男家にて肥後の木山を領し号木山と候加
藤清正記に見得申候肥後本戸の城主木山彈正事於天章戦死仕候其時嫡
子伝九郎も一所に戦死仕候此時彈正を清正被為討候事は不及記候弟縫
殿介と申者を此從弟に天章上総と申者召列御家を頼参り候て野田に罷
在候縫殿介嫡子は伝九郎二男は良伝坊と申山伏にて候伝九郎事は中将
様へ定御供相勤候其子早世仕候故良伝坊の嫡子木山与右衛門を跡職に
仕候彈正子孫は于今野田衆中にて候

一 芦谷氏姓追可考候先祖不詳候芦谷源太左衛門養子芦谷蔵之允にて
候源太左衛門父は御台所に為罷居由候此家御氏族の阿蘇谷にて候を芦
谷と改申出其家には申伝候得共左様にては有之問敷と存候

一 平姓樋口氏は木曾義仲の家臣樋口次郎兼保の子孫肥後國に下向し八代辺に致居住候処に天正年間平川美濃守光宗此樋口飛彈と申者を頼み計策を以彼刃御手に人候に付後に御家に参り候て罷居候於高麗番船取合に致戦死候其子孫不幸にして同分に居住し後に樋口牛之介事は浄光明寺門前に罷居男子共は皆々死果申候て女壱人和殘候二男家に樋口久左衛門殿と申人は摂州芥川に罷居 將軍家に御昵近にて于今有之候

一 平姓帖佐氏は平田氏の一族にて隅州帖佐辺に居住と見得申候家号を在名に仕候哉平田氏帖佐氏も平田宗盛の孫信宗の後と申儀時代覺束なく候得其野辺氏同前と考候此帖佐氏の子孫帖佐彦左衛門事惟新公へ奉附足輕大將にて方々にて走り廻り仕為相知者にて 惟新様より被成下候御状有之候彦左衛門子孫は帖佐次左衛門にて候天正の頃帖佐三五坊並虎を取候帖佐六七など此家より出申たる者にて候

一 息長姓美代氏は吉田氏の庶流の由候

一 久木崎氏の姓追可考候伊集院の内久木崎村を領地いたし故家号候探提北条英時の裁許状三条侍從殿の一見状なと其外証書有之候此子孫天文年間貴久公致供奉四ヶ所より罷出候久木崎五郎左衛門同年人佐と申候此年人代に平田氏に罷成候其故不詳候平田濃州に相付其出緒も在之候哉と見得申候年人子石見是も又久木崎共名衆又平田石見と在之候別て走廻り在之候蒲生北村辺を頃し申候哉此辺地頭か亦是足輕大將かと見得申候其子藤九郎後に吉左衛門は兵具奉行被仰付候此子孫平田堅介にて候

一 勝日氏は姓追而可考候其初不詳候高麗旧館に検使に被遣候勝日兵右衛門御兵具奉行と見得申候後加嘉入道

下文闕たる歟

諸家大概申終

明治二十年八月以平川宗高之本校合

(原表紙)

別本諸家大概記
鏡智流槍術由来
新納是久一流略系図

三部合本

(原寸縦二六糎、横一九糎)

別本諸家大概記

此二十家は自家の系譜文書を以相考大概書訓中候此外相頭候家御座候得共事繁候故略仕候尤家の高下次序不相分書記候且又於御記録所書記候上は他見の儀御用指可有之と奉存候左様に無御座候得は家々の批判に罷成還て障に可罷成事に御座候間仰御賢慮候

種子島氏

一 平姓種子島氏系図は安芸守清盛三代の孫左馬頭行盛の子肥後守信基依北条時政の執奏隅州種子島を領世々伝領の地にて御座候種子島左近久時入道一琢 竜伯様被補御家老職嫡家当藏人殿にて此外種子島氏は皆庶流にて御座候

菱刈氏

一 藤原姓菱刈氏は大職冠鎌足十六世関白忠実の三男宇治惠左府の三男左中将陸長の子三位右中將の三男進士判官重妙拜載後白川帝の院宣賜隅州の内菱刈の郡其後建久五年重妙菱刈に致下向以菱刈家号に相定代々伝領仕菱刈伴右衛門重広に到去菱刈伊集院の内神殿領知仕候由自家の系図に記置候嫡家当菱刈孫兵衛にて其外の家々は庶流にて御座候

諏方氏

一 大神姓上井氏は辺田七人の中にて隅州の中上井下井の両所を領以上井家号に仕候天文年間上井武蔵守兼薩州永吉の郷拝領仕嫡子伊勢守覺兼竜伯様御家老職にて日州海江田被宛行同国宮崎に被移置其子上井治部経兼代に諏方上井の両氏上古同姓の由にて依信州の諏方氏得免許諏方氏に相改候由自家の系図に相見得候嫡家諏方甚六殿其外の家々は庶流にて候

鎌田氏

一 藤原姓鎌田權守通清三男藏人太夫光政事長兄左衛尉政清遭不意の殺

害候間家相統可仕者無之故光政為後嗣其子修理亮政佐と申者忠久公御仕御当国に為罷下由自家の系図に相見得申候到子孫出雲改近治部少輔政統藏人正勝御家老職被相勤候嫡流当出雲殿正武にて候

平田氏

一 平姓平田之先祖肥後房良西と申者帖佐地頭職の儀東鑑にも相見得申候子孫平田新左衛門親宗入道玄親美濃守氏宗美濃守兼宗入道洞印美濃守昌宗美濃守光宗入道舜盧美濃守藏宗太郎左衛門増宗 御代々御家老職相勤太郎左衛門弟休兵衛宗親迄も 竜伯様御隠居御家老相勤候処に太郎左衛門不忠の事御座候故兄弟共に伏誅故嫡家断絶仕候其外の平田家は庶流にて御座候

本田氏

一 本田氏は 忠久公御供仕御当国に為罷下由中佐候平姓にて候得共藤原姓に相改候本田重親信濃守氏親信濃守元親入道安了信濃守重恒因幡守國親代々御家老職相勤中候隅州清水を世々致伝領候処紀伊守重親左京大夫親兼父子奉背 貴久公候故清水城を被攻落候親兼子与左衛門公親入道玄叱は 竜伯様御隠居御家老相勤申候嫡流当信次郎にて御座候

高橋氏

一 大藏姓高橋氏は其源秋月氏より相分秋月春実之余裔にて高橋中務大輔種時筑前の内を領養子高橋三河守顯種宝満城に致居住吉弘氏の一子を養子に仕高橋紹運と申候紹運事顯種心に不相叶秋月修理太夫種実の子右近大夫元種を致養子候顯種及死に可貴亡紹運の遺言仕候依之元種奉乞薩隅口の援兵天正十四年筑前岩屋城開攻紹運及自殺候 義久公秋月種実高橋元種父子に岩屋宝満の両城被宛行天正十五年秀吉公西征の時右近大夫元種の旧領を相改移日州杵郡奥城采地五万三千石賜候慶長十八年右近大夫元種背將軍家の命所領被召上奥州棚倉に配流嫡子高橋一斎は奥州二本松に配流為被仰付の由一斎の弟高橋七郎右衛門種直 御家に罷出右の養子當高橋七郎右衛門種十にて御座候

一 禰 寝 氏

一 建部姓禰寝氏世々隅州の内禰寝院の領主にて沙弥清重入道行西將軍頼家公の御下文被下置子孫伝領の地にて禰寝安芸守電張代に先領相改薩州の内吉利郷并領にて御座候嫡家禰寝德慈丸殿にて候

村 田 氏

一 藤原姓村田氏菊地領主兵藤四郎経頼五男村田五郎経秀の子孫阿闍梨如嚴薩摩に下向し其孫通善 太守忠国公の御時初て 御家に奉仕候由自家の系図に見得申候子孫肥前守経房肥前守経安越前守経定右衛門尉経平等は被補御家老職候嫡流村田五郎左衛門経貞にて御座候

三 原 氏

一 藤原姓三原氏兵藤大夫経俊後胤と自家の系図に見得申候子孫遠江守重益入道昌安備中守重種左衛門佐重庸等御家老職にて候嫡流三原諸右衛門重房にて候

吉 田 氏

一 息長姓吉田氏正八幡宮の神官にて代々薩州吉田院の神領を領し候子孫美作守兼清は御家老職にて候嫡流納右衛門経清にて御座候

土 持 氏

一 田部姓土持氏は其先筑前の国宇佐八幡宮の惣弁官にて領日向国門川号門川七郎則綱嫡孫土持冠者榮妙と中候夫より嫡々相統仕土持右馬頭親成天正五年 義久公へ御内応申上候に付豊後大友氏軍を出興の城攻落候故親成豊後国に致退居其後戦死候其子彈正忠久綱長門國へ蟄居仕候を 義久公被召出旧領奥其外被宛行候処 秀吉公征西の時奥の城再及没落嫡流土持次郎九郎にて御座候

山 田 氏

一 平姓山田氏は武藏三郎左衛門尉有国の嫡子式部少輔有賢と申人当國に罷下日置を被宛行山田村に致居住山田を以家号に相立候子孫山田新

助有信後越前守入道理安と申候て 竜伯様御家老職にて其子民部少輔有栄入道昌嚴事も御家老職にて御座候嫡家当山田市郎兵衛殿にて御座候

東 郷 氏

一 平姓東郷氏は渋谷太郎光重の二男重保と申候重保弟五人共に宝治年間薩摩へ下向仕東郷郡答院鶴田入来院高城家号の地を各領此家を渋谷五家と唱申候東郷氏嫡家は東郷惣左衛門と申候郡答院氏鶴田氏嫡流は断絶仕候入来院氏嫡家は入来院主馬殿にて御座候高城氏嫡流は高城十郎兵衛にて御座候

志 岐 氏

一 藤原姓志岐氏は菊池家一姓にて肥後国天草の郡の内六ヶ浦致領知志岐の城主にて御座候貞和年間志岐兵藤太郎将軍方にて於九州軍勇仕候其後菊池肥後守重朝に致隨身候志岐豊前入道麟泉其子兵部大輔親弘事は九州御手に入候節 御家に相隨申候其以後加藤主計頭清正肥後國領知に罷成候故旗下に屬候清正嫡子肥後守不幸に付兵部大輔親弘嫡子志岐藤右衛門室は薩州義虎の女にて御座候故藤右衛門嫡子志岐小左衛門親昌儀右の由緒に付肥後國退去仕寛永十年 御家を奉頼被罷出候此子孫志岐教馬にて御座候

蒲 生 氏

一 藤原姓蒲生氏は豊前国宇佐八幡宮留守職檢校坊教清子上総介舜清と中人保安年中に大隅國垂水に罷下其後蒲生吉田を領し宇佐八幡宮を蒲生に勧請仕代々蒲生に致居住蒲生を以家号に仕候蒲生美濃守清寛其子美濃守忠清父子二代 太守久豊公御家老職相勸候弘治年間蒲生範清太守貴久公に相背候故蒲生城御攻伐被成及没落候依之範清甥蒲生美濃守清綱蒲生氏の家督に罷成嫡流当蒲生十郎兵衛にて御座候

土 岐 氏

一 源姓土岐氏は元暦年間 後鳥羽院の御宇大隅國小河院の内敷根村致
拜受數代敷根村に居住にて候土岐四郎左衛門國房代に肥後國求磨に退
去仕候國房嫡子土岐賢太郎頼房求麻より御當國に罷出敷根村再被宛行
土岐氏を相改敷根氏の称号に罷成代々敷根に居住候処に文禄年中敷根
中務大輔頼賀下大隅田上城に罷移候由自家の系圖に相見得申候且又敷
根筑前久頼寛永年間 菅宮御即位に付御使者被仰付上京仕候付島津の
御称号並御諱の字拜領被仰付到子孫其通に御座候嫡家当島津主水殿に
て御座候

秩 父 氏

一 平姓伊地知氏は伊地知彈正季隨と申人 御家五代の 太守貞久公御
代に初て 御當家に罷出候彈正季隨三代の孫縫殿助季豐下大隅垂水辺
領知仕伊地知縫殿助重周其子周防守重武兩代御家老職相勤候重武嫡子
周防介重興永禄年間肝付氏に致与党 御家に相背候重興嫡子佐渡守重
順文禄三年の秋 太守公の背命領知被召上上方に致浪人慶長六年 御
家に帰参仕御知行五百石拜領被仰付候嫡流伊地知勘助代に秩父の称号
に相改候勘助子当秩父十郎兵衛にて御座候

比 志 島 氏

一 源姓比志島氏は源姓村上三郎左衛門尉頼重と申人薩州配流にて満家
院郡司大藏氏永平の女に嫁し榮尊を出生仕候永平事男子無之付満家院
郡司職を以外孫榮尊に致附屬候依之比志島氏を昌し姓は実父の源姓に
て両家兼帯仕子孫天正年間迄郡山満家院領知仕候西俣川田前田邇牟木
此四家は比志島氏の庶流にて候嫡流比志島孫太郎跡にて候

田 尻 氏

一 大藏姓田尻氏は秋月高橋原田此三氏同家にて田尻中務大輔鑑種後丹
後守と申候は筑後築川の城主にて御座候処龍造寺山城守隆信に被攻亡
丹後守戦死仕其子田尻嘉兵衛母方の由緒の者豊後に罷居候に付浪人分
にて暫罷在其後 御家を奉頼嘉兵衛罷出候子孫当田尻金右衛門にて御
座候

申三月二十五日

寛永元年中歳乎

御家中諸家大概

此諸家大概誤多有之候但誤多候ても
又後考に罷成候処相見得候故写置候

一 酒匂氏の事申伝候は 忠久公三ヶ國御拝領にて御下同の時御供仕候
人数の内本田酒匂猿渡棟梁にて御座候由に候得共系圖文書等見不申候
間究て如何様と難申上御座候乍然 忠久公御太刀御母衣の由申伝利左
衛門先祖以來格護仕米候御藏も從公義被仰付之利左衛門屋敷に于今
御座候精進齋不仕候得は拜見不罷成候由申伝候に付先年一乘院快意
法印へ被仰付被致拜見候其節平田清右衛門乍所致拜見候由書付召置
候右の御母衣 御家の紋も無御座すはまの紋御座候書付も無御座様子
にて御座候右の 御重物杯御預被召置候得は利左衛門惣領にて御座候
半と推量仕候貞久公御代迄は酒匂入道得記と申者御家老役為仕様に御
文書に見得申候其後さして見得不申候 師久公に被附進總州家の衰に
したかひ 衰微仕候かと考申候

一 猿渡は平家にて御座候此系圖は此節見合に持参仕候御書の内閉加
御座候間被遊 上寛候は可奉懸御日候此家古き文書無御座候間上代の
(朱書)天正の比志島中と申者御座候其の子は掃部と申候越中以來地頭なと被仰付
首尾好被召仕候寫右衛門少左衛門は掃部子孫にて御座候
事不存候 貴久公御代大炊入道休覚と申者に滿生の地頭被仰付候其以
後代々首尾好被召仕候休覚より只今の勘左衛門は六世の孫にて御座候
此家惣領と相見得申候

一 市来は惟宗姓にて八文字民部大輔子孫にて御座候と殊外威厳仕家に
(朱書本のまま) 久経公御舍弟阿曾谷殿に市来太郎政家と申者家のあら
て御座候既以 市来領米候其家を継候故一門中二番の太身にて御座候
そひ申懸候阿曾谷殿よりは同宗家と申なから其源格別の儀にて御座候
由被仰示系圖被出候阿曾谷殿系圖は曾我大納言より代々つり候て民部
大輔広言と御座候政家系圖は宗大納言より代々系候て民部大輔忠康と
つり申候阿曾谷殿より被仰候様に其源各別の儀にて不審多御座候処に

其後酒匂入道諸國修行之次手に若狹國三方殿に参右の断申候て系図所
望仕致一覽候得は阿曾各殿系図と符合仕候故市来系図亦不審に候由古
記に相見申候乍然市来家代々市来院所領仕致威勢候儀無紛候 立久公

寛正三年被遊御退治候夫より此家衰申候 貴久公以来は御年比にて御
備前家繁と申者は唯今の八左衛門曾祖父にて候家繁父重介家満と申者新納院高
城にて豊後家と御合戦の御戦死仕候 日新様の時分備前家政と申者御座候其子
小四郎家朝後備前と申候者弥五郎五代の由にて候此家は政家孫美作守時家一
男氏家一流にて候八左衛門家は時家嫡子家統一流にて御座候

座候由にて別て被召仕候備前と申候者の筋八左衛門にて御座候と見得
申候此家惣領の由に候弥左衛門与左衛門は八左衛門庶子にて候備後と
申者の家二つに分源右衛門親治十郎と二郎左衛門祖父備後に被仰付由
伝承候

一 執印国分羽島五代平野何れも惟宗姓にて御座候執印国分の系図は一
覽仕候市来系図に似為中物にて御座候執印は古来より唯今迄川内新田
八幡社家にて候休左衛門惣領にて候国分は彦右衛門惣領と見得申候羽
島は藏人と申者惣領さうに承候文書も少々所持申候末古衆中新兵衛と
申者も文書少々所持仕候五代は勝左衛門惣領にて候前代より御心安被
召仕候就中 義久公以来別て出頭の家にて候三左衛門二右衛門喜左衛
門杯は庶子にて候平野は弥九郎と申者惣領の由に候彼祖父丹後入道政
友と申者 義久公別て御心易被召仕候御使役にて御座候様に承候弥九
郎父六郎兵衛 中納言様別て御心易被召仕候此中の六郎右衛門は右の
庶氏にて候由承候得共系図見不申候間究て存不申候市来羽島執印国分
平野同家にて御座候得共系図を合て考不申候間兄弟の次第存知不申候
一 二階堂は藤原姓南家にて候文永の比隱岐守と申者阿多の比方を領罷
下候と見得申候其子孫源右衛門と申者田布施衆中にて候を十ヶ年以前
鹿兒島へ被召移候北条家代々判形文書多御座候 御先祖御判の物も少
々御座候殊外の文書持にて御座候建徳の比迄は伊作殿等に被為取候は
この威勢にて御座候得共其後漸々に衰候と見得申候城之介は隱岐守
弟近江守と申者の末と見得申候是も文書少々御座候 忠治公御代に二
階堂名字の出頭人御座候いつれの先祖にて御座候哉系図近代繁不申候
故存知不申候

一 指宿願姓 其今の願姓は伴家に 益イ
候元弘建武の比迄はいつれも名字の地をふまへ繁栄の家にて候指宿の
惣領は高岡に罷居候左近兵衛と申者さうに御座候 尊氏卿以来將軍家
の御判並御家代々の御判も数多所持仕候鹿兒島に罷居候主税と申者も
御家の御文書の写数通持申候彼先祖 義久公御近習に被召仕候と見得
申候

一 富山に源家と藤原家と両家御座候源家富山は日向の久敷御家人にて
候衰候て累の土持家に隨身仕候其子孫に今十持城之介罷居候北条義時
より富山妻御のほせ可被成田 忠久公え被進候御状所持仕候を去年
進上仕候其外無余儀文書過分に持申候九右衛門は右の一姓にて候九右
衛門曾祖父備中と申者は中書殿え被進於佐土原家老役仕候由承候藤原
家の富山の文書二通十兵衛親清右衛門所持仕候肝付彈正家来志々目正
兵衛と申者此家の文書數十通所持仕候其外四五通ツツ持申候者別にも
御座候志々目は小名字にて候右源家藤原様に候得共系図の様子似為
中地御座候同家にて候平敷と考申候

一 長谷場矢上は兄弟にて候藤原の純友よりつり申候系図かと寛申候慶
府タントウの上に矢上か城と申所御座候 貞久公矢上を御退治被遊
候矢上肥前に出奔仕有馬と名乗申候由彼家の系図に見得申候長谷場某
屋敷を 惣爺様被遊御所望福昌寺御建立にて御座候由惣領は兵右衛門
にて御座候 竜伯様以来首尾好被召仕候と見得申候伊角は右の庶子に
て御座候

一 鮫島阿多姓にて候 忠久公御下向の第三ヶ国の御家人は 忠久公
御家人たるへし但鮫島を除と 頼朝公被仰渡候と申説御座候得共備成
御書物は無御座候乍然上代は殊外繁栄の家にて候系図世間多御座候源
平藤家取交繫候分もなき物にて候本系図にては有之間敷と申事にて御
座候 日新様御代鮫島宗月と申武刃者為有之由に候 元久公御代阿多
加賀と申御家老御座候と見得申候其後加賀代々首尾好被召仕候頃日の
掃部加賀子孫にて候由先年中出候仲右衛門よりは 御一家阿多の系図
差出候掃部仲右衛門先祖兄弟にて候儀無紛候処に各別の系図差出候儀

無心元候の由平田清右衛門とがめ申候に付掃部仲右衛門口事に取りむす
ひ殊外六ヶ敷罷成候得共掃部他家にて候由堅申候付仲右衛門其外他家
阿多に為相極家余多御座候

一 永野惣領は指宿に罷居候宮内左衛門と申者にて御座候系図文書焼失
の由にて不相知候御譜代の家と見得申候に今伊地知本用に立並社役な
と勤申候

一 大寺も系図焼失にて不相知候午然中古以来の記録は少々相見申候
貴久様御代美作と申者武道走廻御座候其以後は地頭なと被仰付首尾好
被召仕候弥五右衛門惣領にて候弥兵衛は右の庶子にて候

一 岩切は日下部姓にて御座候惣領は彦兵衛にて候六右衛門は庶子にて
候此家の先祖亀房殿伊作家御相統の時被召付候と見得申候に右衛門は
六右衛門よりわかれ申候

一 上原は前代より伊作殿に罷居候長門と申もの 日新様別て御心安被
(朱書) 近き比休兵衛と申者上原家文書数多差出候御座候の比伊作田兵衛大夫道村
と申者御座候其子孫と相見得申候兵衛大夫は申米院伊作御座候其比御座候
者との別文書にも見得申候休兵衛は長門兄前曾孫の由中伝候是にも系図は無
御座候其前以来 龜伯様首尾好被召仕候出に候

一 召仕候 貴久様御代地頭被仰付首尾好被召仕候長門六世の孫只今
の長次郎にて候

一 肥後平家にて種子島系図に似申候古米は牛根か二川敷の間一所領
候て辺田七人の内に候 勝久公御代竹之地頭助西と申者の養子筋
只今の平右衛門にて候是惣領にて御座候大門口に罷居候助三郎と申者も
御判の文書数通所持仕候

一 有馬氏流々御座候藤原純友一流有馬王子一流源家一流いづれも久敷
被召仕候家と見得申候就中次右衛門家近代首尾罷被召仕候次郎右衛門
新右衛門は右の庶子にて候

一 税所氏上代曾於郡霧島の神領にて御座候其支配人を税所介と申候て
代々繁栄の家にて候文明十五年豊州家より被攻亡候 龜伯様御代右の
子孫越前入道休心と申候て出頭人御座候後は御使役被仰付候右の由緒
被思召出候哉休心に曾於郡地頭被仰付候休心養子次郎右衛門と申者よ
り衰候て其孫次兵衛と申者やうの身上にて唯今御奉公仕候弥五右
衛門其外右の庶流多御座候大助と申者此家の文書数多所持仕候是も惣

領の様に申候次兵衛系図に取合見不申候間兄弟の分體に存知不申候

一 平山は八幡の善法寺一門帖佐の八幡神領為支配罷下候其子孫平山の
城に居住候と見得申候高岡に罷居候左京惣領の由に候 氏久公御代出
頭仕二代御養子の御約束にて 御家の字被成御免候由系図に相見得申
候得共御文書方に少も不相見得候 忠国公御舍弟豊後守季久平山を被
攻落候市成候其外小名字多御座候市成掃部兵衛子孫平山内蔵丞同城
之介にて候罷の子孫平山八右衛門同勘兵衛にて候

一 和田高木一姓にて候系図は村田家に似申候和田は三俣院北方を領し
高木は郡之城内高木村を領し代々樺山北郷向家と縁を組さかへたる家
(朱書) 高木村唯今は高城の内に御座候申候

一 居候帶刀と申者多持申候讃岐家にも少々所持仕候讃岐親安番と申者は
龜伯様別て御心易被召仕候由承候右の外吉田の庶子にも和田御座候
平家も御座候と見得申候

一 高崎は大友庶流にて候大友殿御息女 貴久公御簾中にて御興入御座
候時為御興添高崎小田原御供仕參候由に候小田原は総州家に被召付久
世切腹の節迄は相見得申候高崎は唯今の四郎兵衛家に候 貴久様御
代より地頭なと被仰付首尾罷被召仕候と見得申候

一 堀氏も大友殿御息女 忠昌公え御興入候刻御供仕候由承候其子孫四
郎左衛門にて候

一 仁礼氏の事覚左衛門系図は惟喬親王より繁申候覺左衛門曾祖父官原
筑前入道秋扇と申者 龜伯様御代方にて武功為有之者にて候地頭被仰
付首尾罷被召仕候与三左衛門は右の庶子にて候民部左衛門系図は去年
見せ可申由約束にて候得共未だ見不申候間如何様家とも不存候民部左
衛門祖父別府信濃は藏人と申候者 中納言様別て御心安被召仕後は地
頭並御使役被仰付候藏人親と久保七兵衛先祖兩人 御部屋栖の内初て
被附進候人にて候由承候仲右エ門は尤民部左エ門庶子にて候 中納
言様御代大追物御座候時分右而家争御座候官原の仁礼別府の仁礼と面
々に被仰付候由承候 氏久公御代志布志大慈寺にて切腹仕候榊井頼
伸は信濃源氏の末流と御座候 殊に榊井の二字も連中候間各別にて候
半と存候此頼伸は其比殊外多勢の者にて候

一 梶原は平家にて候 忠昌公梶原腹にて被成御座候故此御代殊外出頭仕候家にて候備前と中候者は 勝久公御家老にて候惣領の末谷山に罷居候

一 伊藤伊東兩流御座候得共本は同ものにて候藤原姓南家にて伊豆国より出たる名字にて候伊藤は 御家に久敷被召仕候惣領七左工門と申者にて候 貴久様小野え御動座の節御供の人数の内彼先祖有之候伊尻は此小名字にて候伊東は大方日向の伊東殿一門漸々御家に参候と見得申候是は祐経より繋申候系図にて候天正五年伊東三位殿没落以後参候家も御座候其以前より御奉公仕候家も有之と見得申候八代木脇佐土原右松なと小名字にて御座候木脇惣領は刑部左工門さうに御座候此家も七八代以前より御奉公の由承候 貴久様小野え御動座の節御供仕候木脇大炊は伊東次郎右工門先祖にて候五右工門は始は右松にて候伊東刑部左工門祖父川崎駿河と申者 御家に参伊東を名乗中候由承候伊東系図余多此節持参仕候間可奉備 尊寛候肥前は御家中にての惣領の様に申由承候得共系図の表にては難見分候

一 相良も藤原の姓南家にて候求麻の相良殿一族漸々参御奉公と見得申候新右工門家は 忠国公御代より御奉公仕由に候始は小名字稻富にて御座候民部左工門甚左工門主税なと右の庶子にて候源五左工門は養父内蔵承代に参仁右衛門養祖父五郎左工門入道卜庵と申候者は 惟新様殊の外御心安被召仕候後は地頭をも被仰付候始は小名字竹の下にて御座候処に前志岐守殿免にて相良に成候証状並直道候系図仁右工門所持仕候

一 野村は佐々木家にて宇多源氏にて御座候才右衛門家は久敷御奉公仕候由に候祖父太学より地頭被仰付後は御使役仕候平左工門喜右工門なと右の庶子の由候但馬太兵衛市右工門なと天正五年伊東家より参候野村の末にて候口州御手に入候節野村福永御奉公の事被遊 御存候前にて御座候間細々不中上候右兩流源は一にて候福永丹後末は加治木に罷居候

一 土持は日下部姓にて上代より口州の国人にて繁榮の家にて候天正十

五年迄果之城主にて御座候得共関白殿御下向の節只今の城之介養祖父権頭 御家に罷出御奉公仕候權頭代より地頭被仰付候治部左工門先祖伊豆と申者 勝久公御家老役仕候是は右の庶流にて候得共早く 御家に参候と見得申候海江田は小名字にて候平左工門も始は海江田にて候

一 高橋は大藏姓秋月一姓にて数代筑前に居住仕一城の主にて候秋月宗吟二男九郎高橋の養子に罷成後は右近大夫と申候 秀吉公御下向の節日州県に所替被仰付果え被参候七郎右工門は右近二男にて候寛永十八年右近殿御改易以後 御家に被参候 義久公御代筑前岩屋の城にて御攻殺被成候高橋紹運は右近大夫養父参河守初の養子にて候今の立花殿は紹運末にて候

一 田尻は筑後の田尻城主にて候 義久公御代御幕下に被申入置候処に電造寺隆信攻殺被申候其節只今の加兵衛祖父二三歳にて候を乳母いたき通候て其後 御家に参候其外の田尻は別家にて候半と存候

一 志岐は菊池一姓にて肥後志岐の城主にて島五人の内に肥後御退治の節より御幕下に候加藤清正小西行长肥後拝領以後天草の一揆に糾し加藤小西兩手に責亡志岐致没落候只今の藤左工門親小左衛門和泉の義虎他腹の娘の腹にて候其好にて 御家に被参候

一 城井は宇都宮家にて筑前城井の城主にて候天正年間民部少輔と申者黒川如水に被攻亡候 義久様九州被入御手候節早く御幕下に罷成候其出緒にて民部弟弥次郎と申者 御家に参御奉公仕候只今の三之丞兄弟は弥次郎孫にて候

一 入田戸次志賀は大友殿一族にて候入田宗和子孫高岡に罷居候新左工門と申者にて候其外も宗和一門の由に候戸次玄珊子孫別本半兵衛と申者近き比迄鷹府に罷居候志賀道益子孫にて候哉高岡大口に志賀名字の者罷居候右三家 御家に参候由來 御存被遊候儀にて御座候間細々不申上候

右先年被 仰付候御家中他家系図の外太低書附奉備 尊寛候委細の儀は於御国本考差上可申候以上

延宝三卯八月吉日

右宝曆三年癸酉初夏上旬東都芝邸御記錄所にて清純書寫之

原書以原序本寫之

明治二十二年一月廿九日

筆者諏訪嘉藏

同年

三月八日

札合平岡之隆

五代徳夫

(原表紙)

職掌紀原

全

(原寸縦二五・五糎、横一九糎)

職掌紀原

御城代 一名御留守居役

此職上古に所見無御座候 家久公御代島津豊後久賀へ俄に 御出陣被遊儀候は御留守居可被仰付旨被仰付置候御留守居の儀即今の御城代の由御座候久賀は 家久公御姉の子故如此委任有之候段自家系圖に相見得申候然共屹与御留守居御役と被仰付候儀は不明尤 光久公御代に至迄右の旨為被仰付置哉も不相知候久賀事寛永十五年豊前と改名正保元年甲申三月死去の人にて候其後寛文六年丙午八月十七日北郷佐渡久賀へ御留守役被仰付候其節仰渡之趣左之通御座候

北郷佐渡え被仰渡御口上の覚

当国御留守居役被仰付候間爰許え罷移可相勤之數年右役儀明候而御念追に被思召候佐渡儀年生も能候付而右役儀被仰付候家老中其外諸士之上無遠慮可被申上之定て病者にて相勤候難儀可被存候得共別に可被仰付人も無之候間則御受可被申之由 上意候事

寛文六年八月十七日

御袖判 覚

- 一 家老中其外之面々結徒党國家之障に罷成儀有之者雖為縁者親類無用捨可被申上之付口事其外最負の沙汰於承付は無遠慮可被申上之事
- 一 留守居中不意之儀於令出来家老中致相談急度可被相鎮若致遲滯及大破候は可為越度事
- 一 隣国如何様の儀雖在之全守國家分國中不致騷動之様に常々可被相心得事
- 一 評定所江無構礼日其外時々以致登城用事可被承之勿論家老中可入意得儀於被見及は可在相談事
- 一 庶兒島並外城の士付百姓町人以下に至迄兼て申渡相守条日家職不怠可相勤儀可為肝要若無作法之儀於有之は家老中致相談仕置可被申付事

右之旨堅固に可被相守之者也
寛文六年八月十七日

久賀事翌寛文七年丁未正月三日 又三郎様 御守役被仰付候故十年程隔宮龍成延宝四年丙辰十月廿四日佐多内記久達え 御城代被仰付候其節左之通

御面殿様御參勤御替合之時分御国許え不被成御座間有之候条 御城代可被仰付と被 思召上候別て御見合之人も無之候間佐多内記殿え可被仰付候条其旨可被申渡候役人の儀は江戸え被罷登儀難成人にて候得は弥可然被 思召上候此間火事其外騷動之時分は早速被致 登城万事可被承候尤家老來承難致儀共可在之儀は内記殿可被承候若又家老中不和之儀共可在之時分は内記殿被肝煎候て左様無之様に可被致覚悟儀肝要に候由被仰出候事

十月廿四日

相良 主税

大山権左衛門

久達事延宝八年庚申三月三日御留守御家老被仰付御役料高式千石被下置御城代は如元同年七日備後と改名同年閏八月豊前と相改其後元禄十年丁丑閏二月十六日御家老職は御免にて 御城代被仰付候委細は左の仰出に相見得候

仰出

佐多豊前殿儀先年從 寛陽院様御城代に被仰付其後御留守居御家老に被仰付候得共大身分にて江戸え御供被仰付 公方様え御目見も有之候處に御家老役と申儀は不相応に被思召候間御家老役之儀被遊御免 御城代役に被仰付式千石之御役料は御城代役に付て可被下置候御納戸方御記録方之儀は此中之通致差引可然候此儀に付て先々は被思召旨も候条右之段をも可申渡之旨御直に御意候以上

元禄十年閏二月十六日

御使 種子島藏人

其後正徳元年辛卯九月島津の御称号拜領同二年壬辰六月廿六日備前と改名享保三年戊戌七月五日退役同四年己亥十一月六日御家老島津將監久当事 寛陽院様御代より首尾能相勤候付御城代被仰付候御家老勤も此内之通被仰付候加判は御免被成候座席は御家老之上座に被仰付御役料此内の通

御家老の内御役料高 被下置候由被仰出同十四年巳酉八月十七日死去其以後式十石被下置候 被下置候由被仰出同十四年巳酉八月十七日死去其以後関官にて候尤御城代賄料上下六拾人乗馬三疋に被定置候

御家老

国初より此職被相勤候人姓未審候 元久公御家譜之内応永十七年 御上洛之節執事平田入道玄親上井入道木田元親御留守居被召置御供被召列候阿多某は將軍家より加賀守に被任平田は右馬助に任候儀相見得申候山田聖栄日記に右の人数を老名と書記置候近古には御家中共相唱候用達之儀寛永元甲子歳齊入摂津忠統上洛之節騎馬与力二人小荷駄与力老人歩行士六人外に医師被召附候儀旧記に在之其外以前には騎馬与力被召附候段々相見得申候寛永之季年より被召置候哉宝永之比迄与力四人被召附候賄料之儀寛文十一辛亥歳より壹万石以上は六拾人賄料其以下は五拾人賄料に被相極候御掛の初大概左之通御座候

一 南蛮宗之儀は元來御禁止之事候得共寛永以來殊に稠敷被仰渡候然共御家老衆之内より分て其方に被掛置候儀は所見無御座候寛永十二年乙亥九月家久公江戸より御家老島津彈正久慶へ被成下候御書之内に南蛮宗の儀弥以御法度の旨稠敷被仰出候付來る十一月朔日より諸国一時に可被相改の由各談合を以其旨に相究候委は下野守兵部少より可申越候条可被得其心候我等留守の儀候条其方諸事念を入可被申付候聊以不可有油斷候と相見得正保二年乙酉二月 光久公より右久慶へ被成下候御書の内弥天下鬼利志端宗衆今度我等も被仰候間其元無油斷様に分国中之者共にも右之宗衆可有之儀も候はん哉可有聞立候此由より前に其方申置候間由斯有間敷候中略異國船之儀鬼利志端の儀は彈正久慶申渡候間表方頭取にて余の老申え相談候て船參候は十人衆え其方前より被中付右之様子細く申合被遣候て少も無油斷調儀專要に候我等も定御暇可被下候間令婦國期面候先余之儀はかまひなく此儀を題目に被心懸可然候と有之又異國船之儀今度別て被仰付候候間如連々大形被存候に候ては事延成立筈に合間敷候異國船之儀其方老人之役たるべく候間自然手筈に違ひ儀候はは手前の越度に可成候詔々心掛可被申附候巨細は別紙書載候と相見得申候右彈正久慶事寛永十八年辛巳十一月御家老職を

御免にて候得共其後迄も不時之御用等被仰付異國方宗門方の儀は久慶一人え被預置慶安二年巳丑六月依願右兩職迄も被成御免御家老北郷佐渡久加へ久慶の代り被仰付候然は異國方宗門方掛の儀は右久慶より相初り為申儀と相考申候

一 御勝手方掛の儀上代分て相見得不申候北郷佐渡久加事寛永二十年癸未七月御家老職被仰付置正保二年乙酉十月右御役内にて御物奉行被仰付候御勝手方の儀万治寛文の比迄は御物座と相唱其後元録の季年迄は御國遣座と申候故御物座の惣裁なるを以御物奉行と相唱為申哉右久加へ被仰渡候御書附左之通御座候

覚

今度諸役人の主執被仰付候不依何篇之儀役人之上を不致遠慮吟味の段無緩疏可在差引為其如斯候以上

正保二年酉

十月十四日

光久 御判

右御書附の諸役人は主執と有之候儀相考申候処以前には當時御勝手方御支配の諸向外にも御殿方御教寄屋方御能方或は神社仏閣諸事の差引諸郷迄道橋の儀或は各人飯米等の細事に至迄御勝手方支配にて候故御役人の内奥向方は大方御勝手方に属し為申管に御座候依之右通為被仰渡にて可有御座候然は御勝手方掛りの儀は右久加より相初り為申哉と奉存候琉球掛之儀も上代別て相見得不申候新納右衛門久詮事御家老職にて承応三年甲午御物座方 當時之御勝手方 被仰付候初より相初り為申にて可有御座候其儀分明には相知不申候得共其以前琉球江被仰渡候御法令の御書附等大略御家老御連名にて候処寛文元年辛丑には右之久詮一名を以三司官え条書差遣其上久詮事同三年癸卯退役にて其子新納又左衛門久子繼先業御家老職御物座之下知琉球方被仰付候段系圖に相見得其後延宝六年戊午御評定所御詰役新納近江久辰え琉球方被仰付元録十一年戊寅久慶子新納市正久珍御國遣座方 御勝手方 御家老にて父に相襲琉球方被仰付候然は琉球掛

の儀は前文の道新納久詮より相始り候哉乍然前条に相載候通御勝手方之儀北郷在渡久加代に起候而其節より琉球方の儀も御勝手方之兼務に為被仰付にても可有御座哉重て相考可申候

一 御兵具掛之儀御家老島津中務久茂寛文七年丁未迄被相勤候由記置候久茂事万治元年戊戌御家老職被仰付候人にて候其以前には所見無御座候

一 奥掛之儀も起源未詳候享保七年壬寅六月島津將監久当御城代御家老勤にて御留守中御側方御納戸方中通方御記録方奥方尾畔方加役被仰付置候此節定加役に被仰付島津内膳久興名越右膳恒渡同前に可承候と被仰渡候得は其以前より有之候尤御記録方掛儀は上代には 御家御系図御文書之儀御家老衆之内老人ツ、受持にて候処

光久公御代御家譜編集被仰付島津圖書久通鎌田蔵人正信總裁にて候其以来近代迄は御記録方掛の衆被差分万端差引為在之儀御座候御納戸方之儀元禄十年丁丑島津備前久達え御城代被仰付候節御家老役の儀被遊御免御納戸方御記録方儀は此中を通致差引可然旨被仰渡候右を以は此已前より為在之節御座候左候て享保二十年乙卯八月御側御家老座此節より表御家老座打込にて一ツ座に被仰付候間御家老座相勤候筆者表御家老座筆者詰所へ諸書附並道具等相直し勤方之儀は此内の通相勤候様被仰付其後御側方の儀奥方と相唱候処安永八年日亥四月奥係其後掛の文字と被相改候段被仰渡天明五年乙巳正月御家老奥表と双方に月番相勤候得共以来は奥表共表月番より相勤管候条可承御役々え可申聞旨被仰渡候

御側詰
天明五年乙巳正月十一日大目附川上頼母久品え初て御側詰御役被仰付座順若年寄之上被仰付左の通被仰渡候

一 御側詰 一 御役料高五百石

川上 頼母

右之通御直御役替被仰付御役料高被下置候

一 御勝手方掛 一 御鷹掛 一 御鳥掛

一 尾畔掛

一 御在府御在国共に奥え可相詰候

一 御留守の節は御家老座え相詰尤於御国元は御勝手方えも可相詰候

右 同 人

右之通被仰付候

右之通於江戸先月十一日被仰付候段申来候条此旨表方え致通達奥御勝手方えは写を以可相達候

天明五年

二月

近 江

一 御直伺可仕事

一 御両殿様御機嫌日々奉伺候様可致事

一 御両殿様御出の節御家老罷出程之節は其次に可罷出事

一日用之儀御用部屋書役相兼可申尤御帳は別段相分々可申候御家老方御用向の節は御家老座御帳内にて可致首尾候

一 御下屋敷にて御應野等にて御出の節御鷹掛差越候迎も其節は差越不及事

一 御国元にて御城下御鷹野の節は若年寄同様御供可仕尤野先えも不差越候て不叶節は若年寄申談可差越事

右之通川上頼母え被仰付候段申来候条此旨可承御役々え可申渡候

天明五年

二月

近 江

久品事天明六年西午五月十三日御勝手方御家老被仰付其後關官罷成候尤久品御側詰にて江戸詰の節上下三拾五人乗馬式匹の賄料に被相定候

若年寄附御側詰役 旅御家老 御談合役

御談役旅御家老御談合役の儀寛永以来相見得申候評定所 当分の御座え 御勝手方 相詰御政事にも被預候故御談役又は御談合役共相唱へ御参

親の節御家老職の場にて御供等被相勤候を旅御家老と相唱為申にて可有

御座候然共都て定りたる御役にては無之筋相見得申候横目頭種子島彈正
伊時事寛永三年乙酉九月尾日御家老川上式部久重御取次を以御勝手方被
仰付横目頭兼役被相勤候様被仰渡置処同年十月十日 御前え被召出御直
に御役名若年寄と被仰付候段被 仰出候翌十一日伊時横目頭御役之儀は
被成御免勤方は追て可被仰渡御座之儀は御家老座之下の後に引入詰可申
旨被仰出候段御家老肝付主殿久兼を以被仰渡候左候へは其節より初て御
役には被相立候筋に御座候其後享保二十年乙卯九月左之通被仰付候

若年寄加役

一御連歌御作代之首尾

一鹿兒島十養子月延願首尾

一鹿兒島士外城養子御免之者月延願之首尾

一月次御礼出仕御断申出候首尾定筆者申渡候首尾

一御番帳仕付之首尾

一湯治御暇願之首尾

右之通加役被仰付候右之内御家老名書にて申渡来候儀は致其通首尾
は若年寄より致候様に被仰付候間可承座々え可申渡候

以上

享保二十年

九月

大 蔵

其後安永九年庚子七月左之通被仰渡候

一御書院方支配

一御能方

右は是迄大御目附支配にて候処以来は若御年寄支配被仰付候条首尾掛
えも可申渡候

安永九年

七月

大 進

右之通被仰付御書院方支配は新納波門久侶え御能方は月番廻り被仰付置
候処同年十月伊勢兵部貞矩へ御能方支配被仰付候且又殿方の儀も大目付

支配より若年寄支配に被仰付候其年鑑未詳候其後天明六年丙午十一月小
番之儀以来若年寄支配に被仰付一代小番部屋柄一代小番も右同断に被相
定候旨被仰渡候左候て最初は若年寄と在之其以後は若御年寄と唱来候処
天明七年丁未七月御役名に御の文字用米候得共不及其儀事候間諸書附に
も右の心得を以可相認旨被仰渡候尤万石以上の若年寄は三十五人乗馬
定之賄料其以下は二十人乗馬定之賄料に被定置候

大目附 初名横目頭附口事奉行

寛永十四年の比より口事聞衆と申候職掌相見得申候以前には今の御吟味
の事を口事と唱候故口事有之節是非曲直を聞届候人を被定置候是を口事
聞衆と唱へ為申趣に相見得申候島津帶刀久元事正保元甲申歳口事聞並浦
廻勤被仰付同三年組頭に転役入来院石見重頼山田民部有盛事明暦年鑑横
目頭にて火消方相勤島津豊前久邦延宝五年丁巳四月横目頭被仰付其後口
事聞役兼務天和三年癸亥二月横目頭は御免被仰付口事聞は如元と在之候
然は横目頭は御役被相建候ても口事聞役は別職にて候処其以後に至候て
は横目頭より口事聞の職をも被相兼候筋相見得申候然宝永二年乙酉九
月横目頭の儀御礼日御座の間に独礼被仰付候是より御役格も屹と相定
候哉左候て同年十月御勝手方支配の内御殿方御書院方御能方を被相分横
目頭支配に被仰付島津内膳久元に御殿方肝付典膳兼柄に御書院方桂宇右
衛門久祐に御能方支配被仰付候同四年丁亥正月横目頭を大目附と唱候様
被仰出候段被仰渡候其後大御目附唱来候処天明七年丁未七月御役名の御
の文字用米候得共不及其儀事候間諸書附等にも右之心得を可相認旨被仰
渡候尤式拾五人乗馬定之賄料に被定置候

大番頭 初名大御番頭

安永九年庚子七月大御番頭御役新規に被相建同月二十八日寺社奉行川上
久馬久致組頭小松主税清行御番頭山崎齊久客を以初て此御役に被仰付
左の通被仰渡候

大御番頭

一御近習通 一御役格寺社奉行同格にて座順の儀は上席
一諸給分寺社奉行同様
一与頭並奏者番相勤来候人は有来通

一詰所芍薬の間縁類

一日勤

一跡職延てしらへ

一月限しらへ

一御番帳仕付首尾

一六与之士御祝儀申上候首尾

右之通新規に御役被召立候条可承面々え可申渡候

安永九年

七月

主 馬

其後天明六年丙午十月大番頭と被相改候旨被仰渡同年十一月新番之儀大番頭支配一代新番部屋栖一代新番右同断以来被相定候段仰渡在之候

御側詰

当時無之

延享二年乙丑十一月御勘定奉行河野八郎左衛門通興え左之通被仰付候是則御側詰之初に相見得申候

薩州様御方

一御側詰

一御役料此内の通被下置候

河野八郎左衛門

右の通御役替被仰付 御側御方御用可承候

太守様御方御用も承候様被仰付御役格の儀は寺社奉行頭に被仰付候

右の通今日被仰付候間御側方へ致通達表方御勝手方えも写を以可相達候

十一月六日

織 部

御側詰被仰付候付勤方左の通

薩州様御方

一公儀御勤御守殿御内輪様方御一門様方並京江戸御附届御到来御書的首尾

但御側方承前之御家老申談首尾可仕候

一御右筆調御書御文並御内々御書御文の首尾

一御当地にて磯御屋敷並御女中様方へ御内々御使者等被仰進候儀又は御家中え御使等被下候差引

一相定り候御祝日等の首尾

一御内証にて神社等に御参詣首尾

一御内証にて神社御寺方へ御代参首尾

一御内証御規式方

一御側御小姓奥御小姓支配

一御納戸方御小納戸方御道具端物等差引

一御稽古事方

一御前御用出来差引

一御飼物方差引

一御出産之節御側御用人御近習役頭相詰居御家老より先に御先立にて御縁類御家老相詰候所より三四尺間を置可相詰候

一毎日昼の間詰所御近習役所

一御在府の節は本御側詰座当分御側御用人座に可相詰候

一御側廻中通之面々大御目附以上の御役人え差越候程之御礼事の節は御側詰えも可差越候表方支配の向々共差越に不及候乍然依訳御側詰えも御礼差越儀も可在之候

一太守様御側方の儀も兼役被仰付候間御留守の節も御向殿様御方御用在之管候間江戸詰は不被仰付候

太守様御方

一御内輪御附届方差引

一御内証御代参の首尾

一相定り候御祝日等の首尾

一御側御小姓表御小姓奥御小姓支配

一御内証御規式方

一御納戸御小納戸御道具端物等差引

一御前御用出来物差引

一書並並順達等に御側詰も可相載候

右之通被仰付候間可承御役々え可申渡候

延享二年

十一月

織 部

通興事寛延元年戊辰正月大御大附御役替被仰付其後關官の筋相見得中候然延御側詰の儀御役人帳被相除候段於江戸被仰出候旨安永九年庚子七月被仰渡候

御勝手方添役

當時無之

堀四郎太夫興昌御勤定奉行御役にて候処、総州様御部屑栖の内より數十年首尾能相勤大御支配御用係をも被仰付置候處に是亦首尾能相勤候付て大御目附格御役替被仰付勤方の儀は御勝手方添役にて御勝手方御家老種子島彈正伊時被承候御用同前に被承候様にて被仰付候旨享保十二年丁未十二月被仰渡候然其其節迄は御役に被相建候にては無之勤方の名目迄に御届候其後同二十年乙卯八月興昌御勝手方御家老被仰付鎌田太郎右衛門政直御勤定奉行に御役替にて勤方の儀は此内堀四郎太夫被相勤候御勝手方勤に被仰付候旨被仰渡置元文元年丙辰十一月政直事御勝手方添役被仰付勤方は此内の通にて御役名右の通被相改座席は寺社奉行上に被仰付候數年首尾能相勤候に付家格等合並被仰付候段被仰渡候是より別段御役被召置候と相見得中候其以後寛保元年辛酉正月大御目附兼御役替勤は御勝手方添役御役料此内の通同年二月御家老に御役替御勝手方被相勤御側表共御用被相勤候様被仰付郷原金太夫久雄事大目附御役替勤方の儀は御勝手方添役此内鎌田太郎右衛門相勤候通被仰付候段被仰渡候其後川川伊織国福寛延二年己巳九月大目附勤方御勝手方添役被仰付桂太郎兵衛久中宝曆七年丁丑十月大目附にて御勝手方添役被仰付候得共前文鎌田政直同様御勝手方添役迄に被仰付候へは其以後無御座筋に相見得申候然延御勝手方添役の儀御役人帳被相除候旨於江戸被仰渡候段安永九年庚子七月被仰渡候

寺社奉行

寛文六年丙午八月十九日喜入五郎兵衛久治御使を以入来院石見重頼を寺社方の支配被仰付左の通被仰渡候是則寺社奉行職の始にて御座候

入来院石見へ被仰渡候御口上書

御分國中寺社方の支配被仰付候間可被致差引候尤各人の分別にて難計儀は家老中へ致相談可被相濟候以上

寛文六年

八月十九日

重頼事翌七年七月病死同年九月島津新八久賢え右代り被仰付久賢事同年十二月御談合役にて相転候故島津出雲久行評定所役より兼務同十二年壬子九月御家老御役被仰付町田源左衛門久盛御談合役兼横目頭より兼務延宝五年丁巳二月新納五郎右衛門久仲久盛に相代り貞享元年甲子七月迄相勤其代り島津主計忠雄御詰役兼横目頭にて兼務
忠雄事貞享元年甲子十二月江戸衛門久盛に被仰付同四年丁卯十月忠雄久達に代り横目頭にて兼務
元禄元年戊辰四月島津主右衛門久達事忠雄に相代り同十四年辛巳九月迄相勤其代り種子島彈正伊時横目頭にて兼務同年十月松山助太郎忠郷に寺社奉行被仰付候是より兩人に相成其以後人数も不同に罷成候尤右種子島伊時以来は横目頭以上の御役より兼務被仰付候儀無御座候以前には寺社奉行御役に付御役料不被下候処小身にて難続御役料被下候事に在之候に高三百石哉式白石哉の間に依人御見合次第可被下旨正徳二年壬辰正月被相定候其後御役料高被相減候筋相見得中候得共其通被相究候年鑑御規模相知不申候故書載不申候此以下諸御役場に都て如此御座候尤寺社奉行之儀二十三人乗馬意定の賄料に御座候

御勤定奉行附御支配奉行 算用奉行

慶長六七年の比より御配当所の役所在之候或は御支配所又は御勤定所共有之候其奉行を御支配奉行共御勤定奉行共申候得共其人是不相替候中神七右衛門頼常事永禄十四年辛巳十月御勤定奉行御支配奉行兼役被仰付候段自家系圖に記置候且以前に算用奉行と在之候も此職と相見得申候然取扱候御用之向により相当の方に御役名相用為申にて可在御座候御役格は大抵宝永五年以前の御船奉行同格に相見得申候然延宝永四年丁亥十二月新規に組頭島津主水久頼伊集院十右衛門忠寛鎌田源左衛門政躬を御勤定奉行に被仰付是より当分の通御役格屹と相成候筋御座候同五年戊子正月御勤定所御勤定奉行と御役所御役名唱可中候御支配所御支配奉行と唱候儀致無用候様被仰渡候左候て御勤定奉行御役料不被下候得共
宝永御役格被相改候以 小身にて難続御役料被下事に有之候は高三百石歟式白石米之儀と相考中候

歟の間依人御見合次第可被下旨正徳二年壬辰正月被相定候尤是又貳拾三人乗馬壹疋之貲料にて候

御側詰御小姓頭 当時無之

比志島年人範房事初米良藤右衛門重年と申候節宝永四年丁亥御側御用人被仰付置候処同五年戊子比志島家後嗣被仰付御役職被相替候得共其職掌未審候是即此職の起源にて御座候江戸御記録所日帳の内左之通記置候

九月二日三雲新兵衛より御用に付市来早左衛門罷出候処比志島藤右衛門事御役職被召替御役名なしにて候間御側詰と相唱可申候格式の儀は御番頭の格に被仰付候旨被仰出候此等の通寄々可申通由にて候事

範房事同六年己丑五月大御目附格被仰付御側詰御小姓頭兼務にて其後享保年鑑迄は右御役職相見得申候処久敷關官相成御小姓組番頭の上に御役名被相建置候迄の処右御役名御役人帳被相除候段於江戸被仰出候旨安永九年庚子七月被仰渡候

御小姓組番頭 初名組頭

寛永十九年壬午十二月初御城下士を十組に被相分一番組二番組と次第に相唱へ毎組に与頭二人被仰付候一番組頭は島津安芸久雄新納四郎久時二番組頭は島津市正忠弘佐多又四郎久孝三番組頭は桂又十郎忠心吉利下總忠張四番組頭は島津左近久守桃山又九郎久尚五番組頭は町田山羽忠尚種子島左近忠時六番組頭は伊集院源助久立島津美作久基七番組頭は伊集院右衛門久国川上上野運久八番組頭は弥授七郎重永川上將監久將九番組頭は鎌田又七郎政山入来院伯耆重高十番組頭は伊勢兵部貞昭島津中務久茂にて候外に御家老組の一組被相建御家老島津彈正久慶島津國書久通を組頭に被仰付与下之上は右十組に相替候儀無御座候

与頭衆え被仰渡条々

一与中へ野心不忠者可在之時は早々可被致言上候若与頭油断にて於不申上は与頭並談合衆同意の心底たるべき事
一与中へ喧嘩口事出合候は早速寄合致談合可相濟事

一御奉公方之儀談合にて与頭より可申付付物首尾之事
一作病其外御奉公方に難渋申氣儘の輩於有之は以談合致言上曲事可申付事

一与中へ鬼利志端並一向宗於有之は致乳明其上可申付事

一与中へ於候は与頭談合衆越度たるべく候事

一訴詔其外中分ケ之儀与頭へ尋不申候て気任公儀へ雖為申出受付有間敷候間可在其心得候事以上

寛永十九年十二月十三日

与之衆へ被仰出条々

一与之衆与頭の下知を背問敷事

一從与頭可被申付儀可有之時気任之輩於在之は曲事に可被仰付事

一御出陣或は在江戸或は狩等の儀可被仰付時異儀申問敷事に付物首尾之事

一喧嘩口論口事等出合候はん時与頭え可申人致遅々問敷事

一訴詔其外申分の儀与頭へ尋候て公儀へ可申出事

寛永十九年十二月十三日

一其後正保三年丙戌六与に被相改尤御家老与一与も被建置候天明六年丙午与頭を御小姓組番頭と被相改同年十月御小姓与番頭当番頭と可致順席旨被仰渡候且又右向御役共以前には御役料不被下候処小身にて難続御役料被下事に有之候はは高三百石敷貳百石敷の間依人御見合次第可被下旨正徳二年壬辰正月被定置候左候て御子様方は高之多少によらず二十五人乗馬壹疋其外は二十式人乗馬壹疋の貲料にて御座候

当番頭 初名御番頭

此御役も 寛陽院様御代為被召置由候得共年鑑不詳候寛文年中にても可
在御座哉相考申候以前は御參勤の節御供にも被召列召人つつ江戸詰被仰付候比より御用人兼務被仰付候哉追て相考可申候天明六年丙午七月御番頭を当番頭と御役名相唱候様被仰渡候

附録 奏者番

万代記の内御礼事之節於 御前披露此程は御用人より勤来候得共別立て

奏者番被仰付向後は於御前披露奏者番可相勤行正徳三年癸巳三月被仰渡候由相見得其節組頭御番頭島津主計久名北郷宗次郎久高新納左京久敦川上縫殿久映平田新左衛門宗房高橋七郎右衛門種房御用人義岡左平太忠守相良権太夫長規等々奏者番加役被仰付候

御側御用人

宝永四年丁亥九月九日御側目付米良藤右衛門重年菱刈新五兵衛重格市来勘左衛門家真弟子丸与次右衛門宗武の四人を御側御用人御役被仰付候是即此職之初にて御座候正徳二年壬辰正月御側表御用人五百石以下御役料高百五拾石可被下旨被相定十八人乗馬定足の賄料にて候

御用人

初名中口の役中次の役御使役
上代には中口の役又は中次の役と相唱申候 忠治公御代二階堂左馬助本用治部左衛門と申者中口の役相勤候儀旧記に相見得申候

近古には御使役或は御使衆と相届申候 御前より御家老職杯え引出の御取次且諸御用の執奏を初め御家老衆より諸向え演達等都て此職より相勤成程劇職にて為有之と相見得申候延宝年中当分の通御用人と御役名被相定候哉相考申候

町奉行

町奉行系図帳に三原備中山田民部蒲地備中と次第在之候右備中は三原重種にて可在御座重種は慶長十七年の比より御家老職にて候故町奉行相勤候は其以前之筈に御座候且元和元年納屋頭被相建候付御家老衆より山田民部有米えの御条書有之蒲地備中は天正十三年より御当国へ相仕へ候人にて候右を以町奉行の儀久敷御役にて以前より相応の格式に相見得申候
宝永二年乙酉九月御礼日之次第被相定候節の御書付にも御用人町奉行と順席有之正徳二年壬辰正月持高百五拾石以下には御役料高百石可被下旨被相定候町奉行御役相勤候ても地頭職無之内は年頭御太刀進上不被仰付筋明和五年御議定有之候処安永六年丁酉八月以来の儀御役の御礼相濟候人は地頭職不被仰付候ても御役にて年頭御太刀進上にて御礼被仰付候旨被仰渡候尤十七人乗馬定足の賄料に被定置候

御側役 初名御目付 御側目附 御通習役

御側役の儀最初には御目附と相唱候何比より被召立候儀不詳候得共長谷

場伊角純昭事寛文六年丙午二月御近習御目附役被仰付役分地百石被下置延宝四年丙辰高隈地頭被仰付候敷根藤左衛門頼賢貞享二年丙寅正月御目附被仰付是又御役料高百石元禄二年庚午十月地頭被仰付候儀有之其以前御目附と申候職名所見無之然に寛陽院様御代初て被召置候哉と相考申候
平田藤之丞宗満事元禄六年移佐移地頭より御目附被仰付伊集院猪右衛門久饒事同七年甲戌九月御目付役料米百石同日横川地頭被仰付宮之原甚太夫通貫は同十年丁丑七月御近習役 比已前此御役在之 大方六人賄料の格式にて候 より此職に相転し十人賄料被成下折田八与左衛門常貞事は同十五年壬午二月御目付役御役料米廿五石被下候杯と相見得候得は其御迄は御役格も差て不相定哉に御座候午然元禄元年戊辰四月於江戸御任官に付御祝被下候人数御家老御用人奏者番 奏者番の事 此下に相記申候 御目附御留守局と次第有之候然は大跡当分通の御役格に準し可申哉其以後宝永元年巳申十二月御家老衆直申渡の格式に被相定同二年乙酉九月御側御目付の御役名被相替正徳二年壬辰正月持高百五拾石以下御役料高百石可被下旨被相定享保三年戊戌正月御近習役と被相改左の通被仰渡候

御側御目附

右御側御目付の御役名御近習役と被相改候効方相替儀無之候諸事の書附御役人帳も可相直候 隅州様御方は先只今の通可相心得旨準人殿御差図にて候以上

享保三年

正月十一日

其比より訳て御取扱も相替候哉左之通相見得申候

種子島十左衛門

町田八左衛門

米良藤右衛門

山沢十太夫

二階堂五郎太夫

小笠原彦八郎

河野八郎左衛門

木村四郎左衛門

右は当分の勤方前々の勤に相替何れも別て出精御用筋其外諸事氣を付
屋夜共に相勤候儀 御褒美に被 思召上候依之此節より萬百石の物成
代銀にて年々為御心付被下候只今迄は御近習役の内にても持高多少に
より御見合を以御役料米被下置候者も有之候得共此節より持高の多少
に無御構当分相勤候御近習役迄に右之通御心附被仰付候地下族共御用
筋相勤且又御用人差支候節は御用人代をも差寄相勤候付与力無之候て
は御用向も難達善に被 思召上候付士与力迄人つつ被仰付候間自今猶
以出精相勤候様可仕候

一当分御役料被下置候面々の御役料高は被取揚此節より都て百石の物成
代銀にて被下置候間左様可相心得候

右之通被仰出候例も無之事候得共御用勤其外諸事氣を付別て出精相
勤候故 御褒美に被 思召御事候条何れも難有可奉承知候此上は弥
以諸事氣を付入念相勤可然候

但 福山平太夫儀は当分御役料高百石被下置候付此節の百石の物成代
被下に不及候与力被召付候段は於江戸申渡有之筈に候
右之通可申渡候

享保九年甲辰

十二月

八郎太夫
右 膳
内 膳
將 監

其後安永五年丙申十月御近習の儀是迄御役之御礼不申上候得共以來御近
習役被仰付候節より御役の御礼申上候様被仰出候段被仰渡同六年丁酉八
月御近習役の儀地頭職不被仰付人えは是迄年頭御太刀進上被仰付候得共
以來の儀御役の御礼相済候へは地頭職不仰付候ても御役に付年頭御太刀
進上にて御礼可被仰付旨被仰渡其後同九年庚子七月御側役と御役名被相
改候尤十五人乗馬定定の賄料被下之候

御側役並 初名御小納戸役の格御近習役 當時無之

此御役初て被相建候年鑑相知不申候得共宝永年鑑以前に御小納戸役と申
候て當時之御小納戸には別格の御役有之候節御小納戸役の格被仰付置候
処右御小納戸役は被召罷候故宝永二年乙酉十二月御小納戸役の格を御近

習役の並と唱候様被仰付候右御近習役と有之候も近代の御近習役
當時の御 儀にては無御座候正徳年鑑以前物頭の次に被建置候御役の儀
にて候其節の通達御書附左の通相見得中候

堀之内六左衛門
三原 仲右衛門

右は此内御小納戸役の格に被仰付置候得共当分御小納戸役は先不被仰
付候御小納戸御用は御小姓の内より御小納戸方相勤候者にて相済候付
本役は無之候然ハ六左衛門仲右衛門兩人の役名は御近習役之並と唱可
申候格式は御近習役同格にては無之候此内の格に可仕旨被仰出候間此
段可被承置旨御差図にて候以上

宝永二年

十二月廿二日

諏訪 李右衛門

右之通被仰付置同三年丙戌の御役順書付に御使番御近習役並と在之正徳
二年丁亥正月御使番御近習並百石以下御切米七拾五俵五拾俵迄の間の賦
に依人御見合次第可被下旨被相定候左候て右御近習役も正徳の季年享保
の初め歟に引役被仰付候得共御近習役並は被殘置近代迄御使番の次に
候処明和八年辛卯十一月左の通御役格被相替且又御役料米九拾石に被相
成候

御近習役並御役の次第御使番の次に被仰付置候得共向後御近習役の次
に被仰付候旨被仰出候条此段御役人限可致通達候

明和八年

十一月

左 中

其後安永九年庚子七月御近習役之儀御側役と被相替天明五年乙巳正月左
の通被仰渡候

一御側役並 一御小納戸

右御役向後被相除候旨被仰出候段申米候条此旨可承御役々え可申渡候

天明五年

正月

仲

御目附 初名吟味役 十人衆 奏者番當時無之
諏訪左衛門兼利事寛永二十年癸未吟味役被仰付候日記置其以前此職所
見無御座候左候えは是又

寛陽院様御代より被召置候哉正保年鑑に至候て十人衆の職名相見得候肥
後長左衛門盛行事十人衆役被相勤候段自家にも記置候吟味役の儀を一往
右通相唱候數變安以來に相成候ては十人衆の名目相見得不中候其後貞享
の比吟味役を奏者番と被相改候奏者番の儀役名不相応に被思召上候間
以前の通吟味役と被相改候旨被仰出候段元禄十年丁丑二月被仰渡宝永元
年甲申十二月御役被仰付候節御家老衆より可被仰渡候旨被相定候尤最前
御役格も品能吟味役御目附御役と順席相見得候然同二年乙酉九月御

目附の儀御側目附と被仰付吟味役の儀御目附と御役名被相改候夫より御
側御目付御目附と次第有之御目附の儀或は表御目附共相唱候筋相見得申
候尤吟味役と相唱候節より琉球在番奉行は此職より相勤又は京大阪蔵奉
行當分のの儀も往々兼務被仰付寛文延宝の比惣山奉行之職掌被召置候
節も吟味役より相勤或は町奉行をも兼務被仰付且又宝永年鑑久見崎奉行
被仰付候節も此職より相勤候然正徳二年壬辰正月引役に被仰付候

江戸御留守居
慶長十二年丁未家久公始て江戸へ御参勤被遊其御返は御屋敷連も無御座
候故愛宕の真福寺を御旅館にて被成御座候其節豊島郡芝の御屋敷御拜領
にて翌年録田加賀政立を被差遣御作事有之候同十五年庚戌九月桜田御屋
敷御拜領にて御座候左候て寛永十六年己卯夏新納右衛門久詮を以て初て
江戸御留守居役被仰付候多年在番公辺は勿論諸家に相掛候外向御用万端
被相勤同二十年癸未夏御家老職被仰付候ても不相変在江戸にて公義より
御留守居の御用在之候節は毎度右衛門被差出諸御用向取扱有之候然慶
安年中の御家譜に昨朝留守居の者老人可致登城旨任御無狀相良主計罷上
諸間合衆並に仰出の通承屈候と有之又其分留守居相談為申通相良主計
三雲太郎左衛門承候林と相見得申候依之相考申候処漸々世上も昇平に罷
成諸大名一統諸篇格式等相定候故右衛門事御家老御役にて万端奔走被相
勤候ては御成合も不釣合在之夫故右式職掌相當の御役被相建御留守居と

相唱前文相良主計頼堯三雲太郎左衛門定直を以其職に被仰付是則當分の
御留守居の始にて可有御座候尤十五人乗馬式正江戸詰の賄料被下候

京都御留守居

初は京都蔵奉行と相唱申候慶長九年甲辰家久公御在洛の時洛陽良位木下
え四方式白四拾間計の御屋敷御拜領にて御家老柁山権左衛門久高御留守
居被殘置御作事有之候段御家譜に被記置候其後室町四條下ル所え相替り
木下は道正庵え被下被宅地の内に相成候処又々錦小路高倉西え入所え被
相替室町御屋敷は呉服御用達内侍原善兵衛と申者え被下候由然其最初より
蔵奉行被召置候儀所見無御座新納右衛門久許事寛永元年甲子京大阪蔵
奉行被仰付候如何様其以前は京都にては蔵奉行の職掌無之候哉又は大阪
蔵奉行より兼て相勤候筋にても候哉未詳候宝永元年甲申十二月京都御守
居と御役名相唱候様被仰付向後御役被仰付候節は御家老衆直申渡に被相
定候尤一人役にて長詰被仰付出候処正徳四年甲午七月木脇實左衛門祐盛
え京都御留守居被仰付候先役和田次兵衛助辰と替合相勤候様被仰渡夫よ
り兩人にて致交代相勤申候尤京大阪共に拾五人乗馬式正の賄料被下候

大阪御留守居 初名大阪蔵奉行

大阪え御屋敷被相建候年鑑未詳候得共慶長の初より大阪蔵奉行相見得申
候宝永元年甲申十二月大阪御留守居と唱被相替向後御役被仰付候節は御
家老衆直申渡に被相定是又老人役にて長詰被仰付候處正徳三年癸巳十二
月村田与右衛門経令え大阪御留守居御役被仰付先役大島孫右衛門忠宣と
替合可相勤旨被仰渡候

御納戸奉行 初名御納戸役 御南戸役

中古御納戸役と申候は當時の御納戸奉行の職掌に御座候三原九兵衛重長
事貴久公御納戸役相勤候儀自家系図に相見得伊東仁右衛門事慶長十七年
より義弘公御納戸役 御納戸所の 数年相勤寛永四年御家老中御問合に又三
郎様最早御成人にて御座候御納戸の筋乗馬衆責て十騎共御座候はてはの
御談合相定爰許え被居殘候乗馬衆四人にて候間今六人の儀可被仰渡候六
人之内に御納戸衆二人可相加候と有之同十二年之旧記に黃門様御私の御
荷内所の御知行云々と有之同十五年の御譜には御南戸衆の事云々相見得

申候明曆二年の書附に奥御南戸役入間敷候間赤松諸兵衛儀取次番の内に被召加奥御南戸方え佐多六郎兵衛市来八右衛門可相勤候と有之又は赤松諸兵衛奥御南戸役被差免表を御奉公可仕候御南戸は表御南戸衆局前に可承由申渡候と相見得候然に寛永の季比より御前内之唱被相替候半左候で以前には御広敷之儀を納殿と相唱納戸の文字相用候故御納戸の儀は右通御南戸と書認候御座候其後は御納戸奉行と相唱申候万治寛文の比財部伝右衛門盛亮此職相勤候者にて彼家の記録に伝右衛門事御納戸奉行数年相勤御心安被召仕候相役は喜入次兵衛別府式部左衛門諏訪甚兵衛鎌田次右衛門にて候御前御用喜入次兵衛被承候付奥え被召通御心安被召仕候其後次兵衛為代伝右衛門次兵衛被召通候同然に夜毎罷通御用承候と相見得候得共御内向迄被召通候人は被究置候筋に御座候宝永元年甲申十二月御家老直中渡の御役被相定正徳二年壬辰正月持高三百石以下の者えは御役料高七拾石可被下旨被仰渡候且又御納戸奉行の儀与力被召附候得共此節被召留候旅に罷出候節計り可被召附旨宝永七年庚寅閏八月被仰渡候尤拾四人乗馬老正の賄料にて御座候

物頭 初名御兵衛奉行

初は御兵衛奉行と相唱申候 義久公御代より已に相見得申候宝永元年甲申十二月物頭と御役名被相替向後御家老衆直申渡の御役に被相定候尤十四人乗馬老正の賄料に被定置候

御鎗奉行 御弓奉行 御鉄炮奉行

天明二年壬寅二月初て御鎗奉行御弓奉行御鉄炮奉行被相建左の通被仰渡候

一御鎗奉行

但一御役格物頭の次 一物頭兼務

一与力同心支配物頭之通 一諸所物頭席席

一諸給分物頭之通

一御弓奉行

但一御役格御鎗奉行次 一諸事御鎗奉行の通

一御鉄炮奉行

但一御役格御弓奉行次 一諸事御鎗奉行の通

右の通御役被相建諸首尾是迄物頭仕来候通にて向々御道具請込被仰付候

外に御小納戸頭取被召建候ヶ条略す

右の通新規に被召建候条可承而々え可申渡候

天明二年

二月

仲

同五年己巳五月物頭大野清太夫清純御船奉行岡元千右衛門定好御作事奉行伊集院仁左衛門兼明御馬預鎌田平左衛門政胤を御鎗奉行に物頭渡屋喜三左衛門通著川上九戸親賢御日附木場次郎兵衛貞信西恰之助純以伊地知彦左衛門季馮を御弓奉行に物頭喜入休右衛門善典御作事奉行伊集院六左衛門兼尚高奉行申江長五郎員充御目附伊勢新五郎貞昆を御鉄炮奉行に被仰付同年七月勤方の次第左の通被仰渡候尤其後少々相替候儀も有之候由御座候

一物頭泊番の儀先達て申渡置趣有之候得共少人数にて候間三奉行より差寄繰廻に可相勤候

一琉球在番は物頭より可被仰付候

一江戸詰は物頭並三奉行共銘々詰可被仰付候得共當時は御俵約中故一往物頭詰被仰付置候

一御兵具方三組の人数与力同心向後四組に相分一組は物頭組に可入置候

一物頭差支候節は三奉行差寄可相勤候

一中出事等は其向々より可申出候

一当番は物頭兩人つつ繰廻何某日番の届申出置可相勤候

御幕其外掛り

右御幕物頭並三奉行向々え可差分置候

一与力同心共諸稽古見分之儀弓鉄炮は三奉行向々え可致見分候其外は物頭可為見分候

一諸所御蔵は引受の向々より可差越候御番所等何ぞに付物頭引受候時宜は三奉行も可差越事に候

一御兵具方附与力並同心え御切米被下候旨申付候節物頭並三奉行共夫

々引受の向より、与人數中より可致吟味候尤外与物頭えも申談可申付候

一 御旗類其外掛り

附取

一 御功付銀並六拾貫日利銀其外銀錢御出入引付手形等

一 御法事に付御能並御断之節詰

一 御仕置者勤御裁許詰日申渡事遠島者之節

一 三口番所の儀

一 張番勤番照堂積菜勤番且又御法事勤番

一 硫黄島檢者の儀

一 御兵具方換者横日藏役御鎧藏役御役代合等の儀右ハケ条物頭可引受候

一 御兵具方支配中依訳品能被仰付度其外諸出来物等

一 御兵具方付同心隠居家督又は養子一件

一 与力並同心居屋敷一件

一 御兵具方付与力勤方節々

一 御領國中諸所御番所え申渡色々御兵具出入一件

一 右五ヶ条於向々可引受候

一 大筒方 一 諸所塩燭藏見分

一 塩燭焚所何そに付申出候一件 一 塩燭合所檢者並塩燭藏番人等段々

一 申出候儀

一 右四ヶ条御鉄炮奉行可引受候

右の通物頭並三奉行勤方右の通被仰付候条可申渡候

天明五年

七月

近 江

御近習役

當時無之

上代此職所見無御座候 光久公御代より相始候哉と相考申候寛文十二年木脇刑部左衛門祐春事御近習役より吟味役被仰付候節御支配所の書附に御高百石右知行御近習役分地此中被給置候云々と有之兩金左衛門事寛文年間 継貴公御近習役多年相勤十人賦迄被仰付官之原甚太夫通貫事元

録年鑑此御役相勤太々職にて候處相見得候宝永三年の御役順物頭御近習役と有之同五年戊子閏正月御船奉行御役格被相替候節御船奉行御目見の節物頭の差次に被仰付候御前之御帳にも御近習役差次に被召載候旨被仰渡同七年庚寅閏八月御納戸奉行御近習役の儀は与力被召附置候得共此節被差留候旅に罷出候節計り可被召附候旨被仰渡正徳二年壬辰正月御近習役三百石以下御役料高七拾石被成下旨相見得申候然は御格直触にて物頭の次に被召出候處享保三年戊戌正月御側御日附之儀御近習役 今の御と御役名被相替候其間に此近習役は引役被仰付候得共年鑑等未詳候

御守殿添御用達

當時無之

享保十四年巳酉十二月 淨岸院様御入興にて御守殿被召建候に付此御役被召置御役格物頭の次御船奉行の頭に被仰付江戸詰の節は十三人の御賦被仰付候旨被仰渡御役料米七拾五俵被成下御使番新納シレ 右衛門時春 此年十月於 以始て此職ニ被補其後段々勤来候處安永元年壬辰十二月淨岸院様御逝去被遊候付御守殿被撤御附の御役々引取相成候

御船奉行

文録二年癸巳朝鮮の役伊地知佐渡重順事旗及船奉行にて罷立見玉筑後事於國分竜伯様御船奉行相勤候杯と旧記に相見得候得は久敷職掌ニ御座候宝永三年丙戌御目見の次第御勘定奉行 此御役場後に 御船奉行御記録奉行と被相定候處同五年戊子閏正月御船奉行格式被相替御役被仰付候節御勝手方御家老より直に被仰渡管に候 御目見の儀も物頭の差次に被仰付候左候て無役の地頭杯御札に罷出候節は無役の地頭杯の次に御札可申上候 御前の御帳にも御近習役差次に被召載置候旨被仰出候段被仰渡候尤十二人賄料に被定置候

附久見崎奉行 久見崎御船奉行

久見崎え御船手被召建候年鑑不詳候寛永十五年島原一揆に付閑船之儀は久見崎御船手え被仰遣の由云々と旧記に相見得候尤 家久公御代には水引の内屋原と申所え御船手在之水引新田宮執印職執印丹波と申者山鹿越右衛門同役にて御船奉行相勤候段自家記置申候然は右屋原より高江の内

久見崎を御船手被召移候筋にても可在御座哉左候て以前には久見崎へ御船奉行在勤被仰付候処、久見崎へ御船奉行在勤の初めは相知不申候水引郷十寺田堅吉家の旧記ニ元禄九年御船奉行遠矢金兵衛久見崎へ相詰候段記置候得共是は追代の儀に御座候如何様御船手被召建候期より在勤にても可在御座候得共詳成儀未相知候

同脱力

宝永六年己丑八月物頭郡山地頭上村権兵衛行隆へ久見崎奉行被仰付御船奉行在番仕候得共被差留候権兵衛久見崎へ諸移御船奉行相勤候節の通可相勤候為御心附御切米貳拾石被下候御役格式の儀は御日付此御日附の儀御側役並の次に記置申候
同格に被仰付候段被仰渡同年九月高江地頭被仰付候申自家申出候行隆事同七年庚寅正月致病死候付山田四郎兵衛有寿を以久見崎奉行被仰付御役料貳百石外に御米貳拾石被下候有寿事其已前長島移地頭にて川内以北の御目附被仰付置候故久見崎奉行被仰付候ても御日見の儀如元相勤高江地頭被仰付其後山田百次限之城高江東郷中郷水引高城阿久根長島野田高尾野出水え郷土之内一人一つ有寿え被相附候目附役被仰付候由自家記置申候然処有寿事同年九月御用人職被仰付候付久見崎奉行被召罷岡元千千右衛門重隆事同年同月久見崎御船奉行被仰付右有寿へ相代り久見崎え引越相勤正徳二年壬辰三月佐多休左衛門直房え致交代罷候處重隆事は御当地御船奉行被仰付候左候て直房事享保十九年申寅致病死候付大より久見崎御船奉行別に不被仰付御船奉行の内より四月ヶ月つつ繰廻にて致在勤候様被仰渡其後安永二年癸巳十二月三ヶ月詰被仰付候

御使番

宝永二年乙酉五月於江戸始て被召建伊東源右衛門祐正阿多六郎右衛門俊共伊佐岡伊右衛門盛仲を以被補此職候御役職の時々御賢慮を以被仰付平日の勤務諸御附届方可承旨被仰付候左候て御船奉行次御近習役並の上御家老家直申渡与頭直触の御役格被相定正徳二年壬寅正月持高百石以下御切米七拾俵五拾俵迄の間の賦依人御見合次第可被下旨被仰渡候尤十一人乗馬老定の賄料に被定置候

御小納戸頭取

天明二年壬寅正月初て被召置左之通御役格被相定御小納戸早川半蔵兼以を以被補之候

一御小納戸頭取

但御役格御使番次 一拾壹人賦

一御役料並御心附銀御小納戸の通

一勤方御小納戸の通にて御小納戸方頭取

右の通御役被相建候

外に御船奉行等御役被相定候箇条略

右の通新規被相建候条可承向々え可申渡候

天明二年

二月

仲

同四年甲辰十二月谷村孫右衛門純章事御小納戸頭取にて御用御取次見習被仰付左の通被仰渡候

谷村孫右衛門

右当御役にて御用御取次見習被仰付候

一御用部屋え可相勤候

一仰出御取次並諸証文其外首尾不相掛儀は名前相用可申候

一他所文通等之節は御側役名前を以可致首尾候

右之通被仰付候段江戸より申来候条此旨可承御役々え可申渡候

天明五乙卯

正月

仲

御小納戸役

當時無之

出考宝永二年乙酉四月 第三郎様御書 御上下御召初と遊候筋御家老衆於納殿

此御役何つ比より被召置候儀相知不申候得共貞享八年家村幸右衛門住紀御下被下之御用人御日附吟味役御留守御納戸奉行御近習役御小納戸役は御用人座御料連被下之御近習廻り其外は御座立の間脇座にて同断と相見得候然共其月より同年十二月迄の間被召置候御座候

事御小納戸里村市右衛門景信を以御肩衣袴拜領仕其後飯御小納戸役被仰付河野造酒承通行事元録の御小納戸役にて御近習衆並御前御取次相勤於江戸御跡乘騎馬被仰付候段自家記置候且又宝永元年甲辰十二月より御小納戸御役被仰付候節は御家老衆直申渡被仰付候然処同二年乙酉十二月堀

之内六左衛門三原仲右衛門事此内御小納戸役の格に被仰付候得共当分は御小納戸役は先不被仰付候御小納戸御用は御小姓の内より御小納戸方相勤候者にて相濟候付本役は無之候然ハ六左衛門仲右衛門兩人の役名は御近習役之並と唱可申候申候格式は此内の格に可仕旨被仰渡後にも御使番御近習役並と次第有之候左候得は御小納戸役の格は御使番の次に為被建置と相見得本役の御役順外に相知不申候得共大跡右式の御役格にて可有御座儀推て相知申候

御広敷御用人 初名納戸役人 御広敷家
或奥家老 納殿御代官

中古迄は分て此職無御座御夫人様御方の儀は納殿より万端致差引候筋相見得申候委細は御広敷番の頭の場に相載申候近古に至り候て奥家老と為申御役も在之又は納殿御代官の職在之一名は納殿役人と相唱候筋御座候伊藤弥右衛門家の記録に伊藤孫兵衛祐貞と申者 家久公御逝去前年に納殿役人被仰付平野丹後弟子丸越中其外余多同役相勤其後 光久公納殿人に被召仕其時に相役黒葛原治部右衛門小島甚兵衛同前に相勤切米拾石納殿役扶持の外に被下置其子伊藤弥右衛門祐正事も納殿役被仰付父子同役にて相勤候段記置候且又明暦年鑑の記録に奥方の儀は 眞修院様御方上早敷規模を以万事御部屋栖相応に相調候尤就其郷田源右衛門從此度納殿代官被相定候と在之又上下奥方様御膳厨其外諸事省略の儀而御局御代官伊藤孫兵衛郷田源右衛門申談云々と在之其後伊藤弥右衛門より西四月年号相知不申候得共 訴状に旧冬十月伊集院六左衛門代として下御屋敷納殿代官役被仰付御賦方如前々之主従六人の御賦にて被召上候然此節木脇作右衛門上御屋敷役儀に付主従八人の御賦にて被召上候作右衛門代として岡元千右衛門事も当冬より右の御賦にて被召上候由承候然時は役儀に付賦御重於被下は何方も同前に御座候条右兩人並に被仰付可被下旨申出候然此寛文十年庚戌岡元千右衛門重興へ左之通被仰渡候

覚

一高輪奥方惣様御仕用云々

但役人は奥家老定役に被仰付候間相役と致熟談可相調由被仰渡候事一奥家老役は今度十人之騎馬御賦にて御扶持米五拾石可被下旨可被仰山候末略

寛文十年戊四月

勘解田書

岡元千右衛門殿

且又赤塚吉右衛門重種事延宝五年眞修院様奥家老日井次郎右衛門昌勝跡役被仰付其後罷下り納殿御断申出候と自家に記置旧井氏にては昌勝事眞修院様納殿役人相勤十人賦被仰付候と書記申候前文岡元重興並徳永善左衛門延宝五年の誓詞には我々納殿役人被仰付候御奥方並御藏方諸事御為能様に心の及入念相勤可申旨相見得申候右旁を以て以前に納殿役人と在之候も当分之通屹と御役被召建候にては無之納殿の内にて所相向等の儀引受相勤申候故代官又は役人の唱も在之乍然並の納殿とは相替り諸事心配も在之候故御膳料等被相重奥家老と為申筋も御座候付漸々御役格迄も品能為相成筋と相考申候然共宝永二年乙酉十月御礼日御日見の順被仰渡候節物奉行御座別当納殿役人と被相候候当分の通直触の御役に被仰付候儀は年来不久儀と相見得申候得共何比よりの儀は末相知候安永七年戊戌五月御広敷頭と御役名被相替其後天明六年丙午七月御広敷御用人と唱被相改候

教授 初名聖堂奉行

初は聖堂奉行と相唱申候安永六年丁酉六月初て被召建御記録方添役勤方聖堂方掛り山本伝蔵正誼を以被補之御役格左の通被仰付御役料米は本の通五拾俵被下置候其後相重都合旨儀被成下候

一聖堂奉行

但中通直触にて順の儀は納殿役人次

一拾人賦

右之通御役被召立候条此旨可承御役々々可致通達候

安永六年

六月

左中

一聖堂奉行

但中通直触にて順の儀は納殿役人次

一御役料本之通
一拾人賦

山本伝藏

右之通被仰付候間以来聖堂の儀都て取計仕々入學の諸生藤成立御創建
の詮相見得候様出精可致旨被仰付候

右の通今日御役替被仰付候間如例可被申渡旨左中殿御差図にて候以上

安永六年四月十五日

平田平太左衛門

其後天明六年丙午十月御役名教授と唱被相替候

御右筆頭

天明六年丙午正月初て被相立御右筆折田清右衛門常親を以補之左の通被
仰渡候

御右筆頭

一御役格直触にて聖堂奉行の次

一十人貲料

右之通新規に御役被召建候旨被仰出候条此旨可承御役々々可致通
達候以上

天明六年

二月

安房

一御右筆頭 一御役料米五拾八俵

一御右筆方重立候儀は勿論御入用向等專引受可致差引候

折田清右衛門

右の通御役替被仰付候

外ヶ条略

右の通今日被仰付候条如例被仰渡候様可被申上旨大炊殿御差図
にて候以上

天明六年正月十一日

町田主馬

御四元

御側御用人衆

小十人頭

天明七年丁未七月御小姓与の次与力之上に小十人與新規に被相建候付小
十人頭御役被召置右組の支配被仰付谷川政之進清胤高奉行相良此右衛門

長祐を以被補之御役料米四拾八俵被下置左の通被仰渡候

小十人頭

一御役格直触にて御右筆頭次 一十人賦

右之通新規に御役被相立候旨被仰出候条此旨可承御役々々可致通達候

天明七年

七月

勘解由

小十人の組新規に被相立候依之諸事左の通被定置候

一持高四拾石余を限五拾石は不被差免候

一家格御小姓与の次与力の上

一無役にて江戸詰等の節は御小姓与の場にて可被差越候

一勤向書役小役人に可被仰付候

一初て 御目見等の節は御書院国内一畳内可差出候

一十人頭新規被相建右支配可被仰付候

一十人組頭も被相立候条小十人頭に相付可相勤候尤御仕向御小姓
与組頭の通可在之候

一十人頭並小十人御番所別段可被相立候

右之通被仰付候条此旨可致通達候

天明七年

七月

勘解由

御作事奉行 初名御普請奉行

奈良原門實事 日新様御普請奉行相勤酒匂紀伊事 維新様飯野え被成御
座候御御役相勤候杯と旧記に相載其外天正年鑑の御陣賦にも御普請奉行
相見得申候共此職掌は久敷在之候寛永の比には定役迄は両三人の間に
不時の御作事には其第一且の奉行被仰付候筋に御座候天和元年辛寅迄は
御普請奉行四人被仰付候処同年八月より御普請方中取役被相建夫より御
普請奉行の御役は相見得不申左候て元禄四年辛未御普請方より申出候書
附の奥に御普請方野村藤左衛門右神惣兵衛と在之候右兩人共に其比中取
役にて御座候同十四年辛巳江戸芝御屋敷御作事の節御用人野村太左衛門
広貞を御普請奉行被仰付限元与一右衛門宗弘御普請方申取にて広貞を相

付相勤候杯と有之候を以て天明元年より御普請奉行御役は一往被相勤候
右職掌は御用人の内より相兼万端の義は中取引受相勤候處宝永四年丁亥
十二月又々御普請奉行谷山角太夫忠和阿多仲右衛門俊名種子田市兵衛秀
延尾上甚五左衛門信茂を以て被補之是より當時の御作事奉行御役格に相定
り中取の儀は其御引役相成候筋相見得申候尤中取の御役格詳に相知不申
候得共其比迄は唐船改を異國座中取寺社方取次を寺社座中取と相唱候故
中取の儀も右一類の格式にて可在御座哉と相考申候其後御普請奉行御役
料五拾石以下銀拾枚可被下旨正徳二年壬辰正月被相定天明三年癸卯御作
事奉行と御役名被相替左の通被仰渡候

御普請奉行の事
御普請奉行の事
一御作事奉行

右の通御役名並唱被相替候旨被仰出候段中來候間可承面々えも可申渡
候

天明三年

十月

主 馬

一御家作其外小屋作等を始右跡造作の儀御作事と可相唱候
一道橋石垣土手川普請等を始右跡の儀御普請方と可相唱候
右の通被仰出候段中來候此旨可承面々え可申渡候

天明三年

十月

主 馬

附録諸役人誓詞の伺御納戸奉行御小納戸一紙に御側方御普請奉行の職名
相見得申候故相勤候處享保年鑑より延享年中迄の間 吉貴公御隱居後儀
御方に相勤候御普請奉行の人数にて候然外に右の御役は無御座候名目
相替候故疑の端にも可相成と茲に附録仕候

御普請奉行

天明三年癸卯十月新規に被相建左の通被仰渡候

御普請奉行

右御役被相立御勝手方支配にて御作事奉行次被仰付是迄御作事方にて首

尾致來候御普請の分可致請込候人物追て被仰付迄は御作事奉行兼務被仰
付候条下役の儀も可右準候

右の通被仰出候段中來候此旨可承面々え可申渡候

天明三年

十月

御記録奉行

主 馬

御家御系図御文書の儀以前には御家老衆の内者人つつ受持にて候処家久
公御代義岡内久喜へ御文書奉行被仰付御系図御文書御書物格保護被仰
付其後光久公御代御文書奉行平田盛右衛門純正へ 御元祖様御以来の御
家譜編集被仰付正保二年乙酉冬より取付致成就候故明暦三年丁酉正月御
高直石并領被仰付候是より御記録奉行の御役相建候尤此以前より為在之
御文書奉行並御書物奉行の両職兼帶被仰付 御書物奉行の儀は元禄の初迄は有
之候得共其後猶以兼帶に罷成候

右純正並同役大田小平次久知共に御納戸奉行にて御記録奉行申乙も在之
候処其以後は御納戸奉行より兼務は無御座候御役格不相定候敷御礼席の
次第も不相究候然處宝永二年乙酉十月御目見の次第御勘定奉行御船奉行
比御役の格式 御記録奉行長崎御使人と次第被仰付同四年丁亥九月御記録
其以後は相替候 御記録奉行長崎御使人を以て申出候様被仰付同年
所請事表御用人を以て申出候得共向後御側御用人を以て申出候様被仰付同年
十月思召を以て看人つつ御供にて江戸詰被仰付候段被仰渡候 其以後引続御供
九年庚子より御
供は不被仰付候 同六年巳丑向後十人賦被仰付候尤其以前には賄料不同御座
候正徳元年辛卯九月思召の訳在之中通被仰付御規式事御礼事月並御礼に
も御座の間御書院御對面所え可相詰旨被仰付向後御家老座え被召通候段
被仰渡同二年壬辰正月百石以下えは六拾五匁可被下旨被相定

長崎御使人

公儀より長崎へ御役所被召建候は元和二年丙辰にて御座候其節より御使
人被差遣候儀相見得不申候承応元年壬辰二月葉丸大炊兵衛事長崎え詰に
被差遣候段旧記に相見得申候是即御使人の始にて可在御座候延宝年鑑の
記録に長崎御留守と有之候も御附人の儀と相見得申候尤其比より十人
十一人の賄料被下候正徳二年壬辰正月御役料御当地え罷居候節は御切米

拾五石長崎詰の節は御賦銀壹貫五百目余飯米四拾六石五斗七升余可被下
之旨被相定且又己前には兩人にて交代いたし長崎え相詰候処中古壺人役
に相成元録十二年己卯二月野村勘助盛富え御附人被仰付先役葉丸伊右衛
門兼定と兩人にて隔年在勤致候様被仰付尤御国元え罷居候節は日勤不仕
候処宝永六年己丑十二月平日異国方え相詰候様被仰付其後天明二年壬寅
正月長崎御附人の儀長崎又は於他所聞役と相詰書附等にも相認御内輪に
ては是迄の通被仰付候旨被仰渡候

高奉行

元和五年己未本田甲斐佐多越後本田新助三原次郎左衛門高奉行相勤候其
以前此所見無御座候按に右元和五年御国役難被成訳を以諸士並寺社知行
の内被召揚御蔵入の諸所被相定惣配當被仰付其外知行高之格被相究候儀
在之候付其節より高奉行被相立候哉詳成儀相知不申候

物奉行

有川伊豆と中人帖佐にて維新様物奉行相勤候由旧記等に相見得申候此役
名は久敷在之候得共職掌格式等の儀は詳に相知不申候寛永五十六年以來に
至り候ては致連統相見得申候高橋權左衛門種十事寛文十二年壬子二月御
用人職被仰付比志島主膳国治え相代り江戸高輪物奉行相勤候由書記候然
は其比には一往御用人より高輪物奉行相兼候儀も為在之筋に相見得候得
共詳成儀相知不申候正徳二年壬辰正月御役料持高百石以下には御切米六
拾五俵可被下之旨被相定候 附録

一諸御役人誓詞御納戸奉行御小納戸一紙に御側方物奉行の職名相見得申候
故是又相札申候御側方御普請奉行同然享保年鑑より延享年中迄 吉貴
公御隠居後磯御方え相勤候物奉行の人数にて享保六年日高六郎兵衛為香
同七年官里八兵衛正信を御隠居御方物奉行一篇にて其後の人は御隠居方
御普請奉行物奉行兼役被仰付候筋相見得申候

一田中七右衛門守重享保四年御部屋様御方物奉行相勤候表方物奉行打
込被仰付五万石兼役相勤候旨物奉行系図帳に相見得申候

右両条御隠居又は御部屋御附にて一旦為在之御役には御座候得共名目
相替候故此に附録仕候

道奉行

安永二年癸巳七月初て被相立御馬方田村幸太夫之方御目付堀万右衛門貞
友安藤佐次兵衛茂清及永山与三右衛門縣方を以被補之左の通

道奉行

堀万右衛門
田村幸太夫

安藤左次兵衛

永山与三右衛門

右之通御役替又は御役被仰付表方支配にて御役の順物奉行次御馬方上
被仰付勤方左の通被仰付候

一平日羽織中袴にて相勤月次御礼御祝儀事等の節は上下致着川候様被仰付
候

一鹿兒島中毎日行廻り町家橋々迄も悪敷場所又は外廻等至て見分不宜所は
其屋敷掛主人共へ道造等可申渡候尤小路内に相係り候儀は都て受持被仰
付候

一水道方都て請込橋の儀も引受候て道橋普請等の節專致差引候様被仰付候
一御領内道橋見分道橋普請の儀も受持にて諸事致差引候様被仰付候

一御役所に被相立候迄は御普請方え相勤候様被仰付候
右の通表方え致通達御勝手方御側方えは写を以可相達候

安永七年

七月

左 中

御馬頭 初名御殿別當御馬方
或は御馬頭奉行

天正の初御陣賦に御歴奉行在之日又 家久公御代国分帯刀と申者御馬の
役と旧記に相見得申候都て當時の御馬預にて可左御座候光久公御代御城
下に上下面所の御歴被相建定立御馬八十疋に被仰付上の御歴は太山伊予
広綱下の御歴は財部淡路盛秀別當相勤候尤 綱貴公御代迄は御殿別當居
役所にて御座候正徳二年壬辰正月御役料の儀百石以下には御切米六拾五
俵可被下之旨被相定享保二十年乙卯九月御殿の別當を御馬方と唱被相替
其後安永七年戊戌五月御馬預と御役名被相改候

御小姓頭取

天明六年丙午十月初て被相立左の通御役格被仰渡候

一御小姓頭取 一御役格御馬預の次 一十人賄料被下置候

右御役新規に被相立奥表御小姓御近習番御小姓の頭取被仰付候尤右御役々より差出候諸書附等も取次可申候外に御側目付被仰付候ケ条略す

天明六年

十月

安房

御部屋御附

御小納戸頭取

右人物御見合有之迄の間御附の御納戸奉行より相兼可申候

同

御小姓頭取

右同断御抱守より相兼可申候

右の通被仰出候条可承御役々え可申渡候

天明六年

十月

安房

同年十二月御抱守鎌田小十郎政虎を以て始て御部屋御附御小姓頭取被仰付御役料米元の通被下置候尤 中將様御家督内御表には現任無之御隠居後之儀は左の通被仰渡候

御隠居御附御小姓頭取の儀は御小納戸頭取より兼帯可相勤行被仰出候段申来候条可承向え可申渡候

正月

安房
主膳

御側目付

天明六年丙午新規に御側目付被相立同年九月於江戸御日附御裁許掛高田猛太夫利公を以被補之同年十月左の通

一御小姓頭取 外ケ条略

右御役新規に被相建候末略

一御側目付 一御役格御小納戸の上 一六人賄料被下置候

右同断被相立奥向は勿論其外御側目代被仰付候
右の通被仰出候条此旨可承御役々え可申渡候

天明六年

二月

安房

御小納戸

御小納戸の儀は当分の御役格にて被召建候年鑑分明相知不申候得共最前被召置候御小納戸役は宝永の比敷引役被仰付其後無幾程新規に被相立候筋相見得申候左候て正徳二年壬辰正月古石以下御役料御切米七拾五俵より六拾俵迄の内被城下候旨被相定御小納戸役と唱来候処天明元年辛丑五月御小納戸と御役名被相替候

附録 太守様御部屋栖被遊御座候内御附の御小納戸役天明元年辛丑正月薬丸猪之助兼陳割倉係太郎孝教え被仰付御役格御抱守の次御小納戸並の上に御役料米四拾八俵被下置候

御小納戸並 初名御小納戸役並 当時無之

御小納戸役並の儀も何比より被召置候儀不詳候正徳二年壬辰正月御役料被相定候節御小納戸役の儀は有之候得共御小納戸役並の御役名相見得不申候同年八月相良新平長陽事御小納戸役並被仰付御役料米五拾俵被下候然其比より為被相立にても可有御座哉其後は御役料米四拾五俵被成下候左候て天明元年辛丑五月御小納戸役之儀御小納戸と唱被相改候故此職も御小納戸並と相唱候処同五年乙巳正月御小納戸並御役向後被相除候旨被仰出候段被仰渡候

御供目付 中通御日付御供御日付

宝永元年甲辰初て御供目付と申候御役被相建正徳二年壬辰正月御供目付百石以下御役料御切米五拾俵可被下旨被相定其節の書附御目付御供目付と御役順相見得申候然処同三年癸巳三月改て中通御日付に被仰付御役格表御日付同格にて御供方を兼御役列御小納戸の次表御目付の上に被相定候

堀堀右衛門 中村八兵衛 富山伝内左衛門 御日附寄
二階堂八十郎

右之面々此内は御供目付一通の勤方に候得共此節御目付役被仰付余多の

儀迄も相勤候様にと被仰付左候て中通の面々え何を御用の節中通の御目付へ其首尾申出候様にと被仰渡候節は右面々取合可申出旨御差図にて候以上

正徳三年癸巳

三月朔日

中通御目付と表御目付は御役は同前にて候中通と表の替迄に候間他所の者え申候節は中通御目付の儀も御目付と唱可申候御内々の儀は他所の者よりこまかには存問敷候間右の通唱可申候糾明奉行の儀も同前の事に候間此趣承置候様にと通達可被申聞候以上

正徳三年己

三月三日

右の通被仰渡置候処安永七年戊戌四月御役名中通御目付を御供目付と被相改其後天明六年丙午七月御供目付と相唱候様被仰渡候

御目付 初名横日座取次役大御目付座取次

初は横日座取次役と申候被召建候年鑑相知不申候宝永四年丁亥正月横日頭御役を大目附と唱被相改候節横日座取次役を大目附座取次と唱可申旨被仰渡候然処正徳二年壬辰正月表御目付を引役被仰付大目付座取次を別段表御目付と被相改其名同敷御座候得共御役格は大に替申候同年四月白石以下銀七枚五拾石銀拾枚御役料可被下旨被相定候

御裁許掛 初名口事奉行 糾明奉行 加役 糾明奉行加役 御裁許方加役 御裁許方掛

初は口事奉行と相唱別段御役被相建候時代より被召置候儀は相知不申候得共御裁許掛系図帳に大野内記久近比志島堅物範貞鎌田基右衛門政永以来相載候右三人共に 家久公光久公御代の人に候故此職の久敷を相知申候宝永七年庚申三月口事奉行を糾明奉行と唱被相替候尤其以前は御吟味の事を口事と相唱評定所を口事場と申候正徳二年壬辰四月糾明奉行百石以下御切米六拾五俵の御役料に被相定 貞享四年丁卯松崎五郎左衛門員満口事奉行被仰付候節御役料五拾石と自家記置 其節の書付に糾明奉行御役宗門改方 今之宗門 改役にて候 之次磯尾畔御飯屋守申候

磯御飯屋守は當時無御座尾畔御飯守は今の尾畔御座所にて御座候

行を御目付に被仰付糾明奉行は加役に被仰付御目付糾明奉行加役と或は糾明方加役と相唱来候処安永七年戊戌五月糾明方加役を御裁許方と被相改同九年庚子七月御裁許方掛と被相替天明六年丙午正月御裁許掛と被相改候

御軍師

寛政五年癸卯八月始て御軍師御役被相建表御支配にて御役格左の通被仰渡國田与藤次盛康を以被補之御役料米三拾五俵被成下候

御軍師 但御近習通

右の通新規に御役名被相立諸事御目付同格被仰付候

右の通被仰出候此旨可致通達候

寛政五年

八月

勘解由

御右筆

此職は上采より為在之等候得共分明相知不申候伊勢兵部員昌事御使役今のにて御右筆をも相勤福摩伊賀兼昭事光久公御代迄多年御右筆相勤諸所地頭職被仰付候儀も御座候得共全鉢の御役格右式差立為申筋にては無御座候以前には御家老座書役より任々御右筆被仰付候儀相見得申候野田勘兵衛昌具事白尾金左衛門國長に代り寛文の比御側御右筆被仰付六人賦被下候段記置候得共今の御右筆の外に右職掌為在之哉にも相見得候故御右筆へ相札申候処彼方に寛文年鑑の諸帳無之候付御側御右筆と申御役名不相知候然共元禄九年の比御右筆富山十兵衛岩切与一兵衛御側方え差分相勤候儀は眼面相見得候共是も御側御右筆と申候儀隨に不相知段承り申候

御広敷番之頭 初名納殿役 御広敷番

初は納殿役と申候古き記録には納戸の文字も相用申候三原伊豆事 貴久公御代此職相勤候儀系図に記置候以前には當時の御広敷御用人の職とて

外には無御座納殿役相勤候故老功の人に被仰付大奥趣の儀は専ら委任為在之趣に相見得申候天正年鑑義久公御書にて右跡相知中候故方に相記申候

鹿兒島留守番の事奥の儀は先納戸衆肝要にて候左候て外城外様の番衆へも何事をも致糾明納戸衆前より可申付候趣に川上日向事おもてかたへ用所之儀候故おく之番とうめさるの由候出代入道事は老跡の間おくの番指置候如此候へは定て永吉安女一人にておく番とうめ候駕若輩と云一人にては可難成候川上日向事おもてかたへ庶て用所候は召仕候て誰一人かはりとして可被中付備後入道へ談合仕外城の番衆の糾明をも致おくの置目も一の合え可得御意事肝心候此分無油断可被中付候恐々謹言
年号不伝

六月廿六日

記伯 御判

右之通御家老長寿院町田式部録田筑後え被仰越日又慶長の比平田豊前宗祇川上善左衛門義時 義久公納殿被仰付置 家久公朝鮮え御渡海の節御直書被成下候仰兩人事就奥方別て頼置候定て可為平勞候心よはく遠慮なと被中綴なる儀共於右之は後日に至り兩人可令其沙汰候女方之儀は平生法度正しき家中も人間の迷ひにて不可然儀共山合外聞惡敷毎事在之事候いささかにもうつけたる儀共見及聞及切に不寄男女に誰にても候へ利くつたてなといひ候はん人は心付可申哉にとの御文言相見得申候右向御書にて古への職堂相知中候正徳二年壬辰正月納殿御役料持高百石以下御切米五拾俵可被下旨被相安永七年戊辰五月納殿役之儀御広敷番と御役名被相替其後天明六年丙午七月御広敷番の頭と相唱候様被仰付同八年申三月是迄十人賄料被下來候面々御広敷番の頭へ六人の賄料被下候得共以來は十人賄料可被下候尤当分相勤居候面々も是迄の通可相心得旨仰出候段申米候旨被仰渡候

附録

御守殿 御鎖口添番當時無之

享保十四年己酉淨岸院様御入興に付是年十月御守殿添御用達同様此御役

被召置候御役格の儀は納殿同格御目見等に罷出候次第納殿役の頭に被仰付候左候て江戸詰の節は七人賦被下候旨被仰渡御役料米四拾俵俵支度料銀五枚被下置敷十郎右衛門胤貞伊勢仲右衛門貞陳山元利右衛門秀就川上藤兵衛親邦石川庄兵衛長方須摩中之丞白井貞之丞昌住繁瀬長左衛門時福堤伴九郎等を以被補之淨岸院様御一世は右御役被建置候

山奉行

山奉行系図帳に寛永四年丁卯より相始川上式部大夫吉利下總守と記置候其以前此職所見無御座候付ては右年鑑より被召置候にても可在御座哉詳に相知不申候右系図帳の内に延宝二年より山奉行の内袖山方兩人被仰付同八年より新村木兩人被仰付元禄十年の比迄は右兩職相見得申候然共今は右兩職共無御座段山奉行より承り申候正徳二年壬辰正月山奉行五拾石以下銀三枚御役料被下候段被相定候

附録

惣山奉行

寛文延宝の比惣山奉行の職在之候川上右京久昌若松彦兵衛久白奈良原清左衛門長資野津安右衛門鎖政新納小右衛門久喜等相勤申候右六人共に吟味役當時無之より相勤能と立候職掌にて山方の儀惣山奉行所より山奉行え申渡御用取扱候筋に相見得候何比より被召置候哉未審候

郡奉行

慶安二年己丑惣田地座被召建東郷肥前重方猪俣猪右衛門則康兩人を始めて郡奉行に被仰付候東郷藤兵衛家に右重方事御役坐御規模をも相究其後御分國中一統大御支配被仰付候付多年相勤御朱印高外に増高二万四千石出来郡坐付御蔵入に別立に被仰付又々新地仕明候て諸所御高出来是即帖佐与御蔵入と相唱候由記置申候正徳二年壬辰正月御役料高五拾石以下銀三枚被下候旨被相定候

附録

殿役奉行

此職上代には所見無御座候寛永七年の御家譜には已に相見得申候然延宝永七年庚申閏八月左の通被仰付候段被仰渡候

殿役坐此節相置候郡坐え召付人燭賊郡坐差引に可仕候右賃米其外銀米

の手形考は表方代官半差引に可仕官被仰出候て殿役坐被相定候以上

壬八月十一日

右之通にて其後殿役の称は相殘居候正徳二年癸巳八月前々より殿役方殿役米と唱來候を人馬賦賦米と向後名唱改可申旨被仰渡候尤殿役奉行御役格順席等の儀分明相知不申候得共諸御役人誓詞は元禄十年丁丑五月殿役奉行山元善右衛門同十二年己卯三月勝日藤右衛門の列は都て郡奉行の頭同年閏九月桑波田勘助は郡奉行の次同十三年庚辰四月四本監物忠盛は御細工奉行の次宝永二年乙酉三月南郷林左衛門久寛一列は山奉行の次同六年己丑十二月藤井幸左衛門重任一列は屋久島奉行の次に連名相見得申候然は六人賄料被成下候諸奉行一列の御役格にて可有御座と相考申候且前桑藤井重任事始て郡奉行相勤其後殿役奉行は相残候処享保三年戊戌三月御役又は江戸詰に付格式新番被仰付候人数の内に相見得申候得は十人賄料の御役にて無之儀は勿論の儀と相見得申候

金山奉行 金山物奉行 金山奉行金山町奉行當時集之

御領国金山の儀は寛永十七年庚辰長野金山を始て警出候右に付北郷佐渡久加え金山の物奉行被仰付同年平山八右衛門忠守土持権頭昌信平田清右衛門純音へ金山物奉行被仰付候左候て漸々山中繁栄仕候故に哉金山奉行金山町奉行をも被召建村田藤兵衛經國事寛文元年御使役にて金山奉行被仰付其後比志島主膳國治事御用人にて御物産方並金山方御城下町奉行被仰付候儀と相見得勿論片ヶ野鹿籠金山共に別段金山物奉行被召置候如何様後年に罷成山中も相殘候故金山奉行金山町奉行等の御役は被相罷金山物奉行迄相殘是節当分金山奉行と相相候儀可在御座と相考申候正徳二年壬辰正月金山奉行右以下には支度銀四百日つつ可被下旨被相定候

竹細工奉行

慶長十三年戊申の御諸に細工奉行森喜右衛門と相見得且又同此本田半兵衛親紀御細工奉行被仰付御前に別て被召仕奥方にも被召仕候由記置候得は此職之久敷は相知申候然其何比より被召置候儀又は御役格等の儀も不詳候正徳二年壬辰正月御役料の儀持高五拾石以下には銀六枚可被下旨被相定候

御祈念方 一名御祈念奉行 當時無之

御祈念奉行の儀何比より被召建候儀分明相知不申候是枝右京と申候方治三年奥御看經方被仰付御切米拾五石被下置 綱貴公御代迄相勤御祈念奉行六人賦被仰付候段自家申山時任慶右衛門義嚴事寛文五年奥御看經所御番番被仰付置候宝永二年御省經方御祈念奉行兼役被仰付候然は 光久公御代より被召置候故正徳二年壬辰正月御役料只今の通と被仰渡候節御役順御細工奉行の次屋久島奉行の頭に御祈念方と被載置候然享保十一年丙午二月左の通被仰渡候 寺社奉行並寺社方取次え

御祈念方御役率此節被召置御祈念方の儀都て寺社奉行請込に被仰付御祈念方勤は寺社方取次加役被仰付候尤御祈念方諸牒其外諸事次渡候様申渡候条可被得其意候

一御祈念方手伝之儀は御看經所の掃除並水汲等に付日々仕業多候由候条寺社座を被召附候間寺社座手伝に召置御看經所の勤仕を申渡候

右可申渡候

享保十一年午

二月

查

屋久島奉行

屋久島之儀は元來種子島氏領分にて候其後領地御縁釋有之又候慶長四年種子島旧領に復し候節屋久惠良部の両島は暫御借地となり遂に不被返下候然其其嗣より役人被召置候儀所見無御座候寛永十九年壬午 以来に至屋久島代官相見得申候其後連々相勤來候処元禄八年乙亥九月屋久代官南郷仁右衛門久武丸田三右衛門実親を御免にて別に曾木甚右衛門重寛塩津正左衛門長春を屋久奉行被仰付候宝永四年丁亥迄は屋久奉行同五年戊子には屋久之島奉行同六年癸丑より屋久島奉行は諸御役人誓詞に御役名相見得申候左候て屋久島えは抑役被差遣迄にて御座候然宝永五年於彼島異人相捕候節より抑役は被相罷屋久島奉行一人つつ在島被仰付候正徳二年壬辰正月五拾石以下には御役料銀四枚可被下旨被相定候

宗門改役 初名宗社奉行 宗社改方 宗門改方

明暦元年乙未初て宗社座被相立若松助左衛門久昌宮里五右衛門正行を以

宗跡奉行に被仰付候元禄十二己卯四月宗跡改方と御役名被相替宝永六年己丑九月宗跡宗旨と唱衆候儀此以後は宗門と相唱書付等にも可致旨被仰渡其より宗門改方と相唱候正徳二年壬辰正月持高五拾石以下には御役料銀五枚可被下旨被相宛安永七年戊戌五月又々宗門改役と被相改候

御鳥見頭

安永七年戊戌正月十一日初て被相建被島次郎兵衛常政石原竜助近高を以被補之御役料米三拾五俵被成下候処同月十九日御役格被相替左の通被仰渡候

一御鳥見頭 一六人賦 一御役順御鷹匠頭次

右の通御役名新規に被相立御側支配被仰付候勤方御鳥見同前にて御鳥見取次野留綱元支配被仰付候条諸事如例可被申渡旨御差図にて候以上

安永七年戊
正月十一日

佐久間九十九

御鳥見頭

右者御役順御鷹匠頭上被仰付候条如例可被申渡旨御差図にて候以上
安永七年戊正月十九日

山川 司

御鳥見頭格

天明元年辛丑正月初て被相建谷村孫右衛門純章を以被補之御鳥見勤兼被仰付同年五月左の通被仰渡候

一御鳥見頭格 一六人賦

右之通先達て御役被仰付御役順の儀は御鳥見頭次に被仰付候条此旨可承御役々々可申聞置候

天明五年

五月

仲

山下

御鷹匠頭

初名御本丸
御鷹匠頭

天明元年辛丑五月初て御本丸御鷹匠頭御役被相建御小納戸役並佐久間五十賀村賢を以御小納戸役御本丸御鷹匠頭兼務に御鷹匠頭尾畔毛利善助元

珍か
口を御本丸御鷹匠頭に被仰付候左候て御役順の儀左の通被仰渡候

御本丸
一 御鷹匠頭

尾畔
一 御鷹匠頭

右之通御役名被相建候条此旨可致通達候

天明元年

五月

大進

同二年壬寅六月御本丸御鷹部屋事山下御鷹部屋と相唱御鷹匠頭を初其外役名等御本丸と有之候処を山下と被相替候旨被仰渡候

尾畔
御鷹匠頭 初名尾畔御飯屋守尾畔奉行

初名尾畔御飯屋守と相唱申候尾畔御飯屋誰様御代被召建候儀相知不中候最初肥田某 名字 御飯屋守相勤候処万治元年戊戌十二月宮内源内御飯屋守被仰付引移相勤申候然正徳二年壬辰正月尾畔御飯屋守御役料は依人時々御見合次第可被下旨被相建同三年癸巳正月尾畔奉行と御役名被相改安永六年丁酉五月御鷹匠頭尾畔領と被相替其後山下御鷹匠頭被召立候付天明元年辛丑五月御本丸御鷹匠頭尾畔御鷹匠頭と御役名被相建候

御同朋頭 初名御茶道頭
初は御茶道頭と相唱申候宝永五年戊子九月於江戸始て長瀬万阿弥を御茶道頭被仰付六人賦御切米十五斛被成下格式の儀は御側御医師同前に被仰付候段御数寄屋帳面に相見得候由其後何比より当分の御役格被相替候儀不詳候正徳二年壬辰正月御茶道頭御役料の儀は依人時々御見合次第可被下旨被相定候其節の書付には最早当分通の御役順に相見得申候明和七年庚寅七月御役名於江戸御同朋頭と被相改候段被仰渡候

御鷹匠頭附
御茶道頭

天明七年丁未正月被召置同年二月奥御同朋福崎阿弥正興を以被補之御役料銀三枚三拾式匁被成下之琢寿と改名被仰付候

御膳所御附 御茶道頭 一御同朋頭次可罷在候

右の通新規に御役被相立候旨申来候条可承向々え可申渡候

天明七年未

正月

安 房
主 膳

御記録方添役

寛保元年辛酉十二月始て被相建御記録方稽古安藤佐平次茂高吉田用右衛門清純日高甚兵衛為常を以被補之左の通

一御記録方添役 一六人賦

安藤佐平次

吉田用右衛門

日高甚兵衛

右之通此節被相改添役被仰付諸奉行格にて中通被仰付候左候て御記録奉行連名にて申出候書付等には右添役も致連名候御役人帳磯奉行の次被載置候

寛保元年酉

十二月

右の通申渡首尾係にも可申渡候

織 部

御記録奉行え

此節御記録方添役と申役名新規に被仰付此内稽古被仰付置候安藤佐平次吉田用右衛門日高甚兵衛御記録方添役被仰付六人賦被下諸奉行格にて中通被仰付候御役人帳は磯奉行の次に被仰付候左候て御記録奉行連名にて申出候書付等には添役も可致連名候向後共に添役被仰付候人右三人同前被仰付管候御記録方稽古被仰付候人は添役同前には不被仰付候右の連名も不致管候間此段申渡候様可申渡候

西

十二月

織 部

御作事奉行見習 初名御普請奉行見習

安永四年乙未六月始て被相建松崎次左衛門貞備を以被補之御役格左の通御座候

一御普請奉行見習 一六人賦、松崎次左衛門

右の通今日御役被仰付御役順之儀は御記録方添役次唐船方受込上に被仰付候条諸帳面如例可被申渡候此旨伊織御差圖にて候以上

安永四年未

六月廿三日

榊山權右衛門

同年七月窪田孫右衛門盛尹右御役被仰付候節御役料米三拾五俵被下之候其後天明三年癸卯十月御普請奉行の御役名を御作事奉行と被相改候故御普請奉行見習も御作事奉行見習と相唱申候

物奉行見習

安永六年丁酉正月始て被相立芦谷市助時房小田善兵衛為章を以被補之御役格左に相見得申候

一物奉行見習 一六人賦

芦谷 市助
小田 善兵衛

右之通於江戸当正月十一日御役被仰付御役格御普請奉行見習次に被仰付候旨此節申来候条如例可被申渡旨造酒殿御差圖にて候

安永六年酉

二月十九日

大 野 多 宮

其後寛政二年庚戌吉井新右衛門泰処此御役被仰付候節御役料米三拾五俵被下之候

一御馬預見習

寛政元年己酉十二月始て被相建西郷八郎次房侶え被仰付候御役料米三拾五俵六人膳料被成下御役格左の通被仰付候

一御馬預見習 一御役各順番物奉行見習次

一支配並勤方御馬預同前

右之通新規に被相建候条此旨表方え致通達與掛御勝三方えも可相達候

寛政元年酉

正月

吟味役並考役 当時無之

右 膳

吟味役は御勝手方え相付相勤候筋相見得候何比より被召建候儀相知不申

候松崎仁右衛門系國松崎采貞悦伝記に万治三年庚子八月朔日蒙 嚴命御家老鎌田源左衛門政有御物方為諸司御使衆堀四郎右衛門興延平山藤右衛門宗則被相承此時諸事為吟味之役相勤平同役赤松宮内左衛門有馬治右衛門伊藤孫右衛門也と書記候然則宝永七年庚寅三月始て國分惣左衛門友貞山口喜三左衛門重共大河平源助薩元へ考役被仰付候節右御役新規被仰出候御金方御用相勤余事の儀は申付問敷格式は此内の通吟味役の格と堀甚左衛門へ相付相勤候様被仰出御扶持銀拾枚つつ被下御礼所の儀は吟味役御礼所同前可仕申被仰出候正徳二年壬辰正月考役御役料の儀五拾石以下銀八枚可被下旨被相定候節申取の頭に御役順相見得申候同三年癸未八月考役を算用役と唱被相替唯今迄勤候は此内の格式にて新役より小役人の格に格式被相下御勝手方筆者の内より申付御扶持米筆者同前可申付旨被仰付候其後天明六年丙午七月吟味役と役名被相改候

唐船改 初名異國座申取 唐船方受込

始は異國座中次と相唱申候元録二年己巳閏正月四元休左衛門忠昭此職に被補候其以前所見無御座候正徳二年壬辰正月申取 此年迄は唐船改寺社方取と相唱 の儀五拾石以下御役料銀八枚可被下の旨被相定同三年癸己十二月唐船方受込と御役名被相改安永七年戊戌五月唐船方と被相替其後天明三年癸卯二月唐船改と唱被相改候

附録

唐船奉行

上代には異域の商船御領内へ致渡海候儀自由相調候故坊津京伯等の港口を毎々唐船其外諸國船渡米商売仕候依之唐船奉行被定置異國船致米著之節其浦々え差越諸改端且御用物買入方の差引仕候處慶長八年本田助之丞親貞五代右京入道友慶唐船奉行相勤候付 義弘公御家老伊勢平左衛門貞成条書有之同十一年 同公より 家久公え被為贈候御書の内唐船奉行の事無油断可被仰付置之由三十日以前より紹益え申渡候得共未被仰付候由承候笑止の至候惣別當國の事は唐船若座の刻も奉行緩候故側よりせらるゝにあきはてしよし及承候条左様無之様頼以条書可被仰付之由紹益

え申渡候と有之寛永三年の日記に唐船御扱の事に付當年奉行山田民部少輔相究候事と相見得同七年吉田次郎兵衛伊東駿河同十二年新納加賀頼娃長左衛門唐船奉行相勤候段旧記の内に散書仕候尤寛永の比迄は諸御役共に格式屹と相定不申筋相見得申候得は唐船奉行連も御役格等細かには相知不申候且又前文の趣を以は唐船來着の御に相成候得は前以年々唐船奉行被相究候様にも相見得候得共是以詳成儀相知不申候當時の唐船改とは相替候得共其職掌相類候儀も在之候故此に附録仕候

寺社方取次 初名寺社座申取

初は寺社座申取と相唱申候或は寺社奉行所申取と在之候寛文八年戊申正月野村助左衛門を以始て被補此職候其後一人役にて御座候延宝三年乙卯九月兩人に相成貞享三年丙寅八月今一人被相重漸々人数不同罷成候正徳三年癸巳八月寺社方取次と唱被相替候享保の初迄は寺社奉行所取次又は寺社所取次と書記候も同々相見得候天明三年癸卯二月寺社方取次と相唱候様被仰渡候其以前は方の字をほうと相唱申候

御勘定方小頭 初名勘定所申取

初は御勘定所申取役と相唱申候宝永四年丁亥十二月平田治左衛門宗賀伊地知重左衛門重許をを以被補此職候其以前所見無御座候御勘定奉行の儀右同年同月より格別に御役格被相替候故其初より始て申取被相建候半と相考申候正徳三年癸己八月御勘定方小頭と御役名被相替方の字をほうと唱來候處天明三年癸卯二月御勘定方小頭と相唱候様被仰渡候

附録

御勘定方吟味役

此御役享保の御より同季迄有之候御役格御勘定方小頭の次にて五人賄料被成下候筋相見得申候其外不詳候

御築園奉行

寛政四年壬子十二月初て御築園奉行御役被相建御庭奉行大田筑左衛門用當表御小姓村田藤之助常陶を以被補之御役料米二十七俵被成下御役格左の通被仰渡候

一御築園奉行 御役順御勘定方小頭次 一奥支配

右の通御役新規に被相建候条此旨可致通達候

寛政四年
十二月

勘解由

御庭奉行 磯奉行

御庭奉行の儀天明三年癸卯十月初て被相建御役格左の通被仰渡候

一御庭奉行 一御近習通 一五人賦

一御役料米式拾七俵 一御役格御勘定方小頭次御代官上

右の通御役被相建人物の儀は追て可被仰出候条此旨表方え致通達與掛御勝手方えは写を以可相達候

天明三年
十月

左 中

同年四月相良一郎兵衛常政を以始て御庭奉行御薬園掛被仰付候磯奉行の儀は天明六年丙午七月新規に被召建御庭奉行加役に被仰付左の通被仰渡候

磯奉行

右御役此節被召建候条此旨表方え致通達與掛御勝手方えは写を以可相達候

天明三年
七月

安 房

御庭奉行

右磯奉行加彼被仰付候条磯御茶屋並御庭其外相掛候儀共都て可致受持候左候て平日磯へ不及相詰に御用の節に差越可申候

右の通申渡可承向々えも可申渡候

天明六年
十月

安 房

附録

延享以前の磯奉行 初名磯御飯屋守

磯御屋敷は元来鎌田出雲政近え被下置候大磯下津浜門山下尾敷と申地に御座候処寛治元年戊戌御用地相成御飯屋被召建候寛文三年癸卯の比龜山

太夫カ本ノママ

八郎大夫と申人磯御飯屋守相勤儀相見得申候然最初より右八郎兵衛え被仰付置候哉分明相知不申候正徳二年壬辰正月磯尾畔御飯屋守の儀御役料依人時々見合次第可被下之旨被相定同三年癸巳正月磯奉行と唱被相替候其以後吉貴公御隠居後儀え被成御座候付磯奉行の人数被相重候処延享四年丁卯十月御逝去被遊候故磯奉行相勤候而々都て依願退役被仰付磯奉行格には周防殿三次郎殿抱守被仰付候面々も御役被差免六人賦の諸奉行格に被仰付右両御方え被附置候左候得は磯奉行の儀其節迄にて被相替候節御座候尤御役格の儀最初より磯尾畔御飯屋守と在之候得は右両職は同格にて正徳二年御役料被相定候書付にも御茶屋頭の上に磯尾畔御飯屋守尾畔御飯屋守は今の尾畔御飯屋守に御座候と御役順被載置候左候得は御同朋頭 御同朋頭は上文の頭に可罷在之処寛保元年辛酉十二月御記録方添役新規に被召建候節は最前御役格御茶屋頭次と被載置候無程改て磯奉行の次に被載置候段被仰渡今以御記録方添役の儀御同朋頭御茶屋頭の下に御役順在之候此儀を以は磯奉行の儀御同朋頭の下に被召建候哉乍然御記録方添役の儀右通御役順被相改候ても最初御茶屋頭の次と被仰渡候儀自然と相後れ右通の御役順相成居候ても可在御座候不審に御座候然共右磯奉行の儀六人賄料の御役にて大体右前後の御役順にて候儀は別条無御座候

尾畔奉行

天明四年甲辰初て被相建赤崎丹四郎兼明を以被補之御役格左の通被仰渡候

一尾畔奉行 一御役順御庭奉行次 一奥支配

右之通御役新規被相立是迄鷹匠頭受持罷在候御用向の内御鷹方え相掛候外は都て引受被仰付候左候て宮内源内是迄罷在候居宅尾畔奉行御役宅被仰付引越相勤候様被仰付候

右之通表方え致通達與掛御勝手方えは写を以可相達候

天明四年
十一月

近 江

御島預頭取

御島預頭取の職掌已前には無御座出候処天明三年癸卯十一月御島見梅北

権五郎兼則事御鳥見頭格御庭方御鳥預頭取勤被仰付候其後園田喜領吏益
村田孝右衛門経容御鳥領頭取新番被仰付候延寛政元年己酉閏六月御役被
召立左の通被仰渡候

一御鳥預頭取 一御役料米二拾五俵 一勤方は迄の通

村田幸右衛門

右の通御役被仰付御役料米被下置御鳥方の儀は猶以可致精勤旨被仰付候
段今日被仰渡候条如例被仰渡候様可被申渡旨大炊殿御差図にて候以上

寛政元年四月
六月六日

谷村孫右衛門

一御鳥預頭取 一御役順尾畔奉行次 一奥支配

右の通御役新規に被召建候旨被仰出候条可承面々え可申渡候

寛政二年
二月

石 見

御膳所頭

天明五年乙巳正月於江戸石見伝右衛門周則を以始めて被補之此職御役料米
五拾八俵被成下御役格等左の通被仰渡候

御膳所頭

右御役新規に被召建御役格尾畔奉行次五人賦被仰付候向後御規式事其外
御招請等の重立候御式の節計り御膳所へ罷出相勤尤御常調方は不及相勤
日勤にも不及候
右の通被仰付候旨申来候条此旨可承面々え可申渡候

天明五年
二月

近 江

表方御代官

御代官之儀は年代久敷有之候職掌にて候方治二年の記録を按ずるに御郡
代方取納奉行御国仕方代官とて有之御郡代方に日州与南与山水与の三組
有之是を三組代官と相唱 三組代官の儀慶長 御国仕方代官に誦姪組加世田
与の二組為右御座筋相見得申候右同職の惣名を五組代官座と相唱候由

寛文十年以来は日州組南与山水組迄にて三組代官と相唱一組に兩人つつ
相勤候延天明二年迄至り兩人被相減四人にて拾式方右御蔵入代官相勤候
様被仰付右三組代官の儀を表方代官と相唱候延天明六年丙午七月代官の
事御代官と被相改候段被仰渡候尤正徳二年壬辰正月代官御役料の儀持高
五拾石以下には銀八枚可被下旨被相定候

帖佐与御代官 初名新田方代官附録郡座附代官帖佐与代官

寛文五年乙巳郡座付代官被相建伊東孫左衛門祐豐齊里五右衛門正行を以
被補之同十一年辛亥より帖佐与代官と相唱候然延宝三年乙卯三月帖佐
与にて新田古田と二組に相分り国分組の新田八千七百五拾石余帖佐与え
被召附候其後天明三年癸卯十二月古田新田相混勤役被仰付候左候て貞享
四年丁卯十一月新田代官坐被相建帖佐与代官東郷伴右衛門重伏を以新田
方代官被仰付置元録八年乙亥五月帖佐与代官被相疊右新田代官坐に被召
付同年十一月新田代官を帖佐与代官坐と可相唱旨被仰渡候

御台所頭 初名御台所代官

天正八年の比御陣職に御台所代官相見得申候元録年鑑迄は御台所代官と
相唱申候何比より御台所頭と被相改候儀不詳候正徳二年辰壬正月五拾石
以下御役料只今の通被仰渡候付相札申候以前には御役料七拾石被下置
元録年鑑五拾石に相成宝永正徳の比より十五石被成下其後元文三年六拾
五俵宝暦二年以来六拾三俵に相成候段御台所頭より承申候正徳二年には
最早御台所頭と相見得申候

客屋評定所預御番屋役 初名客屋代官

最初は客屋代官と相唱申候 家久公御代より相見得申候宝永七年庚寅三
月客屋の儀向後御番屋と相唱客屋代官の儀は御番屋役と唱可申候御使者
有之節は客屋預と相唱候様被仰渡正徳二年壬辰正月御役料の儀持高五拾
石以下御切米六拾五俵被成下候旨被相定候

奥御小姓 初名御側御小姓

義久公御代より御小姓の名目は相見得申候其後表御小姓をも被相立候て
大より御側御小姓と分て相唱候筋と相考申候得共詳成儀相知不申候安永
九年庚子七月御側御小姓を奥御小姓と唱被相改候

附録

御小納戸見習

天明六年丙子九月奥御小姓早川清次道兼を以始て御小納戸見習被仰付其後左の通被仰渡候

奥御小姓の内より以来御小納戸見習被仰付候座席は奥御小姓上席に可罷在候尤格式は不相替六人の賄料迄被可下旨被仰出候条可承面々え可申渡候

天明六年壬子十月

主 膳

御近習番

御近習番の儀已前には奥御小姓の内相勤申候処安永九年庚子七月別立御役被相立御御小姓志岐藤右衛門親歌肥後太郎右衛門盛香中村八兵衛茂甫山本孫右衛門盛客和開新吾正器を以被補之左の通被仰渡候

御近習番

右は是迄御側御小姓の内より被差分置候以来右の通御役被相立御側御小姓同格表御小姓上に被仰付候旨被仰出候段江戸より申来候此旨可承面々え可申渡候

安永九年八月

大 進

表御小姓

表御小姓の御役名上代所見舞御座候寛永十七年の記録に表小姓四人賦にて節々の衣裳給候と相見得申候其外不詳候

御裁許掛見習 初名紀明方見習

宝暦四年甲戌五月木場休右衛門員常に初て紀明方見習被仰付御役人帳表御小姓次御小姓の頭に被載置候旨被仰渡候其後紀明方の唱段と被相替儀御裁許掛場に相記申候

郡奉行見習

天明元年平丑五月被相立深見休右衛門在友有馬七郎右衛門純常鎌田源八政胤を以被補之左の通被仰渡候

郡奉行見習

右の通御役新規に被相立御役順の儀御裁許方見習次に被仰付候右の通奥

掛表方え相達可承御役々へ可申渡候

天明元年閏五月

主 計

一郡奉行見習 一四人賦

深見休右衛門
有馬七郎右衛門
鎌田源八

右の通今日被仰付候条諸帳面等如例可被申渡旨主計殿御差図にて候以上

天明元年平丑五月十一日

大野隼人

御小姓 初名御奥小姓 奥御小姓 大奥御小姓

義久公 義弘公御代に小々姓と相唱候職相見得申候今の御小姓の場にて可在御座と相考申候其後にも右唱相殘候哉明曆二年の書付に小々衆廿一人の内五人は前髪取云々と相見得申候年然寛永七年の旧記には御奥小姓三人賦にて年中銀子式被下候と有之近代には奥御小姓と相唱来候処安永九年庚子七月大奥御小姓と被相改天明六年丙午七月御小姓と御役名被相定候

奥医師 初名御側医師奥御医師

初は御側医師と相唱申候御役の内被召加候儀何年鑑の儀御座候哉相知不申候安永九年庚子七月奥御医師と御役名被相改候処天明七年丁未七月奥医師と相認候様被仰渡候

御数寄屋頭 初名御書院役人御書院方預り

初は御書院役人と相唱申候始て被召建候年鑑不詳候明曆三年丁酉二月島津圖書久通町勘解出久則書状の内役人坊主宅人可被相列由候得共余り無人数にて候間今一人も可中付哉爰元相談次第と御座候付致相談候一人にて役人いたし候はは御事欠の儀在之と存而人申渡候と有之候右役人坊主を後には御書院役人と相唱申候半と相考申候元録年中に至り候ては最早御書院役人と相見得申候安永七年戊戌五月御書院方預りと御役名被相替其後天明五年丁巳正月御数寄屋頭と唱被相改候

奥御同朋 初名御側御同朋

野間為阿弥忠政事 一瓢様 相州家三代 御同朋相勤忠政孫野間為阿弥政方
事將軍家の御同朋歳阿弥と申者え相付同朋筋の根源御座飾等の儀都て伝
授を受候段旧記に相見得申候得は御家にて昔より御同朋為被召置善御
座候左候て御同朋と迄相唱候如何様後年に至り御側御同朋表御同朋と
職掌相分り候半敷詳成如相知不申候安永九年庚子七月御側御同朋を奥御
同朋と唱被相替候

表御同朋

以前には表御同朋の御役名相見得不申候愛甲嘉阿弥季貞事享保四年己亥
十二月表御同朋御書院役人同前の勤被仰付候此節より始めて被相立候筋に
ては有御座間敷哉詳成儀相知不申候

奥御茶道 初名御側御茶道

初は御側御茶道と相唱申候始て被召立候年鑑相知不申候御数寄屋にては
此職 古貴公御代に相始候と申伝候得共不詳候安永九年庚子七月奥御茶
道と唱被相替候

追考 元禄十四年辛巳十二月 鍋三郎様 御書院 御七夜御祝いに付進上物
被仰付候御役々の内御側茶湯福崎惣菜鍋倉固齊永瀬万悦西川権吉と有
之候御側茶湯は御側御茶道にて可有御座候右年鑑迄は 綱貴公御家督
内にて御座候故御数寄屋中伝誤候哉

小坊主 初名御側小坊主

初は御側小坊主と相唱申候始て被召建候年鑑相知不申候享保九年申辰
五月上原兎角通次事此職被仰付候御側小坊主初て被仰付候節は入付支度
料銀壹枚式拾壹匁被下候旨御書院支配証文に相見得申候得共其以前より
為在之御役に相見得申候御役名今は小坊主と被相用候

御記録方見習 初名記録所見習御記録方見習

伊地知助右衛門重英事延宝五年丁巳御文書見合被仰付同八年庚申見合相
濟御記録所に相話見習可申旨是即御記録方見習の始にて御座候其後市來
源右衛門政香肥後仁右衛門盛香事元禄四年辛未二月御記録所見習被仰付

政香事六人賄料にて江戸詰をも被仰付候川上平右衛門親央御側御小姓
にて御記録所見習其外或は御側御小姓又は無役中通にて御記録方稽古被
仰付四人賄料御扶持米式拾五俵被成下候如安永四年三月御記録方稽古の
儀御役順小坊主の次に被相定置天明三年癸卯十月御記録方見習と御役名
被相改候

御右筆見習 初名御右筆稽古

平野次郎兵衛友重事貞享二年乙丑御右筆所習学相勤候由自家記置申候御
右筆見習の儀其以前には所見無御座候然其右友重より相始為申にて有
有御座候是又御記録方見習同様近代迄は御側御小姓表御小姓或は無役中
通にて御右筆稽古被仰付四人賄料三拾四俵被成下候如安永五年丙申三月
御役格御記録方稽古の次被定置天明三年癸卯十月御右筆見習と唱被相替
候

助教 初名講堂學頭

安永六年丁酉六月講堂學頭御役被相立長崎鉄之丞道喬を以被補之左の通
被仰渡候

講堂學頭 一中通但座順之儀は御右筆稽古次

右の通御役被相立候条此旨可承御役々々可致通達候

六月

左 中

一講堂學頭 中通 一御役料米四拾俵 一四人賦

但座順の儀は御右筆稽古次被仰付候

長崎鉄之丞

右之通御役被仰付聖堂方諸御用向其外都て此内の通相勤尚以学文方致出
精往々御用立候様可相心得候

右の通今日御役被仰付候条如例可被中渡旨左中殿御差圖にて候以上

安永六年四月
六月十八日

平田平太左衛門

其後天明元年辛丑六月御役料米相重都合七拾五俵被成下同六年丙午十月
助教と御役名被相改候

助教格 初名講堂學頭格

天明四年甲辰 五月脇田仁左衛門貞文へ始て講堂学頭格被仰付御役料米四拾俵被成下候

御曆者

安永八年己亥十二月始て御役被相立水間喜八良実を以被補之左の通被仰渡候

一御曆者 一御近習通 一四人賦 一御役料米八石

水間 喜八

右此節明時館御建立に付右の通御役被仰付席之儀は講堂学頭次御鷹匠頭兄習上被仰付候

右の通今日御役被仰付候条如例可被申渡旨帶刀殿御差図にて候以上

安永八年亥

十一月廿八日

島津 登

御鷹匠頭兄習

安永六年丁酉 五月始て被相立宮内源右衛門安富を以被補之左の通被仰渡候

御鷹匠頭兄習

御役料米貳拾七俵

宮内 源右衛門

右之通今日御役被仰付御役料米被下置御役格の儀御右筆稽古次にて四人賦被仰付勤方本役同前御用筋相勤中通被仰付諸書付等連名相認候様被仰付候条諸帳面等如例可被申渡旨御差図にて候以上

安永六年西

五月廿七日

鎌田 愛太夫

原書以平川宗高本写之

明治二十年十月一日

筆者

中原 四郎兵衛

同

津留 半蔵

同二十一年二月廿七日

糾合

児玉 五兵衛

同

五代 徳夫

(原表紙)

御家譜

(原寸縦二五・八糎、横一八・八糎)

御家譜

元祖

○忠久公 三郎 左兵衛尉 左三門尉 太夫判官 豐後守 從五位下

○治承三年己亥牛旗州住吉以他腹不為家督

○元曆二年乙巳六月十五日於鶴岡元服品山重忠加冠^七任左兵衛少尉稱

忠久 楊作の刀を賜ふ

是日賜伊勢國須可御庄波山御殿地頭職

○同年八月十七日為島津御莊下司職

(朱書) ○文治二年正月八日賜信濃國塩田莊地頭職

○公之初生也畜於藤原基通之家已而畜於惟宗公言之家因冒惟宗氏公至是改藤原氏

○近衛基通公為契子故承久三年六月用藤原姓

○同年春為島津御莊總地頭職^{薩摩日之總領}因賜島津氏及十字家紋八月二日下

着山門院^八入木牟礼城建感応寺及稻荷社於山門院

○同五年己酉引兵会鎌倉七月頼朝擊泰衡崩山重忠奉公為先鋒^{十一}是歲

以外弟兵衛尉忠季為守護代

(朱書) ○為若狹國守護職

○建曆三年癸酉五月七日賜甲斐波加利新莊實和田合戰之功公使其子掃部助忠直領之

○建保六年戊寅建花尾椎現社於滿家院厚地村使水金阿闍梨領其事因建

平等王院^{中付}三十六坊

○承久三年七月十二日為越前守護職 公使其子周防守忠綱為守護代

○承久三年七月十八日為信濃國大出庄地頭至貞久公領之

○嘉祿三年丁亥六月十八日辰刻逝鎌倉四十九得仏道阿弥陀仏淨光明寺殿

御母

丹後局 比企判官能員妹安貞元年朱銀十二年十二月逝葬花尾山朱銀

再嫁八文字民部大輔広吉中付

御夫人

貞藏夫人 白貝藏夫人至稱林夫人五國夫人 御牌無之享保十二未十二月淨光

明寺寂翁依願法名道号 御牌淨光明寺江御安置

御連枝

一女子 志水冠者 義隆室

三頼家 一万 左兵衛尉 從一位征夷大將軍

四貞曉法印

五女子 一幡 乙姫

六実朝 千刀 正二位右大臣 征夷大將軍

七忠季 若狹島津三万兵工尉母比企氏父八文字氏部大輔惟宗公言

二女

○忠時公 初忠義 三郎兵衛尉 左兵衛尉 左三門尉 修理亮 大隅守

○建仁二年壬戌生

○承久乱隨北条泰時有功宇治川

○承久三年辛巳八月二十五日為越前生部莊及久安保重富地頭

○同年壬子十月十五日為伊賀長田鄉地頭

○貞應二年六月六日為近江興福寺地頭

○同三年九月七日為讚岐無保地頭

○嘉祿元年乙酉七月三日為信濃津之鄉地頭代職

○仁治三年二月二十二日転生部莊為和泉和田鄉地頭

○文永九年丁申四月十日逝七十一道仏仁阿弥陀仏

御母堂

貞巖院殿元光明一房 崑山正忠第六女十一月朔日

御夫人

得台院殿慈西生一房

御連枝

二忠綱

越前島津四郎左五門尉用守為守
襲代居越前白嘉禎至弘長近習鎌倉

三忠直

四女子

五女子

二子

久經公

初久時 修理亮
下野守

○嘉祿元年乙酉生
○建治元年必將軍惟康命警固筑前宮崎役所弘安四年代蒙古人有功

○弘安七年甲申四月二十一日逝篤崎役所六十道忍義阿弥陀仏

御母

得台夫人

伊達判官入道念性妹
宇忍西正月廿三日

御夫人

淨溫院殿妙智神一房

御連枝

一忠繼

出田式部少輔長庶子
山田家祖

三高久

中沼大炊助法名教仏居信州

四女子

三浦四良式部大夫家村室為尼号忍寛

五忠康

式部少輔

六忠佐

左衛門尉

七久時

阿蘇谷大炊助羽月士阿蘇谷氏祖

八忠經

五郎常陸守 町田五郎太郎
其子忍光

九久氏 七郎

四代一

○忠宗公 三郎左五門尉 下野守
上總介

○建長三年辛亥生

○国務之余刀嗜歌道

○文保元年丁巳十二月廿一日賜日州高知尾莊肥前松浦莊之内早湊同國

福乃名

○正中二年乙丑十一月十二日逝七十五道忍義仲阿弥陀仏

御母

淨溫夫人

相馬小次郎左五門尉胤綱第二女
為尼号妙智八月廿二日

御夫人

理玄院殿惠照見一房

御連枝

二久長

伊作初忠長兼壽丸彦三郎左五門尉下野守
大隅守法名道意伊作家祖

三女子

センス御前

五代

○貞久公 三郎左五門尉
上總介

○文永六年己巳生

○正慶元年十二月一日賜周防楊井莊

○元弘三年五月廿五日与大友小式等亡探提英時

○属尊氏自元弘至延文廿余年攻城野戰不可勝計

○建武元年二月廿一日光嚴帝賜豐後井田鄉地頭

○貞治二年癸卯七月三日逝九十五道鑑道阿弥陀仏 以上五公淨光明寺

殿

御母

理玄夫人

名々御前三池至助入道管女
四月十日

御夫人

梅林院殿法麗聞一房

御連枝

二忠氏 和泉

三忠光 佐多

四時久 新納

五資久 桃山 入道明見

六資忠 北郷

七久恭 石坂

八女子 阿久里

九女子 伊作大隅守守久室

○野田感應寺自忠久公貞久公迄之御石塔アリ忠宗公貞久公御牌モ有之

三

○師久公

生駒丸 上總 三郎左門尉 大夫判官
從五位下 上總介 總州家

○正中二年乙丑八月十六日生

○兄宗久公早世故分讓薩隅而國守護職及庄園師久公氏久公故為薩摩國

守護職居旋山城

○永和二年丙辰三月二十一日旋山城逝五十二定山道貞 御牌在称名寺

御母

梅林夫人

大友因幡親時入道道徳女
七月九日

御夫人

得祥法瑞明一房

御連枝

一頼久 川上祖他腹

二宗久

生松丸三郎左門尉太判官元享二年壬戌生
母同前曆三年庚辛正月二十四日早世十九
久阿弥陀仏

五光久

四郎左門尉寿山為公屬西征將軍官
有功

六氏忠 乙寿丸但馬守

七女子 祖馨房

八女子 京子

九女子 彌々

四

○氏久公

又三郎 三郎左門尉 修理亮
越後守 陸奥守 奥州家

○喜曆三年戊辰生

○為大隅守護職在城鹿兒島後移大始良又志布志

○觀應二年九月廿八日筑前金隈合戰將三州兵屬一色右馬頭範光有功蒙

疵尊氏賜感懷其後与師久公伐國賊至永相二年三州差属治平

○嘉慶元年丁卯閏五月四日逝六十齡岳玄久即心院殿

御母

梅林夫人

御夫人

敬外欽公大姉

伊集院長門守忠國入道道忍女

七代

○元久公

又三郎 陸奥守

○貞治二年癸卯生大始良

○至徳年間去志布志移鹿兒島本城

○明徳四年上總介伊久以忠久公以來相伝之

小十文字太刀同鑑献公

○応永元年甲戌建福昌寺

○同十七年上京謁將軍義持六月二十九日將軍渡御公之亭同九月帰国

○同十八年辛卯八月六日逝四十九忽翁玄忠福昌寺殿

御母

敬外夫人 伊集院長門守忠國入道道忍女

御夫人 其父之姓名不詳

久山妙榮大姉

御子

守邦 梅壽仲翁和尙福昌寺三代康暦元年巳未生

文安二年乙丑六月七日化六十七

女子七人共尼

女子 伊作四郎左衛門尉勝久妻

○アヒル馬場古普長谷場小路ト云下手堂ハ佐竹源左衛門屋鋪内ニ在リト云

八代

○久豊公 南殿 次郎三郎 修理亮 陸奥介

○永和乙卯 生鹿見島城

○元久公一子守邦出家故元永十八年公没後自立為家督

○元永三十二年乙巳正月二十一日逝五十一歳義天存忠惠灯院殿御母

夫人 佐多三郎左衛門尉忠光女
御夫人

後御夫人
寿山妙久大姉 伊集院彈正少弼賴久女

寛政元年万壽云伊集院家御系統系図ニ山ト

御連枝

女子 伊集院彈正少弼賴久室

九代

○忠国公 初君久 虎寿丸 又三郎 修理大夫 陸奥守

○元永十年癸未 五月二日生穆佐高城

○奉將軍義 命誅大覺寺門跡大僧正義昭福島永徳寺献首幕府義教賞之賜琉球及宝刀腹巻駿馬

○文明二年庚寅正月廿日逝薩州別府六十八大臣玄普深固院殿御母

寿山夫人 伊東大和守祐安女

御夫人

心卒開安大姉

御連枝

用久 初好久持久薩摩守薩州家祖母同上

季久 修現亮豊後守越後守豊州家母上原氏

有久 出羽守大島家母伊集院賴久女

豊久 初忠豊伯善守義岡家

倍

女子四人

宗津 天祐和尚福品寺十一代母山下入道女

十代

○立久公 安房丸 又三郎 修理亮 陸奥守

○永享四年壬子十一月五日生

○文明六年甲午四月一日逝四十三節山玄忠龍雲寺殿御母

心卒開安大姉 新納近江守忠臣女

御夫人

寛政元年万壽云妙田大姉ハ公前御夫人伊東大和守祐安女ト振留有之吉利家系図大姉ハ薩摩守用久女ト妙田妙才御夫人之外今一夫人有故ニ妙田大姉誰人之女ヲ不詳ト云

鏡堂妙田大姉

茂山妙才大姉

御連枝

女子 伊集院大朝守繼久室母同上繼久没後為尼建大徳寺住之

女子 薩摩守用久室母同上

女子 新納近江守忠統室母同上

友久 又太郎右馬頭相模守母伊作四良左エ門尉勝久女領阿多田布施高橋居田布施天勇玄機常珠寺殿

久逸 初久俊龜房丸又五郎式部大輔河内守母忠臣女統御作家

勝久 又七郎遠江守後亮心改玄甫阿水和尚桂氏

忠経 初清久七良三郎伊予守母忠臣女追水

守棟 桂山和尚福品寺九代母伊集院信濃守女

女子 修理亮忠康室母松元入道女

忠弘 五郎三郎若狹守母忠臣女喜入

女子 出羽守忠德室母松元入道

早世

賴久

初篤久又二郎右馬頭撰津守兄忠弘卒
子忠善幼故与賴久賴久使忠善為賴久
之嗣母松元入道女

英切

胡月和尚広濟寺住持母飛彈入道女

十一代

○忠品公

初武久 又三郎 修理進
陸奥守

○寛正四年癸未五月三日生

○文明六年元服十二歳八月十九日

○永正五年戊辰二月十五日夜半於鹿兒島清水宅自殺四十六門室源繁興

国寺殿

御母

茂山夫人

梶原三郎太郎弘純女文明十七年
乙巳十一月十七日

御夫人

天真妙香大姉

殉死

奈良原助八

十二代

○忠治公 安房丸 又三郎

○延徳元年乙酉正月十七日生

○文龜三年元腹十五

○永正十二年乙亥八月二十五日逝二十七蘭窓津友津友寺殿

御母

天真妙幸大姉

大友豊前守政親女

御夫人

伊東大和守伊祐女

寛政元年万調云改遷系譜
及九州御大名様方御由緒書ニ
出御法名御死去年月不相知ト

○忠隆公 百房丸 又六郎

○明応六年丁巳八月十四日生

○永正十二年兄忠治早世故為守護職

○同十六年巳卯四月四日罹變疹病逝二十三興岳盛庵盛院殿

御母

天真夫人 大友豊前守政親女

十四代

○勝久公

初忠兼後義忠 宮房丸 又八郎
八郎左門尉 修理大夫 陸奥守

○文龜三年癸未八月十八日生初賴桂氏為猶子而兄早世故去賴桂氏為守

護職

○大永六年十一月廿七日讓守護職虎寿君居鹿兒府

○翌年四月十五日隱居伊作同廿九日祝髮

○同年六月廿六日再入鹿兒府

○享祿元年改勝久

○天文三年被却突久奔称親翌年四月還鹿兒府

○同四年乙未十月十日為実久没落鹿府奔帖佐

○同五年適真幸徳北原某居般若寺有年後請北郷氏謀復入鹿府數年雖住

庄内郡城不応之終奔豊後居神浜

○天正元年癸酉十月十五日逝沖浜七十一大翁妙蓮

御母同前兄

御夫人

天室真光大姉

称慶式部大輔重就女

寛政元年万調ニ云小松
家系圖ニ出御法名及御逝
去年閏不相知ト

御子

忠良 修理大夫生鹿府

久孝 三郎左衛門尉生般若寺

又四郎 実名關生豊後

宗俊 同上

△忠良公 伊作又四郎善久子 幼三郎 三郎左門尉
相模守 口新斎 忠谷軒

○明應元年壬子九月廿三日生三歲喪父為相模守連久猶子領伊作田布施
阿多高橋

○永祿十一年戊辰十二月十三日逝七十七梅岳常滿在家菩薩梅岳寺殿日
新寺殿

御母

梅窓妙芳大姉
新納駿河守是久女大永五年
十月十日 西福寺殿

御夫人

寬庭芳有大姉

御連枝

女子 鳥津治部少輔忠將室母同上

女子 佐多又太郎忠成室母同

天津正祐庵主 吉田次郎四郎位清室

天津芳祐庵主 鳥津下野守品久室

十五代

○貴久公 虎寿丸 又三郎 左五門尉 修理大夫
從五位下 陸奥守 伯國卿

○永正十一年甲戌五月五日生

○大永六年丙戌十一月十八日應勝久公命到麿府同二十七日加冠号又三

郎貴久受守護職上三歲忠良公攝行政

○同七年丁亥六月十五日鳥津夷久將襲公故密去處兒鳥津田布施自伊作

後平任伊作面忠兼公々開宴留三日同十八日餞送田布施

○鳥津忠広北鄉忠相等相議以公為太守兼帶伊相州之兩家為中興之主天

文十四年三月十八日也近衛植家以口野左大弁守相為使賜玉札及束帶

○天文十九年庚戌十二月十九日自伊集院徙麿府

○永祿七年三月十四日任陸奥守

○元龜二年辛未六月廿三日逝五十八大中良等庵主南林寺殿

御母

寬庭夫人 鳥津薩摩守重久女永祿六年癸亥
十一月九日

御夫人

雲窓妙安大姉

御連枝

忠將 初政久 又四郎 右馬頭母同上

女子 肝付河内守兼統室

女子 樺山安芸守善久室

女子 種子島左近太夫時亮室離別後肝付彈正
忠兼守室

尚久 曼秀丸又五郎左兵衛尉母上木筑後守貞時女

女子 母同尚久義久公前夫人永祿二己未十一月
十八日早世
花舜妙香

護摩所天神弘治三年丁巳九月九日御勸請板二兩無天滿大自在天神卜
有之永祿四年辛酉十一月十六日又々天神ノ絵像御勸請文祿二年貞明
公宮殿一字重而御造立

十六代

○義久公 初忠良 義辰 虎寿丸 又三郎
三郎左五門尉 正五位下 修理大夫
從四位下 法印萬伯 二位

○天文二年癸巳二月九日生伊作

○天文十五年元腹十四北鄉巖岐加冠又三郎下称

○同二十一年壬子六月廿七日將軍義輝賜諡字号義辰又改義久

○永祿七年三月十四日任修理太夫叙正五位下

○天正九年五月三日叙從四位下

○同十三年四月廿四日使忠平公為守護代掌国事

○同十五年丁亥四月六日羽柴秀長至日州兵二十万軍財部高城之間同十七日戰根白坂同二十五日秀吉舟至川内次太平寺○十九日松齡公見秀長野尻見秀吉鶴田○家久見秀長野尻中毒六月五日卒佐土原

○同年五月六日公發鹿兒島到伊集院雪窓院發髮方童伯同八日詣太平寺見殿下九日賜薩摩安堵之台書二十五日賜大隅義珍公日州諸原郡久保公々掃鹿兒島以女龜寿為質獻川内

○同十六年七月五日殿下賜食禄一万石長州幡州

○文祿四年乙未冬移隅州富隈讓鹿兒島忠恒公

○慶長九年甲辰十二月去高隈移回國々府新嘉坡名軍人城

○同十六年辛亥正月廿一日逝七十九貫明存忠庵主妙谷寺殿

御母

當窓夫人 入來院正忠重嫡女
天文十三年八月十五日

御夫人

幸辭妙香大姉 日新公女文祿二年
己未十一月十八日

門信院殿実溪妙蓮大姉 種子島左近
太夫時薨女

御連枝

義弘公

歳久 又六郎左衛門督入道晴養母同上

家久 又七郎中務太輔母肥知岡某女橋姫

御子 橋姫事案ハ本門丹波守親安女也丹波妻ハ臨陣左門女ニテ丹波に配す然地親丹波死いたし母子共ニ左門子臨陣佐兵ニ頼明家にて致養育成後之後 大中様御側に召召家久御出生有之候故ニ御系圖にも本文之通ニ載置候通古存ス右佐兵ニ九代之孫相良伊平次にて候事 文政四年宛方調繪

女子 御母日新公女薩摩守
義虎室蓮昌妙守庵主

女子 島津守右門尉彰久室母種子
島時姫女薨月淨瑞庵主

女子 龜寿母同前家久公御夫人
持明彭窓庵主興國寺殿

○天正十九年秀吉讓閩白養子秀次改号太閤十七代

○義弘公 初忠平 義珍 又四郎 兵庫頭
從五位下侍從 從四位下宰相 惟新

○天文四年乙未七月廿三日生伊作

○天文十五年元服十二太中公加冠

○同廿三年十月十九日受命主帖佐岩劍城三年

○永祿七年甲子 義久公以忠平公為日州藩鎮賜北原旧領真幸院在城飯野

○天正十三年乙酉四月為守護代司國事

○同十四年八月十七日賜將軍義昭諱字收義珍

○同十五年丁亥秀吉勳座五月廿五日賜大隅國

○同年八月收義弘

○同十六年戊子六月四日登大坂城秀吉呼之日宣任侍從同十五日賜口宣任侍從叙從五位下

○同年七月受殿下之姓氏称羽柴薩摩侍從豐臣義弘

○同月廿六日叙從四位下

○同八月五日賜日州諸原郡

○同十七年己丑去飯野移隅州栗野

○文祿元年壬辰二月廿七日發栗野一唯公從三月中旬到名護屋同四月十二日發名護屋五月三日著船釜山浦

○同四年乙未五月十日應召發巨濟六月五日著大坂上伏見城見秀吉

○同月廿九日賜薩摩大隅日州諸原郡國川目錄及朱印台書

○同年增封幡磨石見之内三千余石

○同年冬去栗野移帖佐

○慶長二年丁酉二月廿一日首途帖佐著船加德島

○同三年戊戌十一月廿四日發釜山浦著博多同廿七日著大坂廿九日著伏見

○同四年己亥正月九日五大老以奉書賜刀正采地五万石

○同年任宰相髮号惟新

○同年九月十五日開ケ原合戰十月上旬帰国屈舎松島

○同十二年冬自帖佐移加治木

○元和五年己未七月廿一日逝加治木八十五松齡自貞庵主妙円寺殿御母

雪窓夫人

御夫人

実窓芳真大姉

○稻荷神前流馬朝鮮御版朝為御立願興行射手十六騎

十八代

初忠恒 米菊丸 又八郎 正四位下少將

○家久公

陸奥守 薩摩守 中將 宰相

○天正四年丙子十一月七日生日州真幸院加久藤

○天正十三年元服十貫明公加冠町田出羽理髮

○文祿三年甲午春在堺平島甚左衛門臨也宅而病痘三月二十日於伏見見

太閤同二十六日見秀次聚衆

○三年四月流近衛信輔薩摩

○同年夏蒙秀吉命統家督

○同年八月辭京師同廿五日解纜名護屋同廿六日著釜山浦同晦日到日濟

○同年薩隅日丈量九月十四日始白大口郷翌年二月二十九日丈量

○慶長四年己亥正月五日五大老以奉書被任叙四位少將賜刀長光

○慶長七年冬城麿島上ノ山

○慶長八年冬初猷向島蜜柑

○同九年甲辰六月任陸奥守 此事在六月以前 國史詳弁之ヲ

○同九年神祖賜邸第木下七月起工冬成

○十一年丙午六月十七日家康公賜諱字改家久

○同十二年初如江戸

○同十四年己酉賜琉球國

○元和三年丁巳七月十八日任參議兼左近衛權中將

○同年九月朔日賜松平氏任薩摩守

○寬永三年丙寅八月十七日任權中納言叙從三位

○同八年辛未四月一日為大隅守

○同十三年以來有微恙

○同十五年戊寅二月廿三日逝麿城六十二慈眼院殿花心琴月大居士

御母

実窓夫人

御夫人

持明彰憲庵主

心広慶安大姉

御連枝

女子

島津豊後守朝久室御屋 天文廿三年甲寅生母北郷左馬助

忠孝女寬永十三年丙子十一月十一日卒夷清正真

鶴寿丸

涼山幻生

久保公

又市郎天正元年己酉生加久藤母同前

天正十三年元服十三加冠員明公理髮島津

家久天正十五年丁亥九月廿五日秀吉賜日

州真幸院及諸縣郡為實上京翌年版圖

同十七年己丑冬繼家督同十八年庚寅二月

廿八日從秀吉討小田原北条氏同九月九日

班軍文祿元年壬辰從軍朝鮮同二年

癸巳九月八日逝日濟二十一

一唯經參大權定門京德寺殿

天正八年庚辰生母同前同十六年

戊子二月二十三日和泉宮

早世朝月宗江大權定門

萬千代丸

久四郎天正十年丙午生母同前文祿四年

乙未七月四日卒蘭桂純香

忠清

大權定門德元寺殿佐志候租

御下初家伊集院忠 後嫁下野守久元

天正十二年甲申七月六日生母同前慶安二

年己丑八月十七日

卒虛憲從白桂樹院殿

○寬永元年十一月公以夫人及三子如江戸從是列國貴夫人江戸 ○寬永五年改為移地 ○寬永十二年使木田親政為鶴島移地頭移地頭始此

十九代
○光久公 初忠元 虎奉丸 又三郎 薩摩守
大隅守 從四位下 侍從 少將
從四位上左近衛中將

○元和二年丙辰六月二日生

○寬永元年甲子十月十四日元服九才号又三郎忠元家久公加冠下野字久元理髮

○同八年辛未四月一日登營加冠賜松平氏及御諱之字号松平薩摩守光久叙任從四位下侍從賜守家之刀大相国亦賜左文字之刀

○寬永十五年戊寅五月八日於執政土井利勝之第松平薩摩守命

○慶安四年辛卯十二月廿五日任左近衛少將兼大隅守

○寬永八年辛未四月朔日復源姓

○延寶元年癸 十二月廿八日叙任從四位上左近衛中將

○貞享四年丁卯七月廿七日隱居讓封國嫡孫綱貴公

○元禄七年甲戌夏在國疾病

○同年十一月廿九日逝應府七十九寬陽院殿泰雲慈温大居士

御母

心庇夫人 鳥養備前忠清女寬永二年
丑七月廿二日 逝江戸

御夫人

曹源院殿惠山永泉大姉

陽和院殿本嶽白勝大姉 半松中納言時廣卿
女正徳元年辛卯
八月十二日卒

笑時鹿卿弟交野大膳

太夫時貞入道可心女

御連枝

兵庫頭 慶長十七年壬子十一月九日生母鎌田
播磨政重女同十九年
甲寅正月廿八日天三歲

女子 慶長十八年生母備前忠清女
元和元年三月廿八日天三歲

女子 北郷山城翁久室慶長十九年三月三日生
母鎌田政重女寬永九年三月
五日早世十九輪桂貞玉

女子 彈正久慶室長十九年甲寅八月五日
生母相良日向入道閑栖女慶安元年
戊子閏正月九日卒三十五歲顯妙仙

女子 種子島左近太夫時壽室元和乙卯四
月廿日生母鎌田政重女寬永廿癸未
四月十三日卒廿九法名妙國

忠嗣 忠平忠明又八郎兵衛頭加
治木家祖母同前榮壽白英

久直 岩松丸又十郎式部大輔從五位下為又
四郎久敏養子後為北郷出雲忠
亮後嗣母同光久公卿安子聖

女子 元和四年戊午九月十三日生母鎌田政重女
寬永十四年丁丑三月二十四日卒二十

女子 元和五年巳未十月廿日生母同前寬
永十一年甲寅八月十八日卒十六

女子 元和六年庚申六月十八日生母同光久公
大和久章室正保二年乙酉五月十日卒
廿六歲岳英仙

忠広 初名山熊寬永九年奉家久公之命為山伏
稱慶忠坊十三同十二年為入峯家久公卿參
觀之節御供三寶院宮命先達職賜室之字
改家壽院同十六年遷俗改市正

忠尚 忠弘室壽市正雅髮萬山元和六年十二月
十八日生母同忠明得顯取公之長女御屋地
朝久之所領為朝久二男延寶五年丁巳三月光久
公令忠広去朝久之家為忠明之二弟準三男元
禄十六年癸未八月三日卒方山孤峯

忠紀 忠共梅千代出羽元和七年辛酉二月三日生母
宮原吉兵衛景辰女為町田 善久幸養子延寶
四年丙辰九月三日卒提印忠携

萬千代越後玄蕃頭從五位下元和八年壬戌
二月十九日生母同光久公為又四郎久敏後嗣

正保四年丁亥八月廿二日卒玉峯英閑

重永 七郎左近元和八年七月二十日生母鎌出政重女稱養七郎政重養子貞享五年八月廿二日卒瀧寬英仙

久雄 福寿丸安芸元和八年八月十一日生相良日向長辰女中丸下云月香妙雲大師母相良親女島津中務忠榮養子

寬文七年七月十二日卒松屋日山

女子 島津義前久賴室寬永九年九月廿四日生母鎌田政重女正保元年七月十九日卒廿一日桂貞秋

正勝 政由政政昭直正信松千代又七郎義後藏人寬永二年六月十三日生母牧源兵工胤親女鎌田治部政統養子寬文六年六月四日卒

義雲紹高

女子 江村平兵衛兼室寬永二年七月三日生母同光久公寬文十一年六月三日卒芳屋雲英

女子 寬永二年十一月十六日生母崎山八右工門盛秀女不日夭亡

女子 島津中務久茂室寬永三年七月十五日生母家村盛政重治女承応二年十二月一日卒月清貞寒

久国 初忠良右工門寬永二年十一月二十六日生母鎌田政重女伊集院右衛介忠臣養子寬文元年六月廿五日卒芳岩永春

忠心 志隆忠知忠康忠朝又上郎三郎左工門寬永四年五月廿五日生母川上伊豆秀政女初桂山城忠能養子後島津下總常

久後嗣延宝三年八月十一日卒四十九洞奇真仙

久朝 久立源助子右工門寬永四年十二月十八日生母牧源時女伊集院遠江久族養子

貞昭 元禄十七年二月十五日卒七十八無參玄量伊勢鶴丸傳人兵部寬永六年五月十四日生母崎山盛秀女伊勢兵部貞昌養子

寬文二年八月四日卒三十五幽潤堅心

久尚 又九郎寬永六年七月四日生母川村秀政女能山助七郎久辰養子正保三年正月九日卒十八花溪淨春

女子 寬永八年正月六日生母崎山盛秀女天亡

女子 入米院石見重額室寬永九年五月十三日生母家村重治女承応二年十二月廿日卒

女子 十二梅玉明心

女子 寬永十年三月十二日卒母崎山盛秀女天亡

男子 寬永十一年二月廿四日生母同光久公天亡

女子 寬永十二年九月生母同前夭亡島津國書久竹室寬永十三年十月十八日生母同前室永五年十月二十七日卒淨真智広

△綱久公 初久平 虎寿丸 又三郎 薩摩守從四位下 侍從

○寬永九年壬申四月朔日生江戶松田第

○同十九年壬午六月廿八日元服一十号又三郎久平島津兵庫忠平代光久公

加冠川上因幡久國理髮

○慶安四年辛卯十二月廿六日大樹家編公加首服賜御名一字及称号称松平薩摩守綱久叙任從四位下侍從

○寬文十三年癸丑二月十九日逝東武芝第年四十二泰清院殿関山良無大居士

御母 曹源夫人 伊勢大隅貞豐女萬治元年戊戌六月十一日卒

御夫人 真修院殿孝延妙榮日長大姉

御連枝 女子 酒母伊勢氏右馬頭久雄夫人德雲院殿美參貞貞大姉

女子 辰母松沢八右衛門女鳴津
 美作久憲室嗣憲貞嗣
 女子 西母黒田友右衛門頼清女
 島津又八郎久憲室桂岩消香
 久定 初久統又作次郎左衛門母松沢氏北郷式部大輔
 久直後嗣早世天心法高
 忠長 幸壽丸振澤介外記初統喜人家後為兄久定後嗣
 寛文二年二月朔日 光久公令忠長改北郷氏永
 復島津号書若玄霜母家女房
 久零 虎松丸又六母教仁郷大神房頼重女
 島津又五郎久近後嗣雪琴探白
 初貞朝虎三郎市右衛門内記備後豊前備前
 初為伊勢兵庫貞衛養子後為佐多
 久達 丹波久利後嗣正徳元年九月十五日
 吉貴公令久達收佐多永復
 島津母昭麟一角母家女房
 久侶 初久雄虎助極八權兵衛忠岐島津又助忠清嗣
 晉山悦心母津留筑右衛門正將女
 女子 虎島津又十郎忠興室母新納佐左衛門忠清女
 寛雲貞照
 正長 松千代又七良出雲鎌田藏人
 正勝養子虎島英斑母家女房
 女子 龜入来院隼人重治室
 即証徹心母新納氏
 忠智 初忠顯幸壽丸權十郎市右衛門後守齊名
 香雲母玉利九兵衛重親女初島津又助忠清後嗣
 後兄島津外記忠長後嗣議雲玄道
 久亮 初忠辰虎千代求馬右衛門又兵衛女房
 兄喜入相澤介忠長後嗣
 天与道雲母家女房
 久明 初久始虎松丸尾之丞式部大藏兄八人
 繼別家故元禄十四年十月十四日 綱貴公
 以久始準二男法身玄雲母家女房
 萬鶴北郷宗次良忠昭室
 女子 節貞元岑母家女房
 千龜伊勢兵部貞顯室
 女子 龜山白泉母家女房
 女子 長島津國書久洪室關心宗鏡
 母有馬新左衛門純実女

久當 初久寛松千代權七伊賀縫殿勘解由將監
 島津又六久岑後嗣郭然道性母家女房
 女子 虎鶴島津内記久文室
 心海澄明母新納氏
 外記 心參全無母家女房
 久記 千代徳源七朝母元禄十四年十一月十四日
 依兄久明之例準四男英安全雄母家女房
 久祐 長千代又次郎宇右門綱部桂太郎兵工久常
 養子心関一幸母虛臨与左門國哭女
 女子 鶴織田内崎守信盛夫人母平松中納言
 時庸郷女雲岩山半兵衛直朝女智性院
 殿門月寿相
 女子 千代鶴 桂外記忠相室
 心光清月母家女房
 基明 初義扶松之助淡路式部阿多内膳忠榮後嗣
 永禄十四年十月十八日改阿多復島山母味方
 權左工門正信女
 女子 千代松種子島彈正伊時初室
 妙達日成母家女房
 女子 龜丁代嫁頼雄上膳久明
 離別別室慈宜母家女房
 女子 安千代肝付帶刀兼柄室
 光雲了瑞母玉利重親女
 女子 娶妻千代種子島彈正伊時後室母和泉
 茂兵工忠參女史津田氏女不日死
 重矩 初久重虎助又一左工門主馬入来院
 又兵工親軍後嗣海濤心印母家女房
 久房 千代徳主馬求馬与兄久記同日
 準五男山容心海母家女房
 女子 松鶴嫁島津主水久輔後離別母家女房
 女子 龜松島津源次忠伴室
 覺孝了智母家女房
 久雄 初久茂源七權七備中監物市太夫久電
 龜島津宅殿久侶養子母家女房
 女子 龜千代 三歳夭亡母家女房

女子

德島北郷佐左門久嘉室
額照慈月母家女房

久岐

權之助又之丞左門摩高橋七良右三門權磨之孫女
為養子後摩高橋家因母氏買稅所氏領心門禰母
家女房

二一代

○綱貴公

初延久 虎寿丸 又三郎 修理大夫
從四位下侍從 薩摩守 左近工少將
從四位上 左近工中將

○慶安三年庚寅十月二十四日生芝郎

○明曆四年戊戌四月六日元服九歲 稱又三郎延久光久公加冠冠島津又八郎久

薰理髮

○寬文七年丁未十二月二十五日登營 家綱公加首服賜御名一字与称号

稱松平修理太夫綱貴叙任從四位下侍從

○同十三年癸丑七月十八日為薩摩守

○貞享十四年丁卯七月二十七日登營有台命襲封是父綱久公先逝故受祖

父光久公之讓也

○同年十二月二十五日轉任左近工少將位階 如元

○元祿元年戊辰八月六日襲封之後初稱國光久公使佐多勢前久遠讓与伝

來之宝器許多

○同八年乙亥十二月十八日叙任從四位上左近工中將

○同十年丁丑七月助役東叡山本堂翌年戊寅七月廿一日功成

○宝永元年甲申九月十九日逝東武芝第五十五番葬遺體福昌寺大玄院殿

昌道元新大居士

御母

真修院殿 松平隱岐寺定頼女
天和二年十一月七日卒

御夫人

一 常証院殿觀了日晧大姉 松平左兵衛信平女
寬文十三年五月五日卒

○享保十八年丑六月納影像及木下寿四守

三 信証院殿寿國總宗元持大律尼

三三

延寶五年壬子國重女初名梅ヶ枝

後於豐宝曆八年正月晦日卒

(朱書) 附△享保云々此延久入ル 上杉卿正大綱綱靈女

二 心空院殿靈雲貞清尼大姉 実吉良義英女綱靈

之姉延寶八年申十一月

後東覺院殿心月光安大姉 二十日離別宝永五年

子九月二十五日卒

○延宝三年卯二月二十九日入與御牌享保二年酉十二月廿八日古貴公

御安置月牌斷(料カ) 白銀十五枚寄附

御妾

蘭室院殿身安貞法大姉

御連枝

女子 酒井觀負佐忠隆夫人年二十九養運

院殿貞信妙長日仁大姉母定頼女

六 七 天亡母同

久 季 初久住虎助内匠兵庫島津

又八郎久薰養子梁山元桂

女子

御勝島井薩摩守忠教夫人四十一

母同忠照院殿順孝妙養日真大姉

○延宝三年乙卯九月十七日生鹿府

○天和三年癸亥五月三日於高輪亭元服第九 稱又三郎忠竹光久公加冠冠島津

凶書久竹理髮

○元祿二年己巳十二月十五日登 菅綱吉公加首服賜御名一字与称号稱

松平修理太夫吉貴叙任從四位下侍從

○宝永元年甲申十月廿九日於執政土屋相模守政直之弟伝襲封命

○乙 同六年女使始

○同六年己丑五月建南泉院

○同年六月守邸家老見始此

○同十一年十一月廿七日為薩摩守

乙

○同年十二月十一日転任左近衛少将位階如故

○同七年庚寅十一月十六日叙位從四位上左近衛中將

○正徳四年甲午十一月廿九日叙正四位下

○享保六年辛丑六月九日有台許隠居讓封国於継豊公

○同月十一日改上總介

○同七年寅二月十六日発江戸四月二十一日入大磯館

○同十年巳六月狐狩

○十七年壬子八月十二日有台許剃髪上總入道

○延享四年丁卯十月十日逝大磯館七十三淨国院殿鑑阿天清道照大居士葬淨光明寺

○寛延元年戊辰六月二十七日納遣髮高野山奥院島津仲久鄰預其事

御母 二階堂十左工門宣行女天和二年二月九日卒葬大同寺俗名於重

御夫人

靈菴院殿潜顯妙能日淵大師

福姫松平越中守定重女元文四年巳未八月五日卒六十二

卒高輪邸葬谷中瑞林寺

○元禄七甲戌廿一日御入興十七

御妾 月桂院殿心一猷珠大師

御連枝

女子 松島津淡路守惟久夫人父島津久洪母光久公女綱貴公為養女惟久卒後称許徳院三田館卒六十七

菊次郎 延宝八年十一月生母二階堂氏天和元年六月廿二日天

久壽 初忠英久通久陳虎徳丸三郎五郎又八郎周防母江田氏無理性流

忠直 虎安丸又四郎亥希久恵養子同母静海則漏

女子 龜姫近衛大納言家久卿前藤中母同十六卒英光院覺出明大師

久方 初久晃愛壽丸又之進因書母同母書久洪養子活山道機

清純 徳慈丸仙十郎母同母寝丹波清雄養子石雲了柱

女子 於菟於榮母同嫁松平飛騨守定英生男後離別

久東 虎房丸母同嶋津勘解由久留養子了木性空

鍋安丸 母二階堂源右工門行格女如幻房法印大僧都本覺大和尚

女子 奈百島津藤次郎久智上

女子 室母江田氏常心玄四

女子 妻町田郷九郎久徳室母二階堂行格女

女子 剛桂太七郎久音室母江田氏康貞良實

久福 仁十郎母二階堂行格女島津下水久補養子

二十二代

○繼豊公 初忠休 鍋三郎 又三郎 大隅守 從四位下侍從左近衛少将 從四位上 左近工中將

○元禄十四年辛巳十二月廿二日生高輪第嫡母 靈菴院殿 以忠休為子

○宝永六年巳丑四月二日元服称又三郎忠休吉貴公加冠島津帶刀仲休理髮

○正徳五年乙未四月五日登管家繼公加首服賜御名一字及称号称松平大隅守継豊叙任從四下侍從

○享保六年辛丑六月九日有台命襲封執政戸田山越守忠真伝之同月廿八日謁 吉宗公謝襲封

○同年十二月十八日転左近衛少将位階如故

○同十四年巳酉六月四日登管結婚竹姫君以今歳葬為期而謁 吉宗公家重公

○同十七年七月二十四日賜芝第東北隣六千八百九十坪副地

○同年十二月十一日竹姫君入興芝第守殿

後

○同十五年戊正月七月初獻若菜賀儀香一

前

○同年十二月十六日叙任從四位上左近衛中將

甲

六○寬延二年巳二月四日發江戸四月二十二日入四蛇邸

乙

七○宝曆十年庚辰九月廿日逝應付六十右邦院殿門鑑亭端居士

三○同十六年亥四月十五日按田邸火

四○同十七年子四月四日公到江戸上使詣芝邸自是遂為故事

五○同二十年卯閏三月十三日老中召留守居許令刀番登階

○甲

御母

月桂院殿

名越右衛門恒雄須磨
延享元年七月三日卒
葬淨光明寺

御夫人

瑞伯院殿松藏貞高太姉

松平長門守吉元女皆姫
享保十二年三月廿日卒

江戸葬大門寺御年二十

1年寅二作ル

○享保八年卯四月二十一日入興十五

淨岸院殿信譽清仁裕光大禪定尼

清菊寺大納言繼定卿女 綱吉公妾女

竹姫君安永元年十二月五日逝

○享保十四年酉十二月十一日入守殿

御妾

妙心院殿実法道微大禪定尼

嶺松院殿寒心貞操太姉

御蓮枝

女子 糸喜成史成史代父島井伊實守忠教母綱久公女初嫁牧野備后守
成史卒後吉貴公為養女嫁阿部伊勢守正室
光國院殿貞蒼天教普潤太姉

女子

滿姫母名越氏近衛内大臣家久公孫中
正徳五年十一月晦日卒七十七光相院殿室后
惠勝太姉

女子

幹姫元禄十七年三月十一日江戸生母名越氏
嫡母雲龍以為子早世
明嚴院殿霜壽姫光大禪堂女

忠五郎

宝永四年四月廿日江戸生母名越氏
同五年十月二十三日夭亡天眞
院殿蘭溪霜淵大禪堂子

貴傳

久典小源太玄蕃備中備前
静山母同玄蕃久直養子

女子

久嚴島津大学久章室母同
弘母相良大藏長賢女夭亡

女子

壯之助周防母名越氏英郎兵二兼近女
号称林院為二男令併越前島津家名跡

忠紀

知之助圖書母郷田氏圖書久倫養子
德姫母郷田氏嫡母以為子

貴澄

小源太玄蕃備前越後備前美作
母郷田氏兄貴傳為養子

女子

民母近藤三左門嘉包女号貞樹院
三次郎因幡母近藤氏相統和泉家名跡

忠温

忠雄忠通安之助母近藤氏為孫養孫左
二門清養子号小松後為兄忠郷後嗣

女子

供母近藤氏

二十代

初忠顯 益之助 又三郎 薩摩守 從四位下侍從
左近工少將 從四位上 左近工中將

○宗信公

○享保十三年戊申六月十二日生芝第竹姫君養為子
○元文元年丙申三月十八日元服号又三郎忠顯島津但馬守忠就代繼豊公
加冠樺山主計久初理髮

○同二年丁巳七月朔日從先格登當謁吉宗公家重公

○同四年己未八月四日賜松平称号嫡子代々許之

○同年十二月十一日登營吉宗公加冠賜御名一字称松平薩摩守宗信叙任從四位下侍從

○延享三年十一月廿一日襲封

○同年十二月十八日転任左近衛中將

○寬延元年公以實慶使具志川王子如江戸九月九日免鹿兒島

○同年十二月十三日叙任從四位上左近衛中將

○同二年己巳七月十日逝歸府二十二慈德院殿俊嚴良英大居士葬福昌寺御母

妙心院殿 裝谷善左衛門出女於嘉久
天明四年正月二十三卒

御夫人

公聘尾張候宰相宗勝女房姫未成昏而房姫卒
又聘其妹嘉知姫亦未成昏公公如國是年薨

御連枝

貞母四木仲兵衛為親女稚山左京久智室
寬延四年辛未八月十一日卒
連昌院殿淨心貞誓六姉

女子

田德公

女子 鐘母洪谷氏肝付彈正兼伯室

女子 鐵母同前島津市太夫久隆室

久峯 長熊太郎次郎母伊地知八四郎季鄰女
島津木上久豪養子明和九年壬辰六月
十九日卒四十一歳宮院殿君顯元姫大居士

女子 菊姫真宮院母竹姫片松平
修理太夫重政夫人

女子 就享保十九年六月廿日坐同廿年十月七日天亡
母伊地知氏門了院慧心幻智御重女

定教 千之亟玉馬石見大和母洪谷氏入来院主馬定恒養子
天明元年辛丑十月九日卒四十六歳院殿和雲里曉大居士

二十四代

○重年公 初久門 善次郎 兵庫 薩摩守
從四位下 左近五少將

○享保十四年己酉二月十一日生慶府初為島津兵庫久季之後嗣 宗信公

逝無嗣子故請朝為慈德公養子

○寬延二年己巳十一月十日襲封

○同年十一月二十八日登營 家重公加冠賜御名一字称薩摩守重年叙任從四位下左近五少將

中△○下文左歷元云々此二入ル
年号不レ知

○家老平田親貞正輔大目附伊院十藏久東領治水事

○宝曆三癸酉年十二月二十九日承命助治美濃伊勢尾張之諸川 前条此二入ル歟

○同五年乙亥六月十六日逝一後以六月十一日為御忌日蓋更忌祭之日更

逝日之謂也「東都芝年二十七日德院殿寬満良義大居士

○同年同月二十六日靈車葬江戸八月十八日夜到鹿兒島入福昌寺二十一日葬

御母

嶺松院殿 於發免島津求馬久房女
天明八年十一月廿日卒

御夫人

二智光院殿心願貞鏡大姉 於村島津大學久翠女
宝曆四年壬二月二日卒江戸
葬大田寺

○△寬延三云々比二入ル
一正覺院貞鏡妙雅大姉

△寬延三年壬二月二十二日入宮同年八月朔日如江戸
甲上文此印二入ルヘシ

△宝曆元年未六月二十日大御所吉宗公殖有德院殿
同前条二統ク

同年琉球王尚喜 後改 嗣位同二年申九月十一日謝恩使今敏仁王子如江

戸

二十五代

○重豪公 初久方 忠洪 善次郎 兵庫 薩摩守 上總介
榮翁 從四位下 左近五少將 從四位上 左近五中將

○延享二年乙丑十一月七日生慶府

○宝曆三年癸酉十二月十五日元服丹兵庫久方田德公加冠新納内藏久品

理髮

○初重年公為太守時留 公為重年公之後寶曆四年 重年公携 公朝東武請朝為世子稱又三郎忠共

○同五年乙亥七月廿二日賜襲封時 公尚幼島津淡路守久柄代承命

○同八年四月十九日始謁 大樹家重公儲君家治公謝襲封

○同年六月十三日登營元服賜御名一字叙任從四位下少將稱薩摩守重豪

○明和元年十一月十三日轉任從四位上中將

○天明四年九月十五日登營執政任命曰自今 望每朝到大廊下第二房可

優恩若歲首令節隨先蹤可也拜命之序

○同年十二月廿八日登營先自此期望於白書院歲首令節大広開述賀儀於

是執政任命曰歲首令節於白書院期望於照書院可述賀儀

○同七年正月廿九日請朝隱居稱上總介

御母

△正覺院殿 島津備中貴備女延享二年十一月七日卒俗名於富

御夫人

△慈照院殿内庭靈妙大姉 保姫徳川刑部卿宗尹女明和六年九月廿六日卒

△玉貌院殿幸山妙巖大姉 多干姉甘露寺前大納言矩長卿女安永四年十月二十六日卒

御妾

△慈光院殿仏心意証大姉 於登世御部屋市田喜内貞行女享和元年四月十日晦日江戸卒

△清貌院殿心月麗光大姉 於理榮有川十右門貞寛養女寛政十一年亥十月死為次郎様母

二十六代

○齊宣公 初忠嘉 虎寿丸 又三郎 豊后守 薩摩守 修理太夫 從四位下侍從 左近工少將 從四位上 左近工中將

○安永二年癸巳十一月六日生東武芝

○天明四年申辰九月廿七日元服守又三郎忠嘉重豪公加冠島津伊賀久金理髮

○同六年七月廿日初謁大樹家治公儲君家齊公

○同年十二月七日登營於黑書院元服家齊公加冠賜御名一字稱豊後守齊

宣叙任從四位下侍從

○同月十三日松平周防守康福任命曰自今歲首令節於白書院月次於黑書

院可述賀儀且每登營須就大廊下第二房

○同七年正月廿九日襲封

○同年二月十五日登營謝賜襲封之命

○同年三月十八日轉任左近衛少將

○寛政二年庚戌十月廿七日叙任從四位上左近衛中將

○文化元年子九月十三日改薩摩守

○同六年巳六月十八日請朝隱居稱修理大夫

御母

御内証様 於千万提前中納言代長郷女

御夫人

光照院殿 佐竹右京太夫義和姉梅姫 有馬中務大輔賴貴女

貞心院殿端嚴妙相大姉 恒姫寛政元年酉九月廿六日卒

芳蓮院殿幸寧清心大姉 佐竹右京太夫義和妹於梅幸姫敦姫榮榮姫寛政八年辰六月十一日卒二十以同月八日為忌日

蓮亭院殿香顔玉容大姉 丹羽左京太夫長祥妹字姫文化十二年乙亥六月廿三日

御連枝

女子 於惜宝曆十三年未十一月生明和元年中七月廿六日天二歳照雲院殿性嚴惠月大禪童女母

女子 敬姫明和七年寅十月生與平九八良昌男約昏未成天明八年申四月廿四日卒十九淨信院殿本因勳妙大姉母

女子 於德後茂姫安永二年巳六月生
寢 將軍家齋公御台

女子 於夏安永五年申四月生同七年戌六月十三日天
翠院殿松屋惠吟大禪童女母

女子 於克安永五年申十一月生同七年戌五月二日天
蓮心院殿清實妙香大禪童女母

女子 於陽牧姫安永七年戌二月生天明四年辰七月二十六日天
芙蓉院殿牧憲智玉大禪童女母市田氏

女子 明姫雅姫突島津兵庫久微女島津淡路守久口室

品高 富之進九八郎大膳太夫天明二年寅正月生
奧平大膳太夫昌男覺養子母鈴木弥藤次

男子 天明二年寅二月十八日生同廿三日天
青林院殿幻實靈苗大禪童子母

二龜五良 天明四年辰二月廿八日生同七年七月廿八日天
香樹院殿秋露幻清大禪童子
母島津武部少輔密子ノ筋

三感之介 天明五年午八月十七日生同六年四月十一日天
義光院殿天真祐明大禪童子母於豐方

女子 於礼松平仙馬守養女

一忠厚 雄五郎因幡突島津兵庫久微子天明二年丁寅
五月十九日生母島津式部少輔密子之筋

男子 省之進島津兵庫久口養子

四久亮 時之聖諸之聖藏人肥前守養
有馬左兵衛佐齊純養子母

寛政元年酉六月十九日生

為次郎 養母市田氏寛政二年戌十二月廿一日生同八年辰七月五日
生同八年辰七月五日天靈珠院殿本光慧明大禪童子母
有川十右衛門 女

乘之助 母八南品川天王寺門前居住高木玄蓮養女三而
証文系出置後八次父佐兵衛文取直ス

寛政七年卯年生同九年巳三月七日天天南院殿

玉質潤光大禪童子母杉浦作兵衛女

逢之進 寛政十年午七月生同十一年未七月廿日天
蓬窓院殿惠旭秀光大禪童子母杉浦氏

豹治良 享和二年戌十一月廿八日生文化元年子三月
三日天宗台院殿瑞琴幻調大禪童子
母杉浦氏

○齊興公 初忠溫 虎壽丸 又三郎 豊後守
從四位下侍從

○寛政元年酉十一月六日生麗府御実母江戶浪人鈴木清七女芳蓮院夫人
養為子

○享和二年戌十一月九日元服号又三郎忠溫 齊宣公加冠市田勘解由教
国理髮

○文化元年子六月初日初謁大樹家齊公

○同年十月四日登宮於黒書院元服 家齊公加冠賜御名一字称豊後守齊
興叙任從四位下侍從

○同六年巳六月十七日襲封

同年七月九日登宮賜賜襲封之命

同年十二月十六日転任左近衛少将 位附
如元

御母

御内証様 於八百 鈴木甚五郎勝直女

御夫人

富姫 松平出羽守治郷女寛政十二年申三月天

弥姫 松平相模守齊邦女

御連枝

女子 操姫松平銀之進齊邦夫人後相模守後嫁本田下總守康頼

女子 於隣寛政九年午二月生種子島鶴下代妻母島津仲久隣 後函翁女
久隣

剛之進 寛政十年午二月生同月廿九日天幻住院殿貞如淨空大禪
童子

寛二郎 寛政十一年未二月二十九日生当御前様御養御実母小
晋請与中根平平後若水女

女子 英姫美姫寛政十一年未十月生享和元年酉八月十七日天
光容院殿妙台慈鏡大禪童女母鈴木甚五郎女於八百

職之助

寛政十二年申七月半、享和元年酉四月十一日、天宝池院殿、蓬岸清心大禪堂子

女子

祀姫隨享和元年酉七月廿二日生、伊達兵五郎、奏後島津護之助、忠嫁ス

武五郎

享和二年戊五月十五日、生島津若狹忠、養子

女子

於美寿享和二年戊五月廿日生、同年九月十七日夭、瑞光院殿、月心秋桂大禪堂女

女子

於長享和二年戊七月半、島津太郎次郎妻、母青木林右エ門娘

泰之進

文化三年丙寅一月半、島津凶書久、養子、同月、母木休右エ門女

啓之助

文化二年丙寅二月半、島津美濃久、婿養子、母荒田八右エ門女

鎌次郎

文化三年丙寅二月半、島津玄蕃久、養子、母林玄長女

高輪

女子

富姫

女子

寿姫

原書込得能彦左衛門通古

明治二十年一月二十四日

筆者 國田英藏
糾合 平岡之隆
同 五代徳夫

鹿児島県史料刊行委員会

(50音順)

川越正則	南日本新聞社
芳即正	鹿児島市教育委員会
北川鉄三	鹿児島大学教育学部
桐野利彦	鹿児島県立国分高等学校
五味克夫	鹿児島大学法文学部
郡山良光	鹿児島県立甲南高等学校
小西四郎	東京大学史料編纂所
犀川錠吉	鹿児島県教育庁
竹内理三	東京大学史料編纂所
原口虎雄	鹿児島大学水産学部
福満武夫	鹿児島県文化センター囑託
宮下満郎	鹿児島県立鶴丸高等学校
村野守次	鹿児島県立甲南高等学校
桃園恵真	鹿児島大学法文学部

非売品

昭和四十一年三月三十一日

発行所

鹿児島市城山町一
鹿児島県史料刊行会

印刷所

鹿児島県教員互助会印刷部

